

FRANCE SHOIN NAPOLEON BUNKO

Fカップ女子高生は♡♡作家!?

ただいま執筆中!

紅くりす 画 猫島 礼

フランス書院
ナポレオン文庫



F-Cup Joshikohsei wa ♡♡ Sakka!?

Tadaima Shippitsu-chuu!

Fカップ女子高生は♡♡作家!?

ただいま執筆中!

紅くりす

画 猫島 礼



フランス書院 ナポレオン文庫

Fカップ女子高生は♡♡作家!?

ただいま執筆中!

●もくじ



くりすからのメッセージ 9

♥第1章 ポルノ作家は女子高生!? 11

♥第2章 Fカップで悩殺しちゃえ 36

♥第3章 濡れて乱れて初体験! 60

♥第4章 朝帰りでおしおきよ♡ 84

♥第5章 振り袖姿で危機一髪! 109



カバー＆挿画＝猫島 礼

●第6章 蘭とユウヤの衝撃キッス 134
●第7章 拷問されてエクスタシー!? 165
●第8章 秘密のフィルムと黒いブラ 188
●第9章 遊園地のラブラブ大作戦♡ 217
あとがき 268

MAIN CAST



登場人物

榊菊華 [*Kikuka Sakaki*]
英里奈の親友。夜遊び大好きなイケイケコギャル。

椎名英里奈 [*Erina Shiina*]
16歳でFカップの高校1年生。実は人気ポルノ作家「黒須裕也」。なのにバージン!?

ユウヤ [*Yuuya*]
ディスコで出会った英里奈の理想の人。バージンをあげようとするが……。

早乙女蘭 [*Ran Saotome*]
英里奈のライバル。超セクシーな美人ポルノ作家。

原田 [*Harada*]
英里奈が一度も会ったことがない謎の担当編集者。

森丘由美子
[*Yumiko Morioka*]
英里奈の小説のヒロイン。美貌のニュースキャスター。

AAA..



Fカップ女子高生は♡♡作家!?

ただいま執筆中!

くりすからのメッセージ

もぉ！　どうしよう？　困っちゃうなぁ。

だってね、「紅くりすの私生活のことが知りた～い！」っていうお手紙がた～っくさんきちゃってるんだもの。どうしたらいいかしら？

……ん～とぉ。そうねぇ、それじゃあ、今回はちこっと前のわたしがどんな女の子で、どんなことを考えていたのか、なんてゆうことを中心に書いてみようかな？

もちろん！　いつものように、愛液したたりペニちゃんおっ勃つスーパーハードなHシーンと血沸き肉踊りまくる冒険談はたっぷりコッテリてんこ盛りにしちゃおうっと！　それからそれからお笑いとロマンスとSMをちょっぴりずつ入れて、ストーリーは「1粒で二度おいしいゾ！」ってゆうふうにしちゃおっかな？

でもでもね、こんなことを書いてみんなに読んでもらうのって、めっちゃバリバリ恥ずかしいから、主人公はくりすじゃなくて、架空の女の子、英里奈(えりな)にしちゃおう。とゆーことは、これから英里奈が経験すること……たとえば誰にも触らせたことのない大切なところを幼なじみの女の子にれずれず♡されちゃったり、見ず知らずの男にバージンをあげちゃったり、とかゆーことは、くりすも経験ずみなんだってこと⁉

やーん、もぉ！　一番の親友にも話してないことをみんなに読まれちゃうだなんて、考えただけでアソコがジュクジュクになってきちゃう！　両脚のつけ根の奥が熱く潤ってくるのが自分でもわかるの。いつの間にか乳首まで硬くなってたりして、すごーく淫らな気分だわ。気持ちよくなるまで、お豆を指でチュクチュクいじってみちゃったりして⁉

ああんっ、こんなの、すごぉく恥ずかしいっ！

だからお願い、どこからどこまでが本当のことで、どのへんがフィクションなのかは、わたしには聞かないでね。だってだって、心から大切だと思える人ができたら、その人にだけは、わたしのすべてを打ち明けるつもりなんだもの……。

それじゃあ、これからはじまるお話を最後までたーっぷり楽しんで、あれこれいろいろ想像してみてね♡

第1章　ポルノ作家は女子高生!?

知らなかった。あの**小室**(こむろ)**教授**に、こんな趣味があったなんて……。

「コートをひろげるんだ」

先月19歳になったばかりの由美子(ゆみこ)は一瞬ためらい、小室の顔をじっと見つめる。小室とはパーティアシスタントのアルバイトをしていた時に知り合った。小室は某大学の教授で年令は40代後半。最初はデートをするだけの関係だったが、小室は由美子が大学の学費と生活費をバイトで稼いでいると知り、ある提案を持ちかけた。

「金銭的な援助をするかわり、週に一度、きみの肉体を提供して欲しい」

由美子は迷い、先週になってようやくOKした。

「聞こえなかったのか？　コートをひろげるんだ」

由美子は命令に従い、ベージュのロングコートの前をはだける。柔らかな生地の下から輝くような裸身が現われた。上からB90のCカップ、W60、H98の抜群のプロポーションだ。首に巻きつけられた幅5センチはある黒い皮のベルトとコート、蛇皮のピンヒール以外はなにも身につけていない。

由美子はうるんだ瞳で小室を見つめた。

もう真夜中をすぎたというのに、代々木公園にはまだたくさんの男女がいる。ベンチに座り、愛しげな言葉をささやき合うカップル。茂みの奥で熱い抱擁をかわす恋人たち。耳を澄ませば、激しいキスや粘膜のこすれ合う淫らな音まで聞こえてくる。

「も、もう、堪忍してください」

哀願する声は震え、羞恥に頰を染めてそわそわとあたりを見まわしている。

けれども、小室はかぶりを振る。ベンチに座り、目の前に立つ由美子の裸身を見あげて冷やかな声を放つ。

「おまえは奴隷だ。所有者であるわたしが命令すれば、いつでも、どこにいても尻を差しだす愛奴なのだ」

「そ、そんな……」

由美子は両腕をだらりと落とし、すすり泣きをもらす。

「コートを脱いで地面に四つん這いになれ」
「か、堪忍してください……」
「逆らえる立場だと思っているのか？」
小室は由美子の首のベルトにつけられた鎖を乱暴に引っぱった。
「あっ……」
はずみで地面に膝をついてしまい、由美子は抵抗する余裕もなく小室の命令するままの姿勢になってしまう。
「覗き魔たちの前でお前の処女を奪ってやる。ありがたく思うんだな」
「いっ、いやぁっ！」
叫んだとたん再び鎖を引っぱられ、由美子は地面に転がった。すべすべした白い下腹に足を乗せられ、軽く踏みつけられる。
「それ以上大声を出してみろ、鎖をベンチにつないだまま放置するぞ。警官がくるまでの間、女に飢えた男たちの餌食になるがいい」
「うっ、ううぅ……」
由美子は自分の悲運を呪い、涙を流していた。
「お、お願いです。どうかそれだけは……」

小室が足をどけると、由美子はペタンと地面に座りこみ、コートを脱いだ。青白い街灯の光に、張りつめた乳房の素晴らしい裸身が輝く。肌寒い夜風に刺激されて乳首がピンと硬くなる。

「ベンチに両手をつけ」

小室は差しだされた形のいいヒップをつかみ、背後から片手を股の間につっこむ。

「あっ……」

「なんだ、いやがるわりにはもう濡れてるじゃないか」

複雑な花園の中心を指でいじられ、ぬちゃぬちゃといやらしい音があたりに響く。背筋がゾクゾク震えて、腰がジーンとしびれてくる。

「ひっ、ひぐぅう……」

乳房をわしづかみに揉まれ、敏感なクリ×リスを乱暴に嬲(なぶ)られる。縮れた毛で周囲を飾られた秘唇の中央から溢れだした愛液が、白い太腿を伝い降りていく。

「もっ、もう……あ、あぁあ……」

由美子はすっかり理性を失っている。自らヒップをくねらせ、息を荒くはずませる。

「こんな場所で乱れやがって。おまえ、本当に処女なんだろうな?」

小室は汗の光る背中をベロリと舐めあげ、白桃のような尻に平手打ちをくれた。


AAA...
Guchu
Guchu

由美子はひぃぃっと声をあげてのけぞり、ガクガクと頭を縦に振る。オナニーでは味わえない快感が、濡れそぼった狭間(はざま)から背筋にかけてを震わせている。もう気がおかしくなりそうだ。意識は薄れ、自分がどこにいるのかも思いだせない。無意識のうちに叫んだ。

「お願い、入れてぇっ！」

ヒクつく女陰に、硬くそりかえった小室のペニスがずぶずぶっと押しこまれる。

「あうんっ……」

由美子はのけぞり、ヴァギナをこする剛棒に反応する。ここが公園であることも忘れ、腰を振ってよがり声をあげる。

「いっ、いいっ！　もっとぉ……もっとぉおっ！」

エレクトしたペニスを秘唇に打ちこまれるたび、由美子の身体を目もくらむような快感が突きあげる。

不思議なことに、処女を破られた痛みは少しもない。暗がりの中、バックから太竿でおま×こを貫かれているというのに、閉じたまぶたの裏はまばゆい光でいっぱいだ。

どうしてこんなにまぶしいの？……

目を開けた瞬間、由美子は茂みの中で男がカメラを構えていることに気がついた。

「いやーっ！　撮(と)らないでぇーっ！」

小室は絶叫する由美子をバックから犯しながら、耳もとでささやいた。
「あれは保険だ。おまえがわたしを永遠に裏切らないためのな」

☆

「あー、もうダメっ！」
机に突っ伏したのは**椎名英里奈**(しいなえりな)だ。クリンと長いまつ毛にふちどられた大きな黒い瞳。ぽっちゃりした愛らしい唇と卵形の美しいフェイスライン。背中の中ほどまである黒髪をかきあげ、困ったような表情でため息をつく。16歳になったばかりの高校1年生だ。
「もー書けないっ！　これ以上書けないよぉっ！」
英里奈はワープロの画面をにらんだまま、バシバシ机をひっぱたく。
英里奈は小説家なのだ。それも、純文学とかいうカッチョイイ代物ではない。若者向けのポルノを書いている。ペンネームは『**黒須裕也**(くろすゆうや)』。Hな小説を本名で書くのはめちゃめちゃ恥ずかしいので、わざと男の名前を名乗っている。
「もーっ！　処女の女の子が、ホントに1発目で昇天できたりするのかしら？」
英里奈は誰にともなく問いかけ、両手で髪をくしゃくしゃにかき乱した。大きなため息をついて天井を見あげる。そこにはB全判のモノクロポスターがデーンと貼られていた。
英里奈がシリーズに参加している好男出版(こうだん)の広告用のもので、半年くらい前、地下鉄で駅

貼りになっていたのをひっぺがしてきたものだ。

ギリシャ神話の神々を思わせる腰布ひとつの姿で、片手には文庫本をかかげている。肩にたっぷりと盛りあがった筋肉は逆三角形を描き、ほっそりとした、だが頑丈そうな腰へとつづいている。秀でた額にすんなりと通った鼻筋。感じやすそうな唇とは逆に、荒削りで強情そうな顎のライン。ほどよく肉の引き締まった頬には長いまつ毛が影を落としている。

「あ〜あ。『裕也クン』がここにいてくれれば、どんどん書けちゃいそうなのに……」

『裕也クン』というのは、ポスターの男に勝手につけた名前だ。

「あーもう、締め切りなんか蹴ってやるぅ！」

ため息をついてキーボードに指を乗せた時、

「せ・ん・せ♡」

後ろからFカップの超絶爆乳をムギュッとつかまれ、英里奈はキャーッ！　と叫んだ。イスの上から転げ落ちてしまい、宙に浮いた両脚がテーブルにぶつかる。たちまちファンレターとフロッピーが頭の上に雨アラレ状態だ。

「ちょっと、だいじょうぶ？」

英里奈を覗きこんだのは、**同居している親友の榊菊華**だった。逆三角形の顔に切れ長


Kyaa☆
Munyu

の目をしたちょっと勝ち気な女の子だ。プワプワしたボブがきつい印象を和らげている。
「きっ、菊華かぁ。おどかさないでよ、仕事中だよっ！」
「ごめん。けど、ビックリするのも頭の刺激になると思ってさ。どれどれ、今日はどんなHなシーンを書いてるの？……ちょっと、なんで隠すのよ、おどき！」
「やだぁ！　本になってから読んでよ」
英里奈は急いでメニュー画面に切り替え、文書を保存して電源を切る。
菊華はプッとふくれてソファにドッカと座りこんだ。
「ふんだ。幼なじみのあたし相手に、今さら恥ずかしいもクソもないでしょ」
「だってぇ……」
「じゃあさ、今どんなのを書いてるかくらいは教えてくれてもいいんじゃない？」
「んーとねぇ、ニュースキャスターの女の人がヒロインなんだ。知らない男たちに脅迫されて、エッチなことをするの。でも、Hシーンがどうしてもうまく書けなくて……」
悲しそうにため息をつく英里奈に、菊華はしたり顔でうなずく。
「やっぱりねぇ。英里奈もさっさとバージンにバイバイすれば、めちゃめちゃいいポルノが書けるのになぁ」
英里奈は唇を尖らせ、菊華の隣りに腰を降ろす。

「どーせ、あたしは菊華とちがって、生まれてからずうーっとボーイフレンドすらつくったことがないですよーだ！　キスだってしたことないのにポルノ小説を書いてるなんて、変態だと思ってるんでしょっ⁉」

いつにない英里奈の反撃に、菊華はタジタジになる。

「そ、そこまで言ってないって」

「だいたいSF作家だって体験談を書いてるんじゃないんだからね。あたしみたいなキス処女だって、想像力があればポルノ小説くらい書けるんだからっ！　それに、あたしには裕也クンがいるからいーんだもん」

英里奈はひと息でまくしたて、ポスターを見あげてウットリする。いつか裕也クンとデートする。それが英里奈の夢だ。前から好男出版で**英里奈の担当をしている原田**にモデルの所属事務所を調べてくれるよう頼んであるが、連絡先はまだわからない。

「あ〜あ。いつになったら会えるのかなぁ？」

クッションを抱えたまま、ぼんやりしていると菊華の手がのびてきた。逃げる間も与えず、英里奈をふたり用のソファに押し倒す。

「あっ、な、なにするの⁉」

「モチ！　レズプレイってやつ」

「うそっ⁉　いやぁ！」
菊華は抵抗する英里奈を全身の重みで押さえつけて、どんどん服を脱がしていく。ふわふわしたモヘヤのカーディガン。純白のフリルつきブラウス。女の子らしい小花のプリント柄ロングスカートをまくると、白いソックスをつけた足が剝きだしになる。
「いやっ！　イヤだってば！」
逃げようともがいてはいるが、内心、レズプレイに対する好奇心が頭をもたげている。レズって、オナニーよりももっと気持ちがいいの？……う〜ん。1回くらいならレズプレイをしてみてもいいかも⁉……
本能的に身を守ろうともがきながら、しかし理性は小説家らしい好奇心に負け、すでに力を抜きはじめている。
菊華はそれを察し、英里奈の上から身体を少しずらした。
「おとなしくしなさい。何事も経験よ」
「経験なんかしたくないっ！」
「だいじょうぶだって。最初は痛くないようにしてあげるから」
「あっ……いやぁん！」
菊華は思わず色っぽい声をあげる英里奈の唇にキスをする。パンティの上からおま×こ

をぷにぷに揉みはじめる。フロントホックをはずしてブラをめくると、高校1年のくせに**99センチFカップ**もある爆乳がプッルル～ンと弾けでる。

「ほぉ～ら、もう乳首勃ってる」

「いやぁあん。菊華のバカぁ……」

「自分でおま×こヌルヌルにしといて、バカはないでしょ、バカは」

菊華の指はすでにクリ×リスをじかに揉みしだいている。秘孔から溢れる透明な液をたっぷり指に塗りつけ、プクッと硬くなってきた肉芽にまぶす。充血した乳首を舌で舐めあげ、白い柔肌に歯を立てる。

「んっ……はぁあ……」

白いソックスに包まれたつま先が、ピンと硬直する。のけぞる背筋をざわざわと快感が走り抜ける。英里奈は泣きそうな顔で幼なじみの顔を見つめた。

「きっ、菊華ぁ……も、もぉ……」

「だぁ～め。これからがいいトコなんだから」

菊華の舌はすべすべした平らな腹部をさがっていき、柔らかな若草に覆われた下腹部に到達する。片脚を曲げて股をひろげさせて、プルプル震えているラビアを指で割り開く。英里奈の恥ずかしいところがパックリと剝きだしになった。

「やっ……こんなの、恥ずかしい。あっ、ああ……」
「誰だってしてることよ。どう？　初めてのレズプレイの味は？」
菊華はクリ×リスを嬲（なぶ）り、弾力のある巨乳を揉みながら問いかける。
「いっ、いいのぉ……」
まるで天と地がひっくりかえったような気分だ。
「あたしの指のほうが、自分でオナニーするより感じるでしょ？」
「う、うんっ……いいっ！　感じちゃうぅっ！」
英里奈は泣きそうな顔で快感をむさぼる。気持ちがよすぎて目の前がチカチカする。
「エッチな英里奈のおま×こに指入れちゃおっかなぁ？」
「やっ……ダメぇっ」
「でもぉ、英里奈のここ、とっくにぐちょぐちょだよ。これなら絶対痛くないって」
「だめぇえ……はぁあっ……」
そこへ突然、電話のベルが鳴りはじめた。
「もぉっ、誰よっ!?　雰囲気ぶち壊しっ！」
「ふみいっ。……菊華ぁ、そこどけてぇ」
英里奈は熱に浮かされたような顔でソファから降りた。菊華の愛撫に感じすぎたせいで、

下半身に力が入らない。しょうがないので四つん這いになってキッチンへと急ぐ。冷蔵庫の中から冷えた電話の子機を取りだした。
「なんで冷蔵庫に入ってるのよ?」
「だってぇ、原稿書いてたら変な男がエッチな電話かけてくるんだもぉん」
アンテナをのばし、スイッチをONにする。
「もしもし?」
『あ、どうも。原田です』
電話は英里奈の担当からだ。今まで一度も会ったことはないが、声が渋く、落ち着いた感じなので、ちょっとはげかかったオッサンの顔を想像している。
菊華は四つん這いになったままの英里奈に忍び寄り、狭間を指でひろげる。蜜壺の入り口はキュッとすぼまり、透明な液がジュクッとにじみでる。
「あのう、原稿の件でしたら、まだもうちょっとかかるんですけど……」
『いや。原稿ならまだだいじょうぶだよ。……実は、明日きみのサイン会を開くことになったんだ。急な話で悪いけど、都合つけてくれないかな?』
「えっ!? サイン会!? あたしのぉ!? うそでしょお!?」
後ろからバストを揉まれ、またもや官能の炎がめらめら燃えあがる。菊華の愛撫のせい

で、まるで全身が性感帯になったようだ。肌に触られただけでゾクゾクしてしまう。
『明日の午後2時、場所は二之国屋書店。詳しいことは明日会場で説明するから、とりあえず30分前にきてくれないかな?』
「待ってください! あたしなんかが出たら、黒須のことを男性だと思ってるファンのイメージが狂っちゃいますってば! なんとか……こ、断ってください」
菊華の指が英里奈の花芯に突き刺さった。手のひらでクリ×リスを押すようにしながらヴァギナの入り口をこねまわす。
英里奈は思わずその場に突っ伏してしまいそうになる。受話器を握りしめたまま、あえぎ声がもれぬよう唇を噛みしめるので精いっぱいだ。
『それがどうしても断れないんだ。サイン会には**早乙女蘭**(さおとめらん)を予定していたんだけど、彼女の都合が急に悪くなってね』
早乙女蘭は英里奈と同じく好男出版でポルノ小説を書いている女で、最近ではテレビなどにも出演し、先輩にあたる黒須裕也の人気を食い散らかしてるヤなやつだ。でも、そんなことより、めっちゃ気持ちがよすぎる。心とは裏腹に腰をくねくね振ってしまう。
「だ、だからってぇ、なんであたしが出なきゃなんないんですかっ? だいたい早乙女蘭は黒須のライバルなんで……すよぉ……あはぁあっ♡」

AAN..

Pichu
Pichu

指をまとめて2本もズブズブ出し入れされ、思わずあえぎ声がもれる。
『ん？　今の、なに？』
「いえ、な、なんでも……。ともかく、あたしは出られませんっ！」
『それがさぁ、最近売れ行き落ちてるんだよね。この際、売れっ子ポルノ作家黒須裕也が実は女子高生だった！　とか言っちゃって、バーンと売り上げのばすとか……』
「んなこと無理ですっ。も、もぉお、イヤぁ……」
菊華は調子に乗って、英里奈の太腿の間に頭を突っこんだ。濡れぬれになっているヴァギナを舌で舐めると、ちゅぷちゅぷっという恥ずかしい音が響く。
英里奈は快感に負けて倒れてしまわぬよう、床についた手と両脚に力をこめているが、意識がぼうっとして、今にも受話器を落としてしまいそうだ。
『とにかく、もう決定したことだからさ。どうしても出たくないんなら、代役でも立ててくれないか？　そこできみのおま×こを舐めてるボーイフレンドにでも頼んでさ』
英里奈はギクッとして受話器を持ち直した。
「だ、代役なんて、誰にも頼めませんよぉ！」
そう言ったとたん、ワハハハと大爆笑が返ってくる。
『またまたぁ。今どきの女子高生にボーイフレンドがいないなんて、誰も信じないよ』

英里奈は泣きそうになった。充血しているクリ×リスをコリコリ噛まれ、舌でペロペロ舐めあげられる。気持ちよすぎて頭がおかしくなりそうだ。

「でも、本当にいないんです！　小説はほとんど想像で書いてるし……」

『うそうそ。あれだけ濃厚なポルノを書くんだ。実際にもかなり経験してるんだろ？』

「してませんよぉ！」

処女なのにポルノを書いてるなんてことは、むっちゃめちゃめちゃ恥ずかしいので、原田には内緒にしてあった。口が裂けても言いたくない。

『じゃ、そういうことで、頼んだよ』

「あっ、原田さんっ！」

振り向いた英里奈の顔は怒りと興奮で真っ赤に火照っている。

「菊華っ、もぉやめてっ！」

「もぉやめて、って言いながら、自分からエッチに腰振ってるの誰よぉ？」

「あ、あたしだけどぉ……」

菊華は英里奈の身体を軽々と床の上にひっくりかえし、ディープキスをする。舌に舌を絡め、唇の裏側を舐める。

「き、菊華ぁ、どうしよう？」

英里奈がイヤならやるっきゃないんじゃない？　英里奈がイヤなら代役でもさがしてさぁ……」

「なによぉ？　サイン会のこと？」

英里奈は、んっ、んっ、とあえぎながらうなずく。

「黒須の文庫の売り上げが落ちてるんなら、やるっきゃないんじゃない？　英里奈がイヤなら代役でもさがしてさぁ……」

「で、でもぉ……あはぁ〜っ、もぉどうしよう⁉」

「とりあえずこのままイッちゃいなさい」

「いっ、いやぁ……。もっとぉ……」

理性を取り戻さなきゃ、と思う反面、ついつい本音が出た。

「もっとぉ、なによ？」

「もっと舐めてぇ。いじって欲しいのぉ……」

床の上に横たわり、秘唇を舐める菊華の舌を全身で感じていると、チャイムが鳴った。

「ふみぃいっ。菊華ぁ……」

「ほっときなさい。どうせ新聞の勧誘だから」

チャイムは二度、三度と繰りかえし鳴る。

とうとう気の短い菊華が耐えられなくなり、英里奈の股間から顔をあげた。

「ちょっといってて追いかえしてくるっ！」

あ、と思いだしたように、英里奈を振りかえった。
「英里奈は逃げちゃダメよ。ベッドの上でおとなしく待ってなさい」
「えーっ!?」
とイヤそうな顔をしつつも、英里奈はノロノロ起きあがり、裸の尻をプリプリ振りながら奥の仕事場兼寝室へ戻る。ベッドにあおむけに倒れこみ、そっと乳首に触れてみた。
「あ……」
身体がブルッと震えた。菊華の愛撫を受け、敏感になっているのだ。
「女の子同士って、感じるところを知ってるから、男の人とより燃えちゃうのかも」
甘い声でつぶやいているうちに、ドアが開いた。菊華が渋い顔で中を覗きこむ。
「誰だったと思う？　ズバリ当たったらひと晩中バイブでいじめてあげてもいいけど」
「えっ……う～ん、わかんない」
「英里奈のお母さまだよ」
「えーっ、本当にっ!?」
英里奈はFカップのバストをタププンと揺らして起きあがった。
「ひょっとして箱入り娘に防虫剤の差し入れしにきたのかな？」
英里奈は散らばっているファンレターとフロッピーを急いで引き出しに押しこんだ。自

分が書いた好男出版の超Hな文庫本は、全部まとめて机の下に隠す。菊華に脱がされた服をあわてて身に着け、リビングにつづくドアを開けた。

ソファの上には藤色の着物姿の中年女性が座っている。上品な顔に笑みを浮かべているのは、英里奈の母だ。

「おひさしぶりね、英里奈ちゃん。お元気そうだわねぇ」

「ええ、まぁ。お母さまこそ」

「はいこれ、ふたりで召しあがれ」

テーブルの上に乗せたケーキの箱を英里奈に勧め、おっとりした口調で言葉をつづける。

「英里奈ちゃん、実はねぇ、突然なのだけど、あなたにお見合いの話があるの」

ケーキの箱をうきうきしながら覗きこんでいた英里奈は、瞬時にしてハニワになった。

「ええーっ⁉　なっ、なんでぇ⁉」

「先日お父さまがご一緒にお仕事した社長さんと約束なさったのですって。もちろん、一度お会いしてみて相手の方に不満があれば、ご交際をお断りすればいいのよ」

「でも、あたし、困ります。まだ高1だし、勉強だってあるし」

ほかの女子高生とちがって締め切りだってあるのよ！……と言いたいところだが、

「ポルノ小説を書くなんて最低です！　もう感動よ……じゃなくて勘当よ！」

と言われるに決まってるので、黒須裕也のペンネームでお仕事していることはお母さまには絶対に内緒だ。

「でもねぇ、英里奈ちゃん。今度だけはどうしてもお断りできないの。お約束は明日の2時なんですもの」

「えーっ、明日の2時ぃ⁉　うっそーっ⁉」

サイン会と同じ時間じゃない!!……とつい叫びそうになりあわてて口を押さえる。

「いいじゃないの。お見合いなんて、いざしようと思ってもそうめったにできないことなのよ。これも経験と思って楽しむことよ。ね？　今夜は8時には寝るんですよ。また明日迎えにきますからね」

お母さまは言いたいことだけ言ってしまうと、ひさしぶりのイベントにうきうきルンルン鼻唄混じりでアパートを出ていく。

「8時なんて早すぎ……えっ⁉　お母さまっ、ちょっと待っててっ！」

英里奈は引きとめようとあわてて外へ飛びだした。でも、タクシーをずっと待たせていたのか、お母さまの姿はどこにもない。気の抜けたラムネのような顔で、リビングへ戻る。

「ダブルブッキングじゃん。どーすんの？」

菊華は人の不幸を楽しむかのようにニマニマしている。お気楽なその顔を見たとたん、

英里奈の奥に潜んでいた反逆心がＢＯＭＢ！　と爆発した。ついでに頭の血管もブチブチーッと4、5本ぶっちぎれる。

「どうするもこうするもないわよっ！　いかないもんっ！」

仁王立ちしてきっぱりはっきり宣言する。

「サイン会に？」

「見合いに決まってるでしょっ！」

「じゃあ、サイン会は英里奈が出るの？」

「ふにゃ～っ。どぉしよぉおっ⁉」

つい数分前までレズプレイで気持ちよくよがっていたというのに、いきなり天国から地獄へ真っ逆さまに突き落とされた気分だ。

「見合いなんておもしろそうじゃない？　きれいなドレス着てフランス料理なんかを食べるのよね。食事の後はふたりだけでホテルの庭なんか散歩しちゃってさ」

「だったらかわりにいってよ。菊華だって榊ファームの跡取り娘じゃない。あたしなんかより、かえって喜ばれるかもよ？」

「やなこった。んなことするために、家を飛びだしたんじゃないもんね」

英里奈はＨなポルノ小説を書くため、菊華は親の目を盗んでオトコ遊びをするために、

一緒にこの市の高校を受験し、親の承諾を得てマンションで同居しているのだ。
「ふみぃ～ん。変な男と結婚させられることになったら、どうしよう⁉」
菊華は真顔で考えこみ、うん、とうなずいた。
「わかった！」
「え？　なになに？」
「見合いがまとまる前に、いわゆる『キズ物』になっちゃえばいいのよ」
「キズ物ぉ⁉」
「そーゆうこと！　好きなタイプの男をめっけて、さっさとアソコに1発ぶちこんでもらえば？　そうすりゃ誰もなにも言えないって」
英里奈は泣きべそをかいて菊華に聞く。
「でも……そんなんでうまくいくと思う？」
「やってみなきゃわかんないよ。そうと決まればこれから黒須の代役&即席の恋人さがしに出かけよう！」
菊華はそう言って、勢いよく立ちあがった。

第2章　Fカップで悩殺しちゃえ

出演はあと25分後に迫っている。由美子はメイクをすませ、控え室に座っていた。膝の上で台本をひろげて大まかな流れを再確認する。
「篠崎さんのコーナーの後、スポーツニュースね。速報が入らなきゃいいけど……」
由美子は篠崎健がメインキャスターを勤めるニュース番組『スーパーニュースＮＯＷ』で、スポーツ部門担当のキャスターをしている。
大学を卒業し、局アナになって先月で丸１年がすぎた。最初の半年はお天気キャスターを勤め、その後スポーツ部門に移ってきた。所属が変わってすぐの頃は野球選手の名前と球団名を覚えるだけでヒィヒィ言っていたが、今では２軍の選手までほとんど完璧に暗記している。名前だけではない。打率や試合中に見せる癖までも熟知している。

大きな鏡の前でメイクのチェックをしていると、局内電話が鳴りだした。
「はい。森丘です」
『受付にお客さまがお見えです』
「お客さま？　こんな時間にどなたかしら？」
『佐藤さまとおっしゃる男性です』
「わかったわ。すぐいきます」
由美子は台本を伏せ、廊下に出た。あと20分しかない。そう思うと自然と足が速くなる。廊下ですれちがう同期入社の社員や先輩たちに会釈(えしゃく)し、受付へと急ぐ。
男はロビーの壁一面を覆う壁画の前に立っていた。見たことのない横顔だ。
いったい誰かしら？
声をかけようとした瞬間、男がこっちを振りかえった。40代に見える男はサバンナを駆ける野獣のような鋭い目で、由美子の顔を見つめる。
由美子はまるで牙を持たぬ草食動物だった。鋭い視線に射抜かれたまま、身動きひとつできない。男の顔を見かえしたまま、その場に立ちつくす。
男はコツコツとかかとを鳴らし、由美子の前まで歩み寄った。背広の内ポケットから白いフィルムケースを取りだして由美子の目にさらす。ケースにはA－5と書かれている。

「これがなにか、知っているな？」

「そ、それは……」

由美子の顔が真っ青になる。弾かれたようにフィルムを取り戻そうと手をのばした瞬間、男は素早く由美子の手首をつかんでいた。

「い、痛い！」

「くるんだ」

男の声は低く、脅すように響いた。由美子の手を離し、歩きだす。由美子は抵抗の表情すら見せることもできず、言われるままに少し遅れて男の後をついていった。

この男は誰なの？　どうしてあのフィルムを持っているの⁉……

男はペースを遅めて由美子の後にさがってロビーを歩いていく。半年くらい前に、美少女タレントあての爆弾小包事件があったばかりなので、警備員がふたり、受付のところで出入りする人物をチェックしている。だが、局アナの由美子は当然顔パスだ。

「お疲れさまです」

警備員は男を由美子の連れだと思ったらしく、制帽に手をやり、目礼する。

「お疲れさま」

由美子は返事を返して廊下を歩いていく。すぐに男に追い抜かされた。男は部外者のは

ずなのに、局内の事情にかなり詳しいようだ。5階でエレベーターを降り、まっすぐ廊下を歩いていって、由美子がついさっきまでいた出演者控え室のドアを開ける。
開かれたドアの前で由美子は躊躇し、浅黒い男の顔を見あげた。
「さっさと入るんだ」
乱暴に手首をつかまれ、控え室に引きずりこまれた。男は由美子を突き飛ばし、後ろ手で鍵をかける。
「なにをするつもり？」
問いかける声が震えてしまう。もっとも、震えているのは声だけではない。Ｃカップの乳房も、小ぶりな唇もわなわなと震えている。
男が由美子に襲いかかる。
「イヤっ！」
由美子は身をよじって逃げようとするが、男の力にはかなわない。控え室の隅に敷かれた畳の上に楽々とねじ伏せられてしまう。
「やっ、やめてっ！」
男は片手で由美子の肩を押さえ、片手でブラウスの胸もとを引き裂く。ビッという布の裂ける音につづいて、豊かなバストを履う黒いブラジャーがむしり取られ、白い乳房があ

らわになった。
「いやぁーっ！」
叫んだとたん、頬を激しく張り飛ばされた。男は由美子の喉に手をかけ、少しずつ力を入れながら冷徹な瞳で青ざめた顔を覗きこむ。
「俺に逆らえば死ぬよりつらい目を見るぞ。それとも今すぐここで死にたいか？」
由美子は口もきけず、唇をわななかせながら息をすする。この男なら本気で殺るかもしれない。そんな予感が身をすくませる。恐怖のあまり、閉じた双眼に涙が溢れる。
男は抵抗しなくなった由美子の衣服を次々と剝いでゆく。タイトスカートをむしり取り、ストッキングを乱暴にずり降ろす。ブラとおそろいの黒のスキャンティも投げ捨てられた。
「ああ……」
最後の砦も破られてしまい、由美子は悲しげにすすり泣きをもらした。白い裸身が震えている。黒い若草に守られた秘部に男の手がめりこむ。円を描くようにクリ×リスを嬲られ、息が荒くなってくる。乳首を舐められると背筋がゾクゾクッと震えた。
見ず知らずの男に強姦されているのよ。反応してはいけないわ！……
ところが、身体はあまりにも正直だった。きつく閉じていた太腿から徐々に力が抜け、男の指を深く迎えようと自然とひろがっていく。投げだされた両腕はピクピクけいれんし、


Chuku
Chuku
Kuchu
kuchy

色あせた畳に爪を立てる。半開きになった唇から切なげなあえぎ声がもれた。
「んっ……あはぁ……」
由美子は股奥の花園を踏みにじられまいと、必死になって身もだえる。だが、おま×この中心を指でえぐられ、不覚にも甘い声をもらしてしまう。
「あ……はぁあん」
「もう濡れてやがる。噂通りスケベなアマだぜ」
男は指を濡らす愛液をペロリと舐め、ニヤッと笑った。
「ああっ……イヤっ……お、お願い。本番が……」
「本番ならここでしてやるぜ」
男は冷たい口調で言い放ち、節くれだった剛棒を秘孔にずぶりと挿入した。

☆

夜になって、英里奈は菊華と一緒に男をさがしに街へ出かけた。
英里奈は菊華に借りた黒いボディコンスーツを着ようとしている。伸縮するゴムのような素材で、肌にピッタリ吸いついてくるスーツだ。おまけに超絶マイクロミニなので、ちょっと腰を曲げただけでヒップが露出してしまいそうだ。Tバックはおろかヒモパンすら持っていない英里奈は羞恥で頬を染めて抗議した。

「本当にこんなの着ていくの？　これじゃあ、下着のラインが丸見えだよぉ」
「じゃあ、あれつけてけば？」
「あれって？」
「ほら、黒須裕也あてにファンから黒いランジェリーが届いたじゃない」
菊華の言う通り、数日前編集部からファンレターやプレゼントが回送されてきたのだが、その中になぜか黒いパンティとおそろいのブラが入っていた。高価なレース仕立てのランジェリーはアメリカンサイズの巨大なものだったが、Ｆカップの英里奈にピッタリだ。
「サイズはちょうどいいけど、ホントにこれ着ていかなきゃダメ？」
「英里奈さ、せっかくＦカップのお宝を持ってるんだから、少しはエッチくさい服着て、男どもを悩殺しなさい。言い寄ってくる男の数が多けりゃ多いほど、いい男に出会う確率は高くなるんだから」
菊華は、色っぽいランジェリー姿を渋い顔で見まわしている英里奈に言った。
「いいなぁ。あたしも前からそういうのが欲しかったのよねぇ。……そっか！　パットを入れればあたしにもつけれるかも⁉　ね、ちょっと貸してよ」
「だめっ！」
他人から欲しがられると急に所有欲が出てくる。英里奈はボディコンスーツの下に黒い



ランジェリーをつけて出かけることにした。
ディスコに着いたふたりは、未成年なので短大生のフリをして入場料を払い、低いビートがガンガン聞こえてくるフロアへ入っていった。中は驚くほどたくさんの客たちでごった返していた。
ＯＬや背広を着たサラリーマン、はたまたイケイケボディコンギャル軍団が、巨大なフロアの真ん中で踊っている。周囲の壁は鏡張りで、片隅にはカウンターがあり、黒い蝶ネクタイに黒いパンツをはいたウエイターが飲み物をつくっていた。
「フリードリンクだから、なにを飲んでもいいのよ」
大声で教えてくれる菊華に、英里奈も大声で聞きかえす。
「それよか、いい人見つけたら、どうすればいいの？」
「声かければいいに決まってるでしょっ！　ちょっといってくる！」
菊華は浮かれた調子でステップを踏みつつ、酔っぱらいのカゲロウみたいにフロアへとさまよい出ていく。
こんなトコで黒須裕也になってもらえそうな人なんか見つかるかなぁ？……
英里奈は心細さに半ベソをかきながら、空いていたスツールに腰を降ろした。ディスコなんかにくるのは、生まれて初めてだ。あたりはどことなく世紀末風で、薄汚れた空気を

シェイクするように爆音が轟き、危険な雰囲気をかもしだしている。
これって、もしかしたら小説のネタに使えるかも。ちょっと探検してみようかな⁉……
スツールを立って周囲をキョロキョロ見まわしていると、後ろから声をかけられた。
「ねぇ、きみ。ひとりなの？」
英里奈は驚いて飛びあがったが、すぐに「ナンパかも⁉……」とワクワク期待して後ろを振りかえった。そこには見たことのない男がふたり立っている。それも中年で、ディスコには絶対似つかわしくないような男たちだ。
背の高いナスビのような顔の男が、両手を揉みしだきながら言う。
「よかったら、むこうで飲みませんか？」
もう片方のうっかり床に落っことしたトマト風の男も、英里奈の全身を舐めるように見まわしながら、誘いをかけてきた。
「ひとりなんでしょう、一緒に飲まない？　ちょっと聞きたいこともあるしぃ」
ムカッ！　冗談じゃないわよ。あたし、腐った野菜を買いにきたんじゃないのよ。超絶めっちゃカッコいい男をさがしにきたんだからっ！……
「お断りします。あたし、面食いなんです」
つぶれトマトの顔が怒りのために真っ赤なゆでトマト色になる。ナスビは英里奈の手を

つかみ、力ずくで店の奥へ連れていこうとする。
「おとなしくオレたちと一緒にくるんだ」
「イヤよっ！　手を離してっ」
英里奈はとうとう大声でわめきはじめた。こんなことなら、前もって菊華に『ナンパ男撃退法』でも聞いておくんだった……と思ってももう遅い。
フロアの片隅で揉み合う英里奈たち3人を、ほかの客たちが遠巻きに見物しはじめる。
「おとなしくなさい。そうすれば怪我せずにすむんだから」
「怪我ってなんなのよぉーっ!?　離してって言ってるでしょーっ！」
「お客さま、なにかトラブルでもございましたか？」
3人が振り向くと黒服の美男子が立っていた。体にぴったりした短い上着とただでさえ長い足をいっそう長く見せるようにつくられた黒いパンツが似合っていて、めちゃカッコいい。薄い唇にニヒルな笑みをたたえ、無言のうちに相手を圧倒している。
「ト、ト、トラブル？……い、いや、べつに。なぁ？」
急にどもりだすうらなりナスビ。一方、つぶれゆでトマトもウンウンうなずく。
結局、くされ野菜コンビは、ゴキブリみたいにコソコソとむこうへいってしまった。
「どうかなさいましたか？」

英里奈のハートはユーロビートのリズムにも負けない勢いでバックンバックン鳴っている。乾いた唇を舌で湿らせ、長いまつ毛にふちどられた男の瞳を見つめかえす。

「あのぅ……。お願いがあるんですけど」

「ぼくに？　どんなことかな？」

「明日1日だけ、あたしのかわりに黒須裕也になって」

そう言いたいのだが、舌が喉の奥でダンゴ状態になっていて、うまく言いだせない。

「むこうへいこう。ここだと落ち着いて話もできない」

英里奈は手をつかまれ、店の奥へと連れていかれた。この男を目当てにやってきたらしい女たちの鋭い視線が身体を貫き、背中がゾクゾクッと震える。

一見、なにもない壁のように見える場所で立ちどまると、ドアがすうっと開いた。もしかして、これって『ＶＩＰルーム』ってとこなのかしら？　それも、すごい有名人とかしか入れない秘密の部屋だったりして……。

黒いレザーのソファセットと、ガラステーブル。貝がらの形をした白いアクセサリーライトが、あちこちに置かれている。ふたりのほかには誰もいない。

黒服の男は英里奈をソファに座らせ、カウンターで飲み物をつくりはじめる。

「この店は、初めて？」

英里奈はうなずき、カラカラの喉にカクテルを流しこむ。ライムが入っているらしく、さっぱりしていて飲みやすい。思わずコクコクッと半分以上空けてしまう。
男は涼しげな切れ長の目に冷やかな笑みを浮かべて言った。
「きれいな髪だ」
肩からこぼれる英里奈の髪にそっと指先を触れる。その手で顎をつかみ、いきなり唇を奪った。ディープキスがうますぎて、抵抗する気が全然起きない。両腕で抱き寄せられると、頭がクラクラしてくる。ビキニタイプのパンティなんて、はいていないのと同じようなものだ。難なく男の指がおま×こまで到達してしまう。そのまま英里奈の秘密の花園をぬちゃぬちゃとまさぐり、指先を濡らしたラブジュースを英里奈の目の前に突きつけた。
「下の唇は上の唇より正直だね。もうこんなに濡れてるじゃないか」
「そ、そんな……」
前あきのジッパーを降ろされ、英里奈の身体が剝きだしになる。豊かなFカップの乳房をアメリカ製の黒いブラの上から揉まれると、自然とあえぎ声がもれてしまう。
「あはぁあっ。だ、ダメ……」
もう、なにも考えられない……。
酒と欲望でクラクラしている英里奈の脳裏に、菊華が言った「キズ物になっちゃえばい

いのよ」という言葉が浮かびあがる。

最初はすごく痛いって話だけど、この人ならだいじょうぶかもしれない……。

ソファの上に押し倒され、両脚を割りひろげられる。クリ×リスを舐められただけで、敏感な英里奈はのけぞってしまった。思わず自分の手で99センチFカップのバストを揉みながら、男の舌をもっと味わおうと腰を突きあげてしまう。

「も、もっとぉ……。ふっ、ふぁあ……」

バージンは一番好きな人にあげる。そう思ってたけど、もうあきらめる。お見合いなんてマッピラだもん……。

「いいんだね?」

英里奈はこくっとうなずき、破瓜(はか)の痛みにそなえて唇を嚙む。

黒服がパンツから取りだしたペニスは、もう屹立していた。女の熱い狭間を求めてビクッビクッと脈打っている。

「触ってごらん」

手をつかまれて男のシンボルへと導かれる。さほど太くはないが、長さはかなりある。少なく見積もっても20センチはありそうだ。先端はきのこのような形をしている。

「イヤっ、だ、ダメぇ。……こんなの、全部入らない」

「だいじょうぶだから力を抜いてごらん」
カサの張った熱い先端を、濡れている秘貝に押しつけてくる。
英里奈は欲棒から逃れようと身をよじらせる。けれど、酔いがまわって身体が思うように動かない。まるで英里奈だけがスローモーションの中にいるかのようだ。
こんなの入れたら、あそこが裂けちゃう!……
「お願い、やっぱりダメ……」
その時だった。
「隆一(りゅういち)っ、そんなところでなにしてるのよ!!」
聞き覚えのある声にギクッとして顔をあげると、目の前に菊華が立っていた。秋田名物「悪い子はいねぇが!?」のナマハゲもビビるほど怖い顔でふたりをにらみつけている。
「やぁ。きみの友達を悪い虫から守ってあげようと思ってね」
「ふんっ! 悪い虫は隆一、あんたでしょ? さ、英里奈、いくわよ」
菊華は英里奈の前あきジッパーをジャッと引きあげ、腕をつかんで乱暴に立たせた。
「まっ、待ってよぉ」
英里奈は愛撫を受け、ジーンとしびれてしまった下半身でヨロヨロついていく。
「ねぇ、さっきの人と知り合いなの?」

「もっち！　隆一とは3カ月前にこの店で知り合ったんだ」
「そっかぁ。変だと思ったぁ」
菊華はカウンターのそばで立ちどまり、カクテルで酔っぱらっている英里奈の赤い顔をにらむように見つめる。
「英里奈ぁ、あんた、ホントに代役をさがす気あるの？」
「えっ？　あるけどぉ……。ねぇえ、あの人に代役、頼めないかなぁ？」
「隆一に？　ダメダメ！　あいつって、女遊びがメチャメチャ激しいから、黒須の代役なんかやらせたりしたら、いたいけなファンの女の子を『ぼくが黒須裕也です』ってだまして、もてあそんじゃうかもよ」
「そんなことをしそうな人だったら、やめとくぅ。……ほかの人、さがしにいこーっ！」
英里奈は勢いよく立ちあがった。ほろ酔いかげんの開放的な気分でフロアに出る。
踊りまくってヘトヘトになってひとりで席に戻ったところに、隆一がやってきた。
「はい、どうぞ」
渡された飲み物をひと息に飲み干すと、グレープフルーツジュースの味がした。だが本当は英里奈がジュースだと思っているだけで、43度のテキーラが入ったカクテルだった。
「おいしーっ！……ねぇねぇ、隆一さんってぇ、菊華と恋人同士なのぉ？」

隆一はフッと笑って英里奈に答えた。
「もし、彼女とぼくが恋人同士だったとしても、それは過去のことさ」
「過去のぉ？」
「そう。今はちがう。……きみのことが好きだから」
英里奈の全身がカーッと熱くなる。暗がりにいるのをいいことに、もう隆一の右手はヒップのほうにまわり、英里奈のマイクロミニの中に潜りこんでいる。
「……あ。イヤぁん……」
さっきの愛撫で濡れたままのおま×こをいじられ、背筋がゾクゾクッと震えだす。
「いつかここにぼくのチ×ポを入れさせてくれるね？」
「で、でもぉ、菊華がぁ……」
隆一は無言で電話番号のメモを英里奈の手に押しつけ、人混みの中にスッと紛れてしまう。
しばらくしてから、菊華が戻ってきて、英理奈の隣りに座った。
「どぉ？　黒須っぽいの、いた？」
「ん～。なんかピンとこなくてぇ……」
「ピンと、って、どんな男がいいのよ？」

英里奈の頭の中に裕也クンが浮かぶ。言わずと知れた、例の地下鉄の駅から無断でひっぺがしてきたモノクロ・ポスターの男だ。

「ハンサムでぇー、明るくってぇー、背が高くってぇー、筋肉のしっかりした人！」

菊華はコケてスツールから落ちそうになった。

「あ、あんたねぇ、恋人を見つけるよか難しいこと、言うんじゃないよ！」

「でもぉ～、メチャバリかっちょイイ人でなきゃ～、ヤなんだもぉーん」

菊華は地球の裏側、ブラジル本土にまで響きそうなほど大きなため息をついた。

「しょうがないわね。じゃあ、場所変えてみる？」

ふたりがフロアを横切ろうとした時だった。どこからともなくうらなりナスビとつぶれトマトが出てきて、英里奈たちの前に立ちはだかった。

「もう、カンベンなんねぇ。おとなしく乳アテを渡しなっ！」

叫ぶうらなりナスビ。

「んにゃぁ？　乳アテって、なんのことぉ？」

ロレツのまわらない声で問いかえしたとたん、つぶれトマトが英里奈を捕まえようと飛びかかってきた。

「いやぁ～ん！」

英里奈はとっさにピョンと横っ飛び。可愛い顔にヘロヘロ笑いを浮かべ、両手を頭の上で立ててあたりをピョンピョン飛んで逃げまわる。かなり酔っているようだ。
「うっさぎさんれぇ〜す。ピョンピョ〜ん」
「待てこらっ！」
ナスビは両手で英里奈につかみかかったが、すんでのところで逃げられ、丸テーブルを蹴倒した。はずみでおつまみフライドポテトに顔を突っこみ、バッタリ倒れる。
「この変態っ！」
ポテトについてたパセリを鼻の穴からはやしたまま起きあがったナスビの脳天に、菊華がビール瓶をお見舞いする。ナイスショット！
つぶれトマトは騒ぎに気づいて駆けつけた隆一に殴られてぶっ飛んだ。立ちあがろうとしてギャルのミニスカートに頭をもぐらせてしまい、女のアッパーではっ倒される。鼻血で水芸しながらへっぴり腰で英里奈にヨロヨロ迫りくる。
「くっそぉ〜」
「やーっ！　こないでぇっ！」
信じられないことに、英里奈は重そうなガラステーブルをむんずとつかみ、ナスビの顔めがけてブイッと投げつけた。お次はふたり用のラブチェアだ。むぅうっ、と可愛いうな


Pyon
Pyon

り声をあげて頭上高く持ちあげ、まるでハリボテのように軽々と投げつける。
「うっひゃぁっ……ひょっほほいっ！　くっそーっ、危ねぇじゃねーかっ!!」
危うくよけたからいいようなものの、ナスビの怒りは頂点に達した。ビール瓶をつかみカウンターの端でガンと割って、ギザギザに尖った先端を突きつける。
「姉ちゃん、おとなしくしな」
灰皿を投げつけようとかまえている英里奈に、ジリジリと近づいてくる。
「危ないっ！」
誰かが英里奈の手をつかみ、出口のほうへ引っぱっていく。非常階段に飛びだすと、数秒遅れて駆けつけたトマトの指が閉まっていくドアの間に挟まった。
「ぎゃぉあぅぅぅ……」
トマトの絶叫が聞こえたが、かまっちゃいられない。階段の横に積まれていたビールのケースをドアの前に置き、誰も出てこられないようにする。
「もーっ。いったい、あいつらはなんなのよぉ？」
英里奈は自分の横に立つ人物を見あげて、ポカンとしてしまった。助けてくれたのは菊華だとばかり思っていたのに、そこには男が立っている。155センチの英里奈より頭ひとつ分は背が高い。その顔を確認して、英里奈は我が目を疑った。

荒削りなりりしい顔。マッチョな手脚。胸板はぶ厚く、広い肩幅。黒い革ジャンの下で上半身が逆三角形を描いている。どう見ても、好男出版のポスターのモデルそっくりだ。

「ど、どうしてここにいるのぉ？」

「どうしてって、あんたを助けて、それで……」

「ふにゃぁあ〜っ、あっ、会いたかったよぉおっ！」

英里奈は叫び、男の胸に抱きついていった。うれしくて泣きそうだ。

「やめろよ。オレ、なんにもしてねぇぞ」

「してっ！　これからいっぱいして……」

英里奈は涙で濡れた目をあげ、男の首に両腕をまわす。

「助けてくれたお礼です。英里奈をあなたの好きにして♡　エッチなことをいっぱいして欲しいのぉ」

「なんだって!?　冗談言うなよ」

男はポカンと口を開けて英里奈を見降ろした。酔っぱらいかよ？……と聞きたげな顔だ。

「本気よ。……本気なの。今すぐふたりきりになれるところへいきましょうよぉ」

酔っぱらって強気の態度できっぱり言い切る英里奈の目は両方とも据わっている。男の両手をつかみ、ご自慢のFカップに押しつける。

「ば、バカ言うなよ。オレは別に、女が欲しくて助けたんじゃないし……」
「そんなのわかってる。だけど、エッチなことしてくれなきゃ、あたし、警察に『淫行されたよ〜ん』とかってぇ、言っちゃうかもしんないよぉ〜?」
「なんだとぉ!? ふざけんなよ?」
「ふざけてないもんっ。英里奈はぁ、あなたにバージンをあげたいのっ! ずっとずうぅっと、あなたのために取っておいたんだからぁ……」
「ま、マジ?」
英里奈は甘いカクテルを飲みすぎたせいで、下半身がにょろにょろ不安定で、両脚に力が入らない。男の胸にしなだれかかり、99センチのバストをぐいぐい押しつける。
「マジだもぉ〜んっ! 今すぐエッチしてくれなきゃ、いやあっ!」
男は困惑した顔でボリボリ頭をかく。まんざらでもないがそんなことは言えない。
「しょうがねぇなぁ、つき合ってやるか」
英里奈のあこがれの人、裕也クンによく似た男は小さくため息をつき、非常階段を先に立って降りはじめた。

第3章　濡れて乱れて初体験！

猛り狂った男の太ペニスは荒々しく由美子の肉壁をこすりあげ、ずちゅずちゅと淫猥な音をたてて秘孔を出入りしている。

由美子は愛液の湧きでるヴァギナを深々と貫かれ、剝きだしになった乳房を乱暴に揉みしだかれてすすり泣く。身体の奥から湧き起こる快感の波は、全身の神経を逆立て敏感にしていく。激しい抽送に裸身を揺さぶられ、もうなにも考えることができない。

「あぁぁ……ひぃぐぅうっ！」

精神が壊れでもしたかのようにわけのわからぬことを口走り、たっぷりと脂の乗ったヒップをグラインドさせる。剛棒をもっと味わおうと両腕を男の背中にまわし、引きつける。

ついさっきメイクをしたばかりの美顔に汗が吹きでる。黒髪を振り乱してよがり声をあげ

る。

「ひはぁああっ！　いっ、もっ、もぉおっ……イッちゃう！　イッちゃうのぉおっ！」

魂が地獄めがけて落ちていきかけた瞬間、控え室のドアを誰かがノックした。

「森丘さん、そろそろ出番よ」

ディレクターの声がドア越しに聞こえてくる。由美子はビクッと身を震わせ、トロンとした目で男の顔を見あげた。

男は由美子のクリ×リスを嬲りながら、低い声で耳朶にささやく。

「すぐいくと答えろ」

「……す、すぐいきます」

「なるべく早くね」

「は、はい……」

男は蜜壺から硬くそりかえったままのペニスを抜き取る。ぬらついた亀頭が姿を現わすと、由美子の狭間はコプコプッと音をたてて愛液をもらした。

「いっ、いやぁあ。も、もっとおチ×ポ入れてぇえ！」

男は剛棒を求めて抱きついてくる由美子の肩を蹴倒した。赤ん坊のおむつを取り替えるように両脚首をまとめてつかみ、高く持ちあげる。

「これがなにかわかるか？」
目の前に突きつけたのは極太のバイブだった。由美子は情欲にあおられ、思うように言葉が出せない。
男は乳白色のバイブをペロリと舐め、ヒクヒクうごめいている女陰に挿しこんだ。すぐさまスイッチを入れる。
「あはぁああっ！　いっ、いやぁ……」
瞬間、由美子はビクビクッとのけぞった。股間からこみあげる快感に耐えきれず、硬く尖った白い乳房を揉みあげる。
男は由美子の腰を両手でつかみ、うつぶせにひっくりかえした。背広のポケットから黒い皮製の紐のようなものを取りだし、小刻みなバイブレーションを思うまま味わっている女の下半身に食いこませる。皮紐はTバックのように股間を締めあげ、ヴァギナの入り口を封じてしまった。もう指1本入れるだけの余地もない。
「なっ、なにをするのっ!?」
「本番5分前だ。生放送の間中よがっているんだな」
「いやぁああっ！」
由美子は叫び、花園に食いこむ皮紐をはずそうと必死になった。しかし背後で固結びに

ViViVi...
Gichu

されているので簡単には取れない。ハサミはないかと血走った目で控え室を見まわす。
再びドアが激しくノックされた。
「森丘さん、まだなの？　あと5分で本番よ」
ディレクターの声だ。
「いっ、今すぐいきますっ！　ふ、服にお茶をこぼしちゃって……」
男はイスに後ろ向きに座り、ニヤニヤしながら由美子のあわてようを見物している。
「あきらめてそのまま出演することだ」
由美子はキッと背後を振りかえった。怒りと興奮で美しい顔が朱に染まっている。
「どうしてこんなことを!?」
「こいつのせいさ」
男はお手玉をするように白いフィルムケースをもてあそぶ。
「なぜあなたが持っているの!?」
「森丘さんっ！　もう時間がないわ。お願いだから今すぐここを開けてちょうだい」
ノブが外からガチャガチャまわされる。
夜10時から生放送の『スーパーニュースNOW』は、オープニングでキャスター全員があいさつするのが決まりになっている。もう時間がない。

「い、いまいきますっ！」

由美子は床に落ちていたブラジャーを拾い、乳首が勃ったままのバストを下からすくいあげるように持ちあげ、カップの中に押しこむ。スキャンティはどこかとあたりを見まわすと、男が下卑た笑みを浮かべて薄布に鼻をうずめ、女の香を楽しんでいた。

「返してっ！」

「返して欲しけりゃ素っ裸で本番に出てみな」

由美子はキュッと唇を噛み、ブラウスとスカートを身に着けた。お腹の奥でバイブがぐねぐねうごめいている。細かな振動がクリ×リスを刺激し、あまりの快感に腰が抜けてしまいそうだ。

「お願い、スイッチを切って」

「本番が終わったら切ってやる。それまで、全国の視聴者の前でイキまくってやんな」

男は薄ら笑いを浮かべ、白いフィルムケースを光にかざしてじっと見つめる。

由美子はその隙を狙って男の手に飛びついた。が、その瞬間に頬を叩かれ、あっけなく床に転んでしまった。

「森丘さん？　いるんでしょ？」

ディレクターの声はいよいよせっぱ詰まってきた。

「さっさといってこい。本番が終わったら正面玄関の前に立ってろよ。いいな？」
「どうしてそんな……」
「言わなくてもわかってるだろ？　さっきのつづきだ。オレの魔羅をぶちこんでやるぜ」
由美子は真っ青になって男を見つめる。
「いいか。警察を呼ぼうなんてこたぁ、考えないほうが身のためだ。オレが捕まればこのフィルムは写真週刊誌に掲載されることになってるんだからな」
フィルムになにが映っているのかを理解している由美子は、呆然となった。
もうどうすることもできない。フィルムをすべて取り戻すまではなにもできない……。
「森丘さん！　2分前ですよ！」
由美子はバイブがもたらすしびれるような快感と必死で戦いながら、控え室のドアを開けた。

☆

英里奈は酔っぱらった頭でぼんやりと周囲を見まわした。
ラブホテルって、こんなとこだったんだ……。
壁一面を覆う鏡。20インチのテレビ。ガラス越しにバスルームが見える。純白のシーツの上には若い男が座っている。英里奈のピンチを救った裕也クンそっくりの男だ。

男は、どう振る舞えばいいのかわからず突っ立ったままの英里奈を見あげて言った。
「おまえ、男なら誰にでも『エッチしてくれ』って言うのかよ？」
英里奈は一瞬わけがわからず、しかしすぐに質問の意味を悟って真っ赤になった。
「そんなことしない」
「じゃあなんでオレを誘った？」
「それは……」
今夜ひと晩でキズ物になりたいから、なんてことは、たとえ口裂け女に脅されても絶対に言えない。
見ず知らずの男にバージンを奪われても、傷つくのは身体じゃない、心だよ……。
そう考えると涙がこみあげてくる。英里奈は唇が震えているのを気づかれぬよう、顔をそむけてベッドの端に腰を降ろす。
「本当はね、心から愛し合える人を見つけたかったの。でも、もう時間がないの。運命の恋人をさがしている暇がないから……」
「病気なのか？」
「ううん。そうじゃないけど……」
英里奈は黙りこんだ。

「ここまできといてなんだけど、本当にオレでいいのか？」

「……うん。もう決めたんだもの。後悔はしない。あなたがいいの」

気のせいかもしれないが、英里奈は男が微笑を浮かべたような気がした。

「名前、なんて言うんだ？」

「英里奈。あなたは？」

「**ユウヤ**」

「本当に？」

好男出版のポスターのモデル、裕也クンと同じ名前だなんて、信じられない！……

ユウヤはうなずき、ジャケットを脱いだ。筋肉の盛りあがった肩と腕があらわになる。ジムで鍛えているのか、かなり力がありそうだ。

英里奈はあわてて目をそらし、頭の中で必死に考える。

こういう時、女の子はどうすればいいんだっけ？　お風呂に入るの？　入った後は？たしか、雑誌に『セックスする前に女の人がシャワーに入るのをきらう男の人もいる』って書いてあったような気がするけど……。

普段、平気な顔してポルノを書いているクセに、いざ自分が主人公になってしまうと、どうすりゃいいのか全然わからない。半分パニックに陥(おちい)りながら、どうでもいいようなこ



とを真剣に悩みまくってしまう。
シャワーを浴びたら裸でここまで出てくるの？　それとも一緒に入る？　ウソウソ！　初体験でそんなことしたら変態じゃない⁉　じゃあ、お風呂に入ってまた服着て出てくるの？　でも、どうせまた脱いじゃうのに……。
英里奈は部屋の照明が暗くなったことに気づき、パッと顔をあげた。上半身裸になったユウヤがすぐ横に座って自分をじっと見つめている。
「どうするの？」
「もちろんこうする」
ユウヤは震えている英里奈の肩をつかみ、キスをする。唇を唇に押しつけ、挟むように動かしながら舌を差し入れる。もう片方の手はＦカップの乳房をそっと揉んでいる。
次はどうなるの？……
英里奈は好奇心でワクワクしながら、ベッドの上にあおむけに押し倒された。ついつい男の行為ひとつひとつを頭に刻みこもうと神経を尖らせてしまう。
ユウヤはボディコンスーツのジッパーをゆっくりと降ろす。黒いブラジャーとパンティは黒須のファンがくれた外国製だ。エッチな下着のラインを指でなぞり、へこんだ腹部をたどってＦカップのレースの下に指を潜りこませる。

「こんなもの着てきて、最初からそのつもりだったのか？」
「そんなことない、けど……」
まさか今夜中に一緒にラブホテルに入るような相手が見つかるとは思ってなかったわ。こんなことして、本当にいいのかしら？……
乙女の恥じらいが剝きだしになった肌を赤く染める。下着姿を見られただけでもすごく恥ずかしくてたまらない。羞恥で全身が熱く火照ってくる。ブラをはずされ、99センチの胸をじかに触られる。眠っていた乳首はピョコンと尖り、白い肌に舌が落ちてくると身体が興奮でゾクゾク震えた。
「あっ……し、シャワー、浴びてきたほうがいい？」
ユウヤは硬くしこってきた乳首をコリコリ嚙むのを中断して答える。
「いや、このままでいいよ。……いいにおいだ」
「はっ、はぁぁん♡」
「色っぽい声してるな」
「そんなぁ……」
英里奈はまさか自分にこんな甘い声が出せるとは、想像もしていなかった。自分が自分じゃなくなったような気がして、恥ずかしくってたまらない。

「もっといい声聞かせろよ」

スキャンティの中に手が入ってくる。指は淡い茂みを乗り越え、そろそろと移動して恥ずかしい割れ目に到達する。英里奈の背筋を甘美な電流がビリビリッと走る。感じやすいクリ×リスを指で挟むようにして揉みあげられる。

「あっ……。あああっ……」

あたし、ホントにセックスしてるんだ。初対面の男の人とラブホテルにきて、服を全部脱がされて、大切なおま×こを指でいじられてるんだ。

『おま×こ』という言葉を頭の中でつぶやいたとたん、英里奈は自分がすごくエッチな動物に変身したような気がした。乳首と同じくらい硬くなった肉芽をクリクリこねまわされているうちに、昼間菊華に開発され、感じやすくなっている身体にとうとう火がついた。

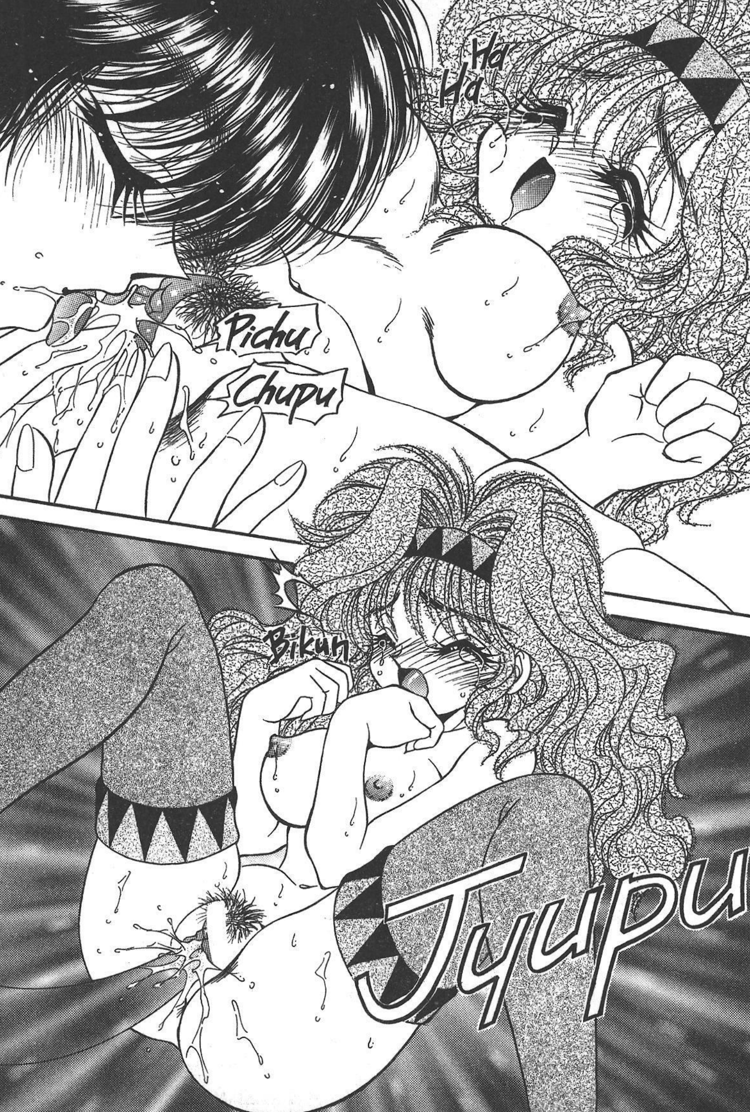
「もっ、もっとぉ……」

男の背中に手をまわし、小さな甘え声でおねだりする。激しく波打つ巨乳の先でピンク色のサクランボはプクッとしこり、ゼリーみたいに揺れている。無意識のうちに自分の手のひらでお乳をそっと撫でる。パンパンに張りつめた乳首は刺激を受けていっそう硬くなる。

「見かけによらずエッチだな。もう濡れはじめてるぞ。この穴にタンポン入れたことある

か？」
「なっ、ないのぉっ。……みゃぁあんっ！」
秘孔を指でえぐられた英里奈は、子猫のような声をあげた。二度、三度と指を突き立てられ、女陰はトロトロッと愛液をしたたらせる。
みっ、乱れちゃうぅっ！　初めてなのにぃっ！……
ユウヤはズボンとトランクスをまとめて脱いだ。怒張したペニスがぬっと顔を出す。根元と亀頭のつけ根がやや細い長芋のような形をした男根は、ピクピク脈打って、先端に透明な液をにじませている。
英里奈はベッドの上に横たわったまま、その逞しい剛棒へトロンとした視線を向けた。
よくわかんないけど、かなり大きいみたい。あんなの、ちゃんと入るかしら？……
「もう、入れるの？」
「ああ。イヤか？」
「イヤじゃないけど……痛い？」
「初めてなのか？」
英里奈は耳まで真っ赤になり、こくっと小さくうなずいてみせる。ロストバージンの痛みは死にそうなほどつらいかも!?……そう思うと身体が震えてくる。

「最初はたぶんな」
ユウヤは英里奈の横に座り、おま×こを揉みながら膣に中指を入れてくる。
「あんっ……痛いの、ヤっ」
「しょうがないお嬢さまだな。もっとトロトロにしてやるか」
片脚を曲げさせられて、恥ずかしい花びらの中心を舐められた。
「みゃああっ！」
ていねいな愛撫を受け、ただでさえ敏感になっているま×こを舐められると、身体の奥からわなわなと震えが昇ってきて、全身が火の玉に巻きこまれたように熱くなっていく。
クンニリングスって超絶スーパー気持ちいいっ！……
「みゃあっ！　ふみぃいっ！　変になっちゃうよぉおっ！」
身もだえしながら快感をむさぼる以外、なにもできなくなってしまう。全身から吹きでた汗はシーツに飛び散り、女の甘い香を部屋中に振りまく。突き立てた人差し指と中指が秘孔をぐりぐりえぐる。溢れだすラブジュースがユウヤの指をしとどに濡らす。
「こんなに濡れて恥ずかしくないか？」
「みあぁ～んっ♡　恥ずかしいよぉおっ！」
舌で舐められ、指でくじられ、英里奈の肉壺はくちゅくちゅエッチな音をたてている。



Ha
Ha
Pichu
Chupu
Bikun
Jyupu

指を抜き差しされるたびに、淫らな蜜をピチュッチュブッと吹きだす。

英里奈は深く息を吸い、ささやくように哀願する。

「もっ、もぉ、いいのっ！　めちゃめちゃにしてっ！　欲しいのおんっ！」

ひろげられた両脚の間に男の身体が覆いかぶさってくる。ムスクのような香。

ユウヤは充分すぎるほど濡れそぼった肉襞を指でひろげ、亀頭を押し当ててくる。ためらいはみじんもない。

「ああーっ！」

硬く屹立したペニスを秘唇にぶちこまれた瞬間、身体の中心に、熱い焼きごてを押し当てられたような激しい痛みを感じ、思わず声をあげた。

「痛いっ。痛いよぉおっ！　それ以上入れないでーっ！」

英里奈はシーツを両手でつかんでのけぞった。まるで悪魔に両脚をつかまれ、左右に引き裂かれようとしているみたいな激痛だ。涙が次々と溢れ、紅潮した頬を濡らす。

「悪いな、もう根元まで入っちまった」

ユウヤの言葉を聞き、きつく閉じていたまぶたを開けると、黒い茂みがふたつ、目の前で密着している。英里奈はポロポロ涙をこぼし、シーツをつかむ手に力を入れる。

「ふみゃぁぁ……。痛いのぉっ！　もぉ、ダメだよぉ～」

「ダメなもんか。本番はこれからさ」
ユウヤは硬く反りかえった肉砲を、おま×この穴に根元まできっちりはめこんだまま、指でクリ×リスをいじりはじめた。覆いかぶさるように上体をかがめ、左の乳首を尖らせた舌でコロコロ転がす。
「うっ、うそっ⁉ そ、そんなぁ……」
激痛のせいで消えかけていた快感が、再びよみがえってくる。
「感じるか?」
「うっ、うんっ。気持ちいいっ」
ビンビンに張りつめている恥ずかしい芽を指でくじりながら、ゆっくり律動を開始する。ぴたりと吸いつき、きつく締めつけてくる肉壁をこするように暴れん棒を出し入れする。
「みぁ〜っ……ふっ、ふみぃ〜っ!」
3分の1だけチ×ポをはめたまま、亀頭でヴァギナをこねまわす。エラの張った部分で熱くなった蜜壺の内側、ちょうどGスポのあたりをこすられて、英里奈は全身であえぎ、淫らに腰を振って身もだえする。
「あっ、溢れちゃうぅっ! もぉ、やめっ……やめ……」
深々と突きあげられ、息ができない。

ユウヤはたぷたぷと柔らかに揺れている巨乳を目にし、いっそう興奮を募らせる。生まれて初めて男根を受け入れた穴は、信じられぬほど締めつけがいい。たちまち射ってしまいそうになるのを我慢して、より深くチ×ポを押しこむ。英里奈のヴァギナは燃えるように熱い。硬くなった剛棒で敏感なおま×この入り口をたっぷりこねまわしてやる。

「みゃぁああっ！」

この快感があと数分もつづいたら、頭が変になっちゃう。本当はあたし、めっちゃすごいインバイだったらどうしよう？……

そう思うと、英里奈の目に涙が溢れてくる。秘孔を出入りするチ×ポがたてる、グチュッグチュッという音、恥ずかしい下の唇がもらすニュグッニュブッという卑猥な響き、裸で絡み合うふたりの周囲は卑猥な空気と音に満ちている。

「もっ、もおぉっ……くはぁ～っ！　イッちゃうのぉおっ！」

甲高い声と同時に、ユウヤは素早く腰を引いた。ブルルッと抜けでた太竿の先端から、大量の精液がほとばしる。スペルマは激しく上下している柔らかな乳房の上に飛び散った。

「あ、あぁんっ……」

か細いうめきをもらす英里奈の隣りにユウヤがゴロッと身体を転がす。全身で息をしながら形のいい白い乳房に手をのばし、硬くなった乳首を愛撫する。もう片方の手で熱くひ

くついているおま×こ全体をやさしく揉みしだく。
「あんっ……」
英里奈はうっとりとした表情でユウヤを見た。16歳とは思えぬほど色っぽい。
「どう？　初体験の感想は？」
「やっ……そんなこと、聞かないで」
小さな声で恥ずかしそうに答え、赤く染まった頬を両手で隠してしまう。充血してプクッとふくらんだままのクリ×リスが言葉によって刺激され、下腹を波打たせる。
ユウヤは英里奈の手をつかんで顔の上からどけさせた。はっと目を開ける英里奈の口にキスをする。舌に舌を絡め、チュプッと音をたてて強く吸いあげる。
「最初で最高にイクなんて、ラッキーだったな」
英里奈は肉芽をもてあそぶユウヤの手に自分の手を重ねた。
「もうやめて。またイッちゃいそう」
「感じやすいんだな。これからが楽しみだ」
「これから？」
問いかえしたとたん、ユウヤは立ちあがり、英里奈の裸身を抱きあげた。
「どっ、どうするの？」

「質問するのが好きなんだな。……もちろんこうするのさ」
そのままシャワールームに入っていく。英里奈を床の上に立たせて元栓を開くと、すぐに温かい湯が頭上から降り注いできた。備えつけのボディシャンプーを両手のひらでたっぷり泡立て、上気してピンク色に染まった英里奈の身体を洗いはじめる。
「やっ……恥ずかしい」
男の両手が容赦なく裸身を這いまわる。ピンと張りつめた99センチのバスト。キュッとくびれたウエスト。形のいいおへそとぺったんこなお腹。柔らかな毛の密集する下腹部。愛液とスペルマのこびりついた恥毛をきめ細やかなバブルで洗いながら、秘唇を指でかきわけ、充血したままのクリ×リスをキュッと挟みあげる。
「みゃうっ……もぉ、しびれちゃうぅ」
もう、立っているのがやっとだ。英里奈は降り注ぐシャワーの下で、警官にボディチェックをされるように壁に両手を突き、両脚を開いた格好で愛撫を受け入れている。
ユウヤの指がプクッと腫れているおま×この中心に触れる。
「まだ痛むか？」
「ん〜と。少しだけ……」
「それならだいじょうぶだな」

ユウヤは英里奈の右脚を抱えあげ、洗ったばかりの蜜壺に怒張をズブリと挿しこんだ。
「ふみぃっ!? ま、またぁ?」
「ああ。股にまたまた入れてやるよ。タマタマは別だがな」
「そんなぁ……」
と言いながらも、英里奈はもうあえいでいる。
ひと晩に二度もできちゃうなんて、この人、ひょっとして、絶倫とかいうやつなのかしら? まさか、2回だけじゃなくて、3回も4回もできちゃうの!?……
考えただけで、気が遠くなってくる。
「あんっあんっ……ぁあぁあっ!」
「その声、たまんねぇな」
グラマラスな泡まみれの裸身を抱えてぐいぐい下から突きあげながら、英里奈の顔中にキスをする。英里奈もキスを返しながら、股間から湧きあがる快感に全身を震わせる。
「かっ、感じちゃうっ! もぉダメなのぉっ……ふみゃあぁ……」
英里奈は二度目の絶頂に達した。浮きあがったつま先をビクビクッとけいれんさせ、ぐったりと男の胸にもたれかかる。しかし、ユウヤはまだイッていない。熱くひくつくヴァギナに野太いこわばりを突っこんだまま、英里奈の裸身をゆさゆさ揺すりあげる。

「ゆっ、許してぇ……。もぉ……、もぉ……」
クリ×リスを太竿でこすられ、またもや快感が湧き起こる。
「ふみぃーっ！　イッちゃうのぉおっ！」
今度はユウヤも一緒に果てた。身体を洗いにきたはずが、逆に精液で英里奈の白い太腿を汚してしまう。
ユウヤは荒い息をつきながら、タイルの上に座りこんだ英里奈を見降ろした。
「おまえを見てるだけで、すげぇそそられるぜ。何回でもチ×ポがおっ勃ってきちまう」
英里奈は真っ赤になったが、もうヘトヘトで顔を両手で隠す元気もない。
「疲れたろ？　ごめんな」
ユウヤは英里奈を立たせ、シャワーのノズルをつかんで全身の泡を落としてやる。
こんなことしてもらっていいのかなぁ？　でも、初めてだったんだし、これくらいしてもらってもバチは当たんないよね？……
英里奈はバスタオル1枚の姿でベッドに戻り、隣りに寝転ぶユウヤをじっと見つめた。どこからどう見ても、あこがれの人、裕也クンにそっくりだ。
「なにかついてるか？」
「うん。目と鼻と口と……じゃなくてね、お願いがあるの」

言ったとたん、ユウヤはガバッと起きあがり、英里奈の肩をつかんで速攻押し倒した。
ツンと尖った乳首を舐めながらおま×こに手をのばしてくる。
「やっ……。そうじゃなくてぇ」
ユウヤは舌をペロペロ動かしたまま、ん？　と目だけあげて英里奈を見る。
「明日ね、ある人のかわりにサイン会に出て欲しいの」
「サイン会？」
「うん。小説を書いてる人なんだけど、本人が出られないからかわりに……」
ユウヤは赤くふくらんでいるクリ×リスをくじりながら、フッと考えこんだ。
「小説ってなにを書いてるんだ？」
「あのね、若い女の子とかＯＬさんが読む、ちょっとエッチな小説なの」
「ふ〜ん、ポルノかぁ。……そうだな、もう１発犯らせてくれたら、ＯＫしてもいいぜ」
「ほんとっ⁉　よかったぁ」
英里奈はホッと胸を撫で降ろそうとして、交換条件の内容に、え？　と首をかしげる。
ひぇえ〜っ！　あたしってば、とんでもない人を見つけちゃったみたい……。

第4章　朝帰りでおしおきよ♡

廊下に出ると、ディレクターが由美子を待ちかまえていた。
「どうしたの？　顔色、悪いんじゃない？」
「え？　そうですか？」
由美子は弱々しく微笑(ほほえ)みかえし、力の入らぬ足で歩きはじめる。胎内に埋めこまれたバイブの絶え間ない振動にさらされ、女の蜜が秘孔からどろりと溢れだしているのが自分でもわかる。
スタジオへと急ぎながら、ディレクターは由美子の顔を覗きこんだ。
「調子が悪いなら、控えの落合さんに変わってもらいましょうか？」
「いえ、いいんです」

アソコにバイブをはめたまま本番に出演すること。それが男の望みだ。もし裏切ったりすれば後でなにをされるかわからない。
「本番1分前。由美ちゃん、遅いぞ。早く位置について」
「ごめんなさい」
由美子は急いで持ち場についた。立ったままでちょうどひじを乗せられるミニテーブルの前に立つ。
も、もう、ダメ……。
両脚がガクガク震えているのをとめようと膝に力を入れると、ヴァギナがキュウッと収縮して、かえってバイブをより深く咥えこんでしまい、下腹部がブルブルけいれんしてしまう。由美子は奥歯を噛みしめ、深呼吸をする。
ニュースを読んでいる途中で失神したりしたら、どうしよう!?……
「本番、5秒前」
ADの江川が張りあげた声とともに、ざわついていたスタジオ内は心持ち静まりかえる。
「5、4……」
あとは声に出さず、宙に差しのべた手指を折ってカウントする。3、2、1。キューが出た。メインキャスターの篠崎は正面のカメラに目線を合わせ、理知的な顔に薄く笑みを

浮かべる。
「こんばんは。『スーパーニュースNOW』の時間です。今夜は首相退陣に関する新たな情報と諸外国の反応についてを中心にお届けします。特集は島村さんから」
サブキャスターが視聴者に向かって話しかける。
「今日の特集は近頃ブームを呼んでいる中国産のやせる石鹼とその効能についてです」
「つづいてスポーツは40分頃から。担当は森丘さんです」
由美子は目の前のカメラに向かい、にっこり微笑む。
「今夜はグアム入りした巨神軍のキャンプ情報を現地からお届けします」
カメラの上部にある『オンエア中』を示す赤いライトが消えると、由美子はたまらずその場にしゃがみこんだ。
「どうしたの？　だいじょうぶ？」
ディレクターが心配そうな顔で飛んでくる。
まさか、バイブをはめられ、気持ちよすぎて立っていられない、とは言えやしない。
「やっぱり落合さんに代わってもらいましょう」
「いえっ！　いいです。さっき薬を飲みましたから、すぐ……すぐよくなります」
由美子はバイトが運んできたイスに座り、出番を待つことになった。

すぐになんかよくならないわ。気持ちはどんどんよくなっていくけれど……。

漆黒のブラジャーの下で、乳首は硬く張りつめている。頭上から降り注ぐライトの熱で身体中が燃えるように熱い。両頬は薄紅色に染まり、事情を知らない人々は由美子に微熱でもあるのかといぶかしがっている。

低く響く篠崎の声を遠くに聞きながら、由美子は両目を閉じ、女陰を震わすバイブの動きに意識を集中している。

なにもかも忘れてオナニーしたい。パンティを脱ぎ捨て、ブラをはだけて敏感なところを触るの。柔らかな乳房。尖った乳首。愛液でぬるぬるになった割れ目をいじりながらクリ×リスを転がし……、誰に見られてもいいわ。今すぐここでエッチに乱れたいっ！……

「由美ちゃん？」

肩に触れられ、由美子はハッと我に返って顔をあげた。メイクとヘア担当の若い女性が目の前に立っている。由美子が初めてテレビに出演した時からの担当、忍（しのぶ）だ。

「風邪（かぜ）っぽいんだって？　だいじょうぶ？」

「え？　うん……」

忍の指でおま×こを触ってもらったら、どんな気持ちかしら？　シックスナインをするように、お互いのクリ×リスを舐め合うの。忍はDカップの巨乳がとっても感じやすそう



だからいっぱい揉んで、赤くなるまでキスしてあげるわ。頬紅用の太い筆でたっぷりいじめて、あんあん泣いておねだりしたら、指を1本ずつ入れてあげるの。2本入れて3本入れて、それからぐちょぐちょ音がするまでかきまぜて……。

「本当にだいじょうぶ?」

「え? ええ」

一瞬の白日夢から覚めると、忍が顔に浮きでた脂汗をパフで吸収し、化粧の乱れを直してくれているところだった。

「わたし、おかしく見える?」

「えっ? ううん。ちょっとだるそうに見えるくらいかな?」

おま×この穴にバイブを入れられ、きつく皮紐で縛られている下半身を見せたら、忍はなんて言うかしら?……

「森丘さん、スタンバイして!」

CMが終ろうとしている。腰かけていたイスは素早く片づけられた。

由美子はミニテーブルに軽く両手を乗せ、シャンと立つ。正面を向いて営業用の微笑みを浮かべようとした時、表情が凍った。

スタジオの隅(すみ)にあの男が立っている。陰湿で残忍な男。目立たないところに立っている

けど、由美子はすぐにその存在に気がついた。

どうしてあそこにいるの。あいつは部外者よ。今すぐスタジオから追いだして！……

そう叫びたかったけど、床に置かれたモニターに映しだされた時計は残り10秒しかない。なにもできないまま、江川の出したキューーに合わせて唇を開く。

「それではスポーツニュースです。昨日グアム入りした巨神軍のキャンプは絶好の好天に恵まれ、練習を開始しました。現地から今日の巨神軍の映像が届いています。今年初参加の岸本選手のインタビューをお聞きください」

カメラに向かって原稿を読みながらも、由美子は視野の隅であの男を捕えている。淫らな女壺を刺激する大人のオモチャに負けまいと両膝に力を入れて、モニターを見ながらインタビューが終わるのを待つ。愛液はノーパンのパンストの中央をぐっしょりと濡らし、じわじわと太腿を伝い落ちていく。

「次は契約更改のニュースです。マリナーズの、川籐選手が本日の午後、契約を更新したことを明らかにしました。年棒は推定6千万。怪我による降板など……」

最後まで読まぬうちに、由美子はくっと唇を閉ざした。小刻みに震えていただけのバイブが、突然目覚めたかのようにうねうねと大きく動きだしたのだ。

「こ、降板などにより、せ、成績が奮わなかったこともあり、さ、昨年より約1千万円低

い額で更新を決めた模様で……」
由美子はテーブルを両手でつかみ、眉根を寄せる。唇を開くとあえぎ声がもれてしまいそうだ。バイブは前後左右、自由自在に肉壁を刺激してくる。膣の中を好き勝手に暴れまくり、女の官能をあおりたてる。
まさか、あの男がバイブのスイッチを切り替えたの？　だから、こ、こんな……。
「も、模様です」
一拍置いて、テニスをする女性の映像がモニターに映る。
「つ、つづいては……女子テニス世界選手権の話題です」
由美子は必死になってニュースを読みつづけようとする。しかし、ひときわ敏感な壁を刺激され、目の前がチカチカして原稿の字が見えない。
このまま、このまま気絶したら、わたしはどうなってしまうの？　医務室に運ばれて、おま×こに突っこまれたバイブを発見されて、それで……。
「日本期待の星、神崎ひとみが準々決勝……で……あぅっ……」
とうとううめき声がもれてしまった。繭型のバイブはいっそう激しくおま×こを犯している。由美子は立っていられなくなり、両目を閉じてテーブルに覆いかぶさった。
も、もうダメぇっ！……

由美子は中腰で立ったままの格好で失禁してしまった。ほとばしる黄色い液は白い太腿を伝い、床に水たまりをつくっていく。
いち早く異常を察知したディレクターが合図し、画面が篠崎に切り替わる。
「失礼いたしました。神崎ひとみは準々決勝でドイツのデッカーを3－1で破り……」
「森丘さん、どうしたの？」
由美子は死にたくなるほどの快感に身を揺さぶられ、唇の端からよだれをこぼしながらあえぎあえぎ答える。
「ごっ、ごめんな……さい。わ、わた……し、きょ、今日は、ぐ、ぐあいが、悪……」
涙をこぼしながら床の上にヘナヘナと座りこんでしまった。両手で股間を押さえ、はぁはぁと荒い息を繰りかえす。
「誰か、森丘さんを医務室へ運んでちょうだい！」
すうっと遠くなっていく意識の中に、ディレクターの声だけが聞こえてきた。

☆

なんだか、太陽がいつもより黄色く見えるみたい。
英里奈はキーをまわし、マンションのドアをそっと開けた。いの一番にお母さまの草履（ぞうり）がないかどうか確認する。ラッキーなことに、古びたサンダルしかない。ハイヒールがな

いということは、菊華もまだ帰っていないようだ。
「ただいまぁ」
ホッと胸を撫で降ろし、冷たい牛乳を飲もうと冷蔵庫を開けたとたん、
「朝帰りするなんて、いけないんだぁ」
背後で声がし、英里奈はキャッと飛びあがった。バクバク高鳴る心臓を押さえて振り向くと、パジャマ姿の菊華が立っている。
「な、な、なんだ。帰ってたんだ」
「きのうのうちにね。……それで、どうだった？」
「え？　なにが？」
英里奈はグラスに牛乳を注ぎながら、無理に平静を装って聞きかえす。
「どっかの男と手に手を取っていなくなったでしょ。そのあとどこでなにをしてたのよ？　正直に言わないと、朝帰りしたこと、英里奈のお母さまにバラしちゃうわよ」
「やだっ！　それだけはやめて」
いくら幼なじみが相手でも、初体験のことはちょっと言いづらい。英里奈は逃げるようにリビングへ戻り、ソファに座りこむ。コクコクのどを鳴らして牛乳を飲んでいる時に、追いかけてきた菊華がすぐ横に腰を降ろした。

「やーねぇ。今さらカマトトぶることないでしょ。ロストバージンした感想はどう？　ひと晩で何回イッたの？　10回くらい？」
「ぷはっ！　けっ、けほっ……こほっ……」
菊華はミルクにむせて苦しそうにせきこむ英里奈の背中を撫でてやりながら、形のいいあごを手でつかみ、あおむかせて瞳を覗きこんだ。
「正直に言わないと、こうよ」
ボディコンスーツの上からFカップの乳房をギュッとわしづかみにする。
「あっ……い、痛い」
「何回犯られたの？」
「ご、5回。……ううん、6回かな？」
つい正直に答えてしまい、英里奈は耳まで真っ赤になる。
「モノは？」
「モノって？」
ポルノ小説を書いているくせに、下ネタ関係に弱い英里奈はとぼけて逃げようとする。
「男根。肉茎。おチ×チン。ペニス。チ×ポ……。これだけ言えばわかるでしょ？」
「……う〜ん。巨砲、って感じだった」

「へぇ。巨砲ねぇ。ひと晩で6回もやったってことは、英里奈ってば、初めての時から感じちゃったんでしょ？」
「そ、それは……」
菊華はモジモジする英里奈の肩をつかみ、素早くソファに押し倒す。
「あっ……なに？」
「ネンネのクセに朝帰りしたおしおきよ」
「そんなっ!?　菊華だっていつも朝帰りしてるじゃない」
「口答えしないの」
菊華はソファから逃げだそうともがく英里奈の口にキスをする。形のいい巨乳を荒々しく揉みながら、スーツのジッパーを降ろす。すると、いきなり淡い茂みが現われた。
「あれ？　パンティどうしたの？」
「取られちゃったの。何回もお願いしたんだけど、返してくれなくて……」
英里奈は朝になってラブホテルを出る前、
「返して欲しかったらフェラしろよ」
と言われ、命じられるままにユウヤのチ×ポを舐めたことを思いだした。
ユウヤの太竿はバージンの英里奈が見てもかなり立派なモノだった。亀頭は英里奈の手

首ほどの太さがあり、口に含むのが精いっぱいだ。
「もっと深く咥えろよ」
目でうなずき、おずおずと唇に含んだが、どうしても3分の1しか入らない。
「おっ、おっきすぎるよぉ……」
「そっか。じゃ、そのままイクまで舐めてくれ」
英里奈はイチゴみたいに真っ赤に頬を染めて、そそり立つ巨砲に手を差しのべる。
こんなに太いのがあたしの胎内に入っちゃったなんて、信じられない。何回入れられてもいっぱいいっぱいで苦しいのに、それが快感になるなんて不思議……。
エッチなマンガと小説でしか知らなかった男根を舌でチロチロ舐めていく。
大きく張りだした亀頭。透明な液をにじませている先割れ。弾力のある長芋のような竿はところどころ血管が浮きでて、ピンクがかった肌色をしている。シャワーを浴びたばかりの陰毛に小さな水滴がいくつもキラキラ光っていた。
英里奈は屹立するシンボルに舌を這わせただけで、恥ずかしいところから熱い液がトロッと溢れだすのを感じた。
「いやっ。やめて……」
菊華にクリ×リスを嬲られ、あの時と同じラブジュースが英里奈のおま×こからにじみ

だしはじめる。
「言ったでしょ？　朝帰りのおしおきよ。イクまで絶対許さないんだから」
「ダメっ。ヒリヒリするんだもの……」
「ヒリヒリって、おま×こが？」
英里奈の白い肌が羞恥のせいでピンク色に染まる。
「処女のくせにひと晩で6回もすりゃあ、ヒリヒリして当たり前よ」
菊華はいじわるな魔女のような表情を浮かべ、トロトロの液をいっぱいにたたえている花奥を指でえぐる。
「ひぃっ！　や、やめてぇ。……ほ、本当に痛いの」
身をよじって逃れようとすると、菊華はあっさりヴァギナから指を引き抜いた。ソファの上で涙ぐんでいる英里奈を見降ろし、心配そうな顔つきになる。
「それじゃ、応急手当をしなくっちゃ」
とつぶやきながらキッチンに消えていった。
「手当ってなんだろ？」
英里奈がとまどいながらソファに座り直していると、菊華が戻ってきた。手にはぶどうをひと房持っている。黒い粒はかなり大きく、直径4センチくらいはある。

「それ、どうするの？」
「これでヒリヒリを静めるの」
「ぶどうで？　そんなの、聞いたことないけど……」
「処女は普通知らないわよ。さ、バスルームへいきましょう」
菊華は英里奈をせきたてて、バスルームに入った。プラスチックのイスに英里奈を座らせる。正面の鏡の中にひろげた膝とエッチなおま×こがはっきり映る。
「こんなエッチなカッコ、イヤよ」
「しょうがないでしょ。ひと晩で6回もしちゃったんだから」
英里奈はグスッと鼻を鳴らして黙りこむ。
菊華は英里奈の背後にしゃがみ、黒いブラをはずして脱衣所の洗濯カゴに投げこんだ。細いウエストの両側から英里奈のおま×こに手をのばして、くすんだピンク色のビラビラを指先で引っぱる。両手の指で左右にひろげ、秘孔の入り口をツンツンつっつく。
「はっ、恥ずかしいよ」
「今さらなに言ってんの。初対面の男にここ舐めてもらったんでしょ？」
英里奈は羞恥を感じ、真っ赤になって鏡から目をそむける。菊華の指に触れられただけでクリ×リスはヒクヒクッとけいれんし、秘孔からはたらたらと愛液が流れだしてしまう。

「英里奈ってば、男に犯られちゃったせいで、すごーく敏感になったんじゃない？」
「そ、そんな……」
と否定しながらも、女陰はチュクチュクと恥ずかしい音をたてている。触ってもいないのに、乳首がツンと尖ってしまう。
「ほら見て。入れるわよ」
鏡に目を向けると、中で菊華がつまんだぶどうをヴァギナの入り口に押し当てている。
「いやっ！」
逃げようとした時にはもう遅かった。狭間をいじられただけで感じてしまい、腰がジーンとしびれている。その上菊華の両腕がウエストに巻きついているので自由に動けない。
「あっ……ああ……」
すすり泣きをもらす英里奈の目の前で、花びらの奥に黒いぶどうがひと粒押しこまれた。
「冷たっ……痛いっ！　痛いの……」
「んなわけないでしょ。英里奈のおま×こ、男の巨砲がちゃんと入ったんだから、ぶどうの巨峰くらい簡単に入るわよ」
「き、巨砲なのぉ？」
「そう。巨砲じゃなくて巨峰よ。ほぉ〜ら、ふた粒入った」

英里奈は身もだえしながら、鏡に映る濡れた狭間を見つめている。キュクッ。ヴァギナは餌をねだる鯉のように黒い口をぱっくり開き、大きなぶどうを次々と呑みこんでいく。
「も、もうやめて」
「だぁ～め。ヒリヒリを治すにはこれが一番なんだから。……これで5粒、と」
「もぉダメっ！　おま×こがいっぱいなの。もう入らないのっ」
英里奈は甘い声で叫び、腰をくねくねうねらせる。それに合わせて美乳がプルプル揺れる。
「まぁーだまだっ！　ほらね、6つ入ったでしょ？　次は7つ目よ」
菊華は調子に乗って、クリ×リスや乳房を嬲りながら黒い粒を秘孔に押しこむ。
「いやぁ……あっく……つくぅうん」
ニュブッ。グニュッ。巨峰を入れられるたびに、白い下腹が内側から盛りあがってくるような気がする。冷たい果実は男のペニスに何度もこすられ、ひりついている肉壁の全面を圧迫し、いっぱいに満たしていく。
「すごーい！　10粒も入っちゃった。もういいかしら？　原田さーん、出番ですよぉ！」
「えっ⁉」
待ってましたとばかりにサッとドアを開けたのは、25歳前後の若い男だった。全裸の腰



に白いタオル1枚を巻いていて、股間がぷくっと盛りあがっている。
「お待たせ。……やぁ、はじめまして。原田です」
英里奈は涙のにじんだ目で男を見つめたままポカンとしてしまう。
「は、原田って、原田さんなの⁉」
男は好男出版の社員で、黒須裕也の担当編集者の原田だった。英里奈は耳まで真っ赤に染めて両手をかぶせてFカップのバストをあわてて隠す。
「今朝の飛行機で着いたのよ。今日のお見合いの話をしたら、原田さんが英里奈をキズ物にしてくれるって」
「キズ物っ⁉　で、でも、あたし、もう……」
「わかってるって。だけど、原田さんもこうして心配してることだし……」
菊華がタオルを剝ぎ取ると、原田のチ×ポが黒い茂みの中からヌッと顔を出した。使いこまれて黒光りしている太竿はすっかりちゃっかり、とっくの昔に準備OK状態だ。
「と、いうことでよろしく」
原田は逃げだそうとする英里奈の肩をつかみ、四つん這いの姿勢を取らせる。
「いやあっ！　あ、あたし、仕事関係の人とこういうことするのは……」
「気にすることないよ。ジュースをつくるだけだから」

言うやいなや、英里奈のマ×コに硬い肉筒が押しこまれる。

「きゃあああっ！」

といっても、ヴァギナにはすでにたっぷり巨峰を挿入されているので、剛直は思うように入っていかない。

「菊華ちゃん、入れすぎじゃないの？　半分も入らないよ」

「そうかしら？　たったの10粒しか入れてないけど……。もうちょっと押してみたら？　たっぷりシェイクすれば、おいしいグレープジュースになるわよ」

「いやぁあっ！　それ以上入れないでぇっ！　壊れちゃうっ！　おま×こ裂けちゃうのぉーっ！」

英里奈はポロポロ涙をこぼし、這って逃げようとする。でも菊華が英里奈の上半身を捕まえて抱き寄せ、キスをしながら乳房を揉みしだく。

「こんなの、今まで小説で書いたことないでしょ？　3Pよ。わかる？」

硬くなったチ×ポで女壺を乱暴にかきまわされるうちに、ぶとうの皮がこすれて破け、甘酸っぱい液が秘唇を濡らしはじめる。

「もっ、もう少しだ。……あとちょっとで……」

原田のペニスは半分近くクレヴァスの中に入っている。太幹はつぶれたぶどうの液とラ

ブジュースにまみれ、女陰を犯しながらニチャニチャと淫らな音をたてる。
華奢なウエストをつかまれ、カチカチになったペニスを秘孔に激しく出し入れされると、英里奈の頭の中は真っ白になり、エクスタシーの波がどんどん盛りあがっていく。
「はっはっ……はぐぅぅっ。いっ……いいのぉおっ！　感じるのぉおっ！」
「英里奈、あたしのも触って」
手をつかまれ、菊華のま×こに持っていかれる。そこはもうぐっしょりと露を帯びて、信じられないほど熱く火照っていた。英里奈は充血しているクリ×リスを親指で転がしながら、中指を秘孔に押し入れる。
「あうんっ！　もっとっ！　2本入れてっ！」
菊華に命じられるまま、指を2本入れ、肉襞をかきまわす。
「いっイクぅうーっ！」
英里奈はバックから激しく犯され、目の前の親友の花園をいじりながら絶頂に達した。
「まだまだ」
原田は硬くなったままのペニスを女陰から抜き、英里奈をあおむけにして狭間を舐めはじめる。
「ひっ、ひぁああっ！　や、やめてぇ……」



気絶しかけていた英里奈は、クリ×リスを舐められて目を覚ました。

菊華は英里奈のマ×コを舐める原田の股の間に頭を入れて、屹立した剛棒にフェラチオをしている。さらに、片手でオナニーしながら、ヒップを妖しくくねらせていた。

「英里奈ちゃんのラブジュース、すごくおいしいよ。菊華ちゃんも舐めてごらん」

「それじゃ、あたしも……」

菊華の舌は、英里奈が特別敏感に感じる方法を原田よりもよく知っている。舌先でついばむようにクリトリスを刺激され、英里奈は絶叫してしまう。

「やーっ！　おかしくなっちゃうのぉ～っ！」

菊華は英里奈に覆いかぶさって、シックスナインの体勢を取る。その体勢で英里奈のクリ×リスを嚙みかみする菊華のアヌスに、原田が硬直した肉棒を挿入する。英里奈はぼうっとかすむ目の前で揺れる菊華の肉芽をさがし、指でこする。

「んんっ……ふみぃ～っ。もっ、もぉおっ……あぁぁ～！」

最初にイッたのは英里奈だった。タイルの上で弓なりにのけぞり、ビクビクッと身体をけいれんさせる。どぷどぷっと溢れるグレープ味の愛液を舐めていた菊華も数秒遅れて絶頂に達した。

「うっ！」

原田は射精する直前、菊華の狭間からペニスを抜き取り、スペルマを英里奈の白い腹の上にぶちまけた。
「あっ……ああ……」
巨峰の甘い香と栗の花に似た精液の香が混ざり合って、バスルームに充満する。
あたし、とうとう３Ｐしちゃったんだ。３Ｐってほかの人が書いた小説でしか読んだことないけど、本当に気持ちよくって凄すぎるよぉ……。
原田が手早くシャワーを浴びはじめる。
「ひょっとしてチャイム鳴ってない？」
菊華に聞かれ、英里奈は耳を澄ました。ドアの向こうでチャイムが鳴っている。
「もしかして……」
「英里奈のお母さまが迎えにきたんだ！」
「ど、ど、どうしよう!?」
「原田さんならあたしにまかせて。でも、サイン会はどうするの？」
「きのうの人がかわりに出てくれることになってるの」
「じゃ、もういったほうがいいよ。あとはあたしたちでなんとかするから」
ふたりにせかされ、英里奈はバスタオル１枚のエッチな格好で玄関へ出ていく。

思った通りドアのむこうには着物姿のお母さまが立っていた。英里奈のバスタオル姿を見て、不審そうに眉をひそめる。
「もう12時ですよ。そんな格好でいったいなにをしていたんです？」
「え？　そのう……おま……お見合いのしたくにシャワーを浴びてたんです」
まさか、濡れぬれホットなおま×こに巨峰と巨砲をダブルで入れてもらっていた、とは言えないので、あわてて言いわけをする。英里奈は内心自分の頭をポカポカ殴った。
ホントなら、恋人がいるからお見合いなんかしない、って言うつもりだったのに！……
「まぁ。そうなの。それじゃあ早くいきましょう。タクシーを待たせてあるから、簡単な服装でいらっしゃい」
英里奈は渋々寝室へ戻った。とっておきのランジェリーとお出かけ用のワンピースに着替えていると、菊華が入ってきた。
「さっきの巨峰、携帯用のビデで洗うといいわよ」
「ありがと。……できたらサイン会にいくようにするわ」
数分後、英里奈はお母さまと一緒にマンションの前を出発した。

第5章　振り袖姿で危機一髪！

硬くなった乳首に歯を立てられ、由美子は目を覚ました。
気がつくと、マイクのコードで後ろ手に縛られ、冷たい床の上に転がされていた。頭上には明かりの消えたライトがいくつもぶらさがっている。どうやら使用されていないスタジオの中にいるようだ。裸にひん剝かれた身体の上には男が覆いかぶさっていて、片方の乳房を揉みながら、乳首をコリコリ嚙んでいる。
「い、いやっ！」
身をくねらせると、男が顔をあげた。ＡＤの江川だ。その後ろにはバイトの長嶋がパンツだけの姿で由美子の太腿を抱えこんでいる。江川は由美子と目が合うと、ニヤリと笑う。
「気がついたのか？」

「ど、どういうことなのっ⁉　この縄をほどいて！」
「いっぺんでいいから、高慢ちきなあんたを犯ってやりたかったんだ。オレたちのチ×ポをありがたくちょうだいするんだな」
長嶋は、由美子の股間をきつく締めあげている皮紐をハサミで切断する。それから、白い両脚をおっぴろげ、股間に突き刺さってブルブル震えつづけているオトナのオモチャを乱暴に抜き取り、透明な液でぐっしょり濡れそぼったおま×こに指を突っこむ。
「やっ、やめっ……ひぃいっ！」
「すげぇな。こいつ、こんなに太いバイブをはめたまんまで本番に出てたんだぜ」
「毎晩やってやがったのか？　えっ？　答えろよ」
股奥をつねりあげられた由美子は、悲鳴をあげる。
「ち、ちがうっ！」
江川はのけぞる由美子の肩を押さえつけて、白桃のような尻を舌で舐めあげる。アヌスを指で刺激すると、おま×この穴からたらたらっと愛液が溢れでた。
「やっ、やめてっ！」
勃起しているクリ×リスを刺激されて、由美子の息はイヤでも荒くなっていく。
「バイブとチ×ポ、どっちをはめて欲しい？　えっ？」

「どうせならいっぺんに犯っちまえよ」

「それもそうだな」

「いやあああーっ！」

絶叫する由美子のアヌスに愛液でぬらぬら光るバイブが突き立てられる。狭隘な肉門は裂け、血がにじむ。江川は間を置かずに先細りしたペニスを女陰にぶちこむ。長嶋は由美子のあごをつかみ、硬くそりかえったチ×ポを唇に押しこんだ。

「おらっ！　たっぷりしゃぶんねぇと、マ×毛を1本ずつ抜いてパイパンにしてやるぞ」

サドの気があるのか、長嶋は言いながら由美子の若草をブチッと4、5本引っこ抜く。由美子は涙を流し、しかたなく口いっぱいにふくれあがった男根を舐めはじめる。吹きだす汗とカウパー液の入り混じるいやな臭いが鼻孔を満たし、吐き気がしてくる。

どうしてこんな目にあうの？　わたし、悪いことなんかなにもしていないのに……。

ふたりの男は由美子を四つん這いにさせて、上と下の唇を激しく犯す。柔肌に爪を立て、形が変わるほど乳房をきつくつかみながら、腰を大きく律動させた。敏感な粘膜は欲棒の出入りを助けるように愛液を吹きだし、にちゃにちゃと淫らな音をたてている。

「すげぇ濡れてやがる。こいつ、潮吹きだな」

「締めつけもいいぜ。もうイキそうだ。……最高だぜ」


Beeeh

硬くなったチ×ポから湧き起こる、身震いするような快感をたっぷり味わっていた江川のこめかみに、音もなく冷たいものが押しつけられた。
「なっ……」
横を向こうとして、顔色が変わる。すぐ目の前にピエロのマスクをかぶった男が立っていた。頭に押しつけられているのは黒光りするピストルだ。
「おいっ……」
長嶋も気づき、あ然とする。由美子の口いっぱいに怒張していたペニスが、みるみるうちに縮んでいく。ピストルの撃鉄を引くカチリという音が無気味に響く。
「命が惜しかったら今すぐここから出ていけ」
くぐもった声がふたりに命令する。
「お、おいっ！」
ふたりは瞬時にして嬲りあげていた由美子の身体を投げだし、脱ぎ捨てた服をかき集めてスタジオの外へ逃げていく。
由美子は震えている乳房を隠すことも忘れて、ペタリと床に座りこんだ。ピストルをつきつけながら近づいてくるピエロをじっと見つめる。
マスクをかぶった男は、由美子の前に黒い毛皮のロングコートを投げだした。

「それを着るんだ」

両手のいましめを解かれても、由美子には抗う気力もない。本番前、控え室でバイブを女陰に突き立てた男が脳裏にフッと浮かぶ。だが、この状況で由美子になにができるだろう？　仕事仲間に口とおま×こを犯され、白い肌にはキスマークが点々とついている。パンティ1枚身につけていないこの姿では、誰かに助けを求めることすらできない。ガタガタ震えながら毛皮を肩からはおり、おずおずとピエロを見あげる。

黒い皮手袋をはめた手に、大型犬用の太い首輪がぶらさがっていた。怯えた目で見つめている由美子の首に、その黒い首輪がはめられる。ベルトの前面に銀色の留め具があり、ぶらさがった長い鎖の先には手錠がついていた。

由美子は奴隷のように首と両手を拘束され、床の上に立たされた。脚に力を入れた拍子にヴァギナがキュッと収縮してしまい、透明な液が秘唇から溢れて太腿を伝う。素肌にまとった毛皮はかなり高価なものらしく、重さがほとんど感じられない。

「わたしをどうするつもりなの？」

冷静に振る舞おうとしても、声の震えはとめられない。

ピエロは背広のポケットからサングラスを出し、由美子の顔にかけた。レンズに特殊な加工をしているらしく、かけるとなにも見えなくなってしまう。

「誰かに助けを求めたり、逃げようとしたら、おまえの命はないものと思え」
由美子は犯罪者のように手錠をつかまれ、連行されていった。廊下を裸足で歩くひたひたという音が耳に響く。毛皮は暖かいけど、裸足の脛に当たる空気は冷たい。耳を澄ましてみても、誰ひとり出会う者はいない。
やがてピエロは立ちどまり、ギッと音をたてて分厚いドアを開く。
このままどこへいくの？　生きてまたこの放送局に戻ってくることができるの？……
由美子は背筋に冷たいものを感じつつ、手錠を引かれるままに外へ1歩踏みだした。

☆

英里奈が連れていかれたのは、ホテル・ロイヤルスターキングだった。ホテルの中にある美容院でセットをし、お母さまが持ってきた着物に着替える。
着付け係のおばさんは、ワンピースを脱いだ英里奈に言った。
「下着はつけないでくださいね」
「えっ？　どうして？」
「着物はバストとお腹の段差が少ないほうがきれいに着付けられるんです。ブラジャーははずして、できればラインがヒップに出ないよう、パンティも脱いでください」
「はぁ……」

裸になったら、あたしがもうバージンじゃないってことがバレたりしないかしら？……

英里奈は妙なことを心配しながら、おばさんに背を向け、全裸になった。すべすべしてきめこまやかな肌の上に、着物用の下着と襦袢（じゅばん）、振り袖を着せられる。

準備が終ったのは2時30分前だった。ふかふかしたジュウタンを敷きつめた廊下を急ぎながら、英里奈はユウヤのことを思いだしていた。

あいつ、マジでちゃんときてくれてるのかな。黒須の代役をやるって約束はしたけど、イメージダウンになるようなことをしたりしないかしら？……

今すぐクルッとまわれ右してサイン会に駆けつけたい。それほど心配でたまらないのに、事情を知らないお母さまは『扇の間』の前で立ちどまり、英里奈に言った。

「いいですか？　先方はとても格式の高いお家柄のお方なのよ。くれぐれもそそうのないようにね」

「はい。気をつけます」

「遅くなって申し訳ございません」

お母さまがとびきりの笑顔をつくって入っていく。英里奈も後につづく。

アイボリーのクロスがかけられた四角いテーブルを挟んで、英里奈のお父さまと相手の両親が座っている。お父さまは着飾った英里奈を見て眉をしかめた。

「遅かったじゃないか」

「あら、あなた、ちょうどですわよ」

すましこんだお母さまが答える。

「ええ、わたしたちが少し早すぎたんですよ。ねぇ、あなた」

ちょっと太めでやさしげな目をした50代前半の女性が口を添える。隣りに座っている同年輩の男性は逆にいかめしい顔つきで、モジャモジャの頭と太い眉毛をしている。

「桐島さんご夫妻よ。英里奈、ごあいさつなさい」

「はじめまして」

英里奈はあいさつをし、イスに座りこむ。帯がきつくて苦しいけれど、それ以上に恥ずかしい狭間に押しこまれた巨峰のことが気にかかる。

スキャンティは脱いじゃったし、ヘタすると、愛液とぶどうの液のミックスジュースがたらたら溢れてにおいがしちゃうかも⁉……

考えるといてもたってもいられなくなる。太腿のつけ根が濡れているような気がしてソワソワしていると、英里奈のお母さまが見合い相手の母親に質問した。

「お坊ちゃんはたしかK大の文学部を卒業されたのでしたわね？」

「ええ、ギリギリで入学できたんですよ」

「K大にストレートで入学するなんて、凡人にはできることではありませんわ。素晴らしい血筋を引いておいでですのね」

英里奈は、なにかってーと『血筋、家柄』を持ちだすお母さまにうんざりしてしまう。

ふとその目が相手の母親とぶつかった。

「英里奈さんは、学校でなにかクラブに入ってらっしゃるの?」

「え? クラブですか?」

一瞬返事に困った。文芸部に入っているのだが、文学関係が大きらいなお母さまには内緒にしてある。女の子に超人気のポルノ小説家『黒須裕也』は英里奈だ、なんてことを告白したら、白目を剝いて卒倒するかもしれない。

「クラブは別に入ってないんですけど、図書委員をしてます。本を読むのが好きなので」

案の定、お母さまがギロッと英里奈をにらむ。

「まぁ、そうなの。わたしも小説が大好きなのよ。わたしたち気が合うみたいねぇ」

「そうですね」

英里奈は引きつり笑いでその場をごまかし、お母さまにこっそり言った。

「あの。ちょっとお手洗いにいってもいい?」

「あら、どうして? お腹でも壊したの?」

「いえ、ちょっと、気分がすぐれなくて……。すみません、失礼します」
英里奈はそれ以上追及されないうちに、とっとと『扇の間』を出た。トイレの個室に入り、着物の裾をまくりあげる。
「もぉっ！　着物って面倒なんだからぁ」
ブツブツ言いながら太腿を剝きだしにする。思った通り、ぶどうの液が混じった愛液が秘孔からとろりと溢れだしている。洋式の便座に座り、菊華に借りたビデを取りだす。ラブジュースをトイレットペーパーでぬぐい、首をかしげた。
「ビデってどうやって使うんだっけ？　やっぱり、ここに入れるのかな？」
指でさぐるとエッチな穴がヒクヒクッと動いた。
「興奮してなくても入るのかな？……あ、そっか。そういえば、タンポンって興奮してない時でも入れれるんだっけ」
英里奈はペロッと舌を出し、片脚を抱えこむ。もう一度指で秘孔の位置を確かめ、ビデのノズルをゆっくり挿入した。それだけで背筋がブルブルッと震えてしまう。
「んっ、あはっ……。入ってきちゃう」
おま×この穴にビデを入れたまま、ついついクリ×リスをいじってしまう。
「みゃうっ！　あんっ！　はぁあんっ」

ほんの数分肉芽を嬲ったただけなのに、英里奈は軽くイッてしまった。真っ赤な顔でヴァギナを洗浄し、ペーパーでていねいにぬぐって着物を直す。

「も〜っ、あたしってば、エッチなんだからぁ……」

薔薇色に染まった顔で大きな鏡を覗きこむ。はずみとはいえ、トイレでオナニーしたのがとても恥ずかしい。真顔になって頭の中からエッチな記憶を追いだそうとする。

「時間通りにこないんだもの。どうせ見合いなんかする気ないんだわ。それならそれで、あたしもサイン会にいっちゃおうっと！……頭痛でバックれようかな？　それとも腹痛がいい？　ちょっとお下品だけど、お腹がゴロピー下っちゃったってことにして……」

「よう」

男の声に振り向くと、ドアの前にきのうのうらなりナスビが立っている。英里奈は思いがけないことに、呆然としてしまった。

「いいカッコしてるじゃねぇか」

ナスビは葬式の時に着るようなダサダサヤボピーな黒い背広に、真っ黒なサングラスをかけている。薄い唇の端に笑みを浮かべてニヒルな中年の紳士を装っているが、逆立ちしても病みあがりの麻薬中毒患者にしか見えない。着物のたもとをつまんでブラブラさせ、無理に押し殺した声で英里奈に言う。

「きれいなおべべとホッペに傷つけて欲しくなけりゃ、おとなしくブツを出すんだな」
「おまたせぇ〜」
新たな甲高い声に振りかえった英里奈は、大爆笑してしまった。
「うっ、うそっ!? きゃはははははは……」
ナスビの相棒、つぶれトマトがホテルのメイドさんの制服を着て立っている。サーモンピンクのミニ丈のスカートに、黒いビロードのリボンタイがワンポイントになった同色のフリルつきのシャツブラウス。スカートの下からベージュのストッキングに包まれた大根足がプリッと出ている。目をこらしてよく見ると、黒くて短いスネ毛がムーミン谷のニョロニョロみたいにゾロゾロッとはみだしている。おまけに、髪はひっつめで、顔には薄化粧までしている。
「なっ、なんだ、そりゃ?」
うらなりナスビもアングリ口をあけ、うわずった声でトマトに聞く。
「この子を捕まえるなら、ホテルの従業員に化けるのが一番だと思ったのよぉ。だけどぉ、男の従業員のロッカールームは人がいて入れなくってぇ……」
つぶれトマトはモジモジしながらオカマことばで答えた。後れ毛をかきあげる右手は、昨夜非常ドアに挟まれたせいで、白い包帯でぐるぐる巻きにされている。

「どこかおかしいかしらん？　お化粧はノリノリバッチリ、ぴったりウットリコンコンチキチキだと思うんだけどぉ……」
「も、も、もぉダメっ！　わ、笑えるよぉおっ！　ひゃひゃひゃひゃひゃ……」
英里奈は文字通りふたつ折りになって笑い転げ、涙を流して身をよじる。
「わ、笑うんじゃねぇ！　それ以上笑うと、マジでぶっつりいくぜ！」
ヒィヒィ言いながら笑いつづける英里奈の首筋に、冷たいものが押しつけられた。ハッとして見ると、鏡の中で果物ナイフがギラリと光る。
「な、なんなの、あなたたち」
「オレたちが誰だろうとかまわねぇ。ともかくもう笑うな」
ナスビは恐ろしいマフィア風の表情をつくって英里奈を脅す。でも、箸が転がってもおかしい年頃の少女に笑うのをやめろなんて無理な相談で、ゲラゲラ笑いつづけてしまう。
目尻に浮かんだ笑い涙をぬぐう英里奈を見て、つぶれトマトは真っ赤になった。
「もぉっ！　どうしてそんなに笑うのぉ？　そんなにあたし、変かしらぁ？」
「るせぇ！　おまえは黙ってろ。姉ちゃん、おとなしくブツを渡しな。でなきゃ痛い目を見ることになるぞ」
ナイフでピタピタ頬を叩かれ、英里奈の脳ミソに血が逆流した。

プチッ！
今のは血管が切れた音だ。
「あ……っタマきたっ！」
英里奈は目の前に立つナスビの足を思いきり踏みつけた。
「んぎゃーっ！」
ナスビはナイフを落とし、両手で踏まれた足を抱えてピョンピョン飛びあがる。
英里奈は懐かしの欽ちゃんファミリーもほれぼれするようなみごとな横っ飛びで、壁に立てかけられていたモップをつかんだ。下段に構え、双眼にリンと力をみなぎらせて叫ぶ。
「ナギナタ握って12年。それ以上近づいたら、こいつをお見舞いしてやるからねっ！」
「お、おい、なんのつもりだ？」
「おとなしくブツを渡しなさいよぉ！」
「ブツ？『ぶつ』って、こういうこと？　えーい！」
そう言って、英里奈はモップの柄でナスビの脳天をしたたかぶちのめす。
「げあっ！」
「きゃあんっ！　淳ちゃんになにするのよぉっ!?」
英里奈は、殴りかかってくるトマトの見るからに痛々しい右手をベシーッと叩いた。

「いぅおぉおおーっ！」

つぶれトマトはのどを絞められたメンドリみたいな悲鳴をあげて、床を転げまわる。

「くそっ！　このアマ！」

いち早く体勢を立て直したナスビが、背後から抱きついてくる。身をよじって逃れようとする英里奈の着物の襟に両手をかけ、力まかせにひん剝いた。はずみでモップが手から落ち、白い乳房が剝きだしになる。

「やーっ！」

「んまぁっ、99センチのFカップねっ！　許せないわっ！　おいしそうじゃないのっ！」

はがい締めにされて動けない英里奈の乳房に、トマトがむしゃぶりついてくる。ぬらぬらした舌は乳首に巻きつき、敏感な突起をチュウチュウ吸いあげる。

ナスビの手は着物と襦袢の裾を割り、太腿のつけ根に侵入する。オナニーで軽くイッたばかりのノーパンの花園を指でなぞられ、英里奈はつい甘い声をもらしてしまう。

「あっあっ……やめっ……やめてっ。はぁあっ♡」

「スケベなアマだぜ。もうよがってやがる。……これはどうだ？」

クリ×リスを2本の指で揉みしだかれ、同時に秘孔を指でえぐられると、英里奈の身体はビクビクッとけいれんする。肉壺の奥に残っていたぶどうの果実が愛液とともに溢れて

くる。
「甘いにおいがするじゃねぇか。おま×こになに突っこんでたんだ？　白状しろよ」
「なっ、なにもっ……」
指を3本ずぶずぶーっと秘唇に入れられ、英里奈はひいいっと悲鳴をあげる。
「いっ、言えないっ。言えないのぉおっ！」
「淳ちゃんが白状しろと言ってるのよ。素直に白状したらどうなの？」
「いやっ！　離し……ああんっ！　はぁああっ」
トマトに乳首をつねられ、身体の奥を電流が流れる。
ナスビのタバコのヤニで茶色く染まった指は、ぢゅぷぢゅぷと秘唇の奥を出入りしている。
誰か助けて！　警察……。ダメだわ。お母さまにこんなトコ見られたら、もう感動されちゃ……やんっ。ちがうでしょっ！　勘当されちゃう……。
「くっ、くぅうっ」
「どうだ、言う気になったか？」
英里奈は涙をこぼしながらイヤイヤと頭を振る。
「どうやら下のお口に答えてもらわなきゃなんねぇようだな」

ナスビは英里奈の前にしゃがみこみ、ぐっしょり濡れそぼっている花びらを指で左右にかき分けた。プクッと充血した真珠を剝きだしにして、レロレロ舐めはじめる。

「いっ、いやあっ！」

レイプされるなんてイヤっ！　でも、レイプされたらどうなるんだろう？　大きらいな男に犯されて、イヤなのにイッちゃう……とかって小説の中で書いたことがあるけど、やっぱり感じちゃうの？……

想像で書いたことを実際に試してみたい気もするけど、やっぱり恐い気持ちもある。

英里奈は狂ったようにヒップを振り、肩を揺すって男の腕から逃れようとする。

「やめてぇえっ！」

トマトは自分のブラウスからリボンタイを抜き取り、英里奈にさるぐつわをかませた。

「いいこと、淳ちゃんに正直に言う気になったら、目で合図するのよ。わかったわね？」

「むっ、むぐぅーっ！」

おま×こを指で犯され、英里奈はなにも考えられなくなっていく。

助けてっ！　このままじゃ、あたし、おかしくなっちゃうっ！……

「尻振ってよがってねぇで、こいつを見てみろ」

床にひざまずかされた英里奈は、目の前に突きつけられたペニスを見た瞬間、恐怖に身



をわななかせた。
貧相な体に似合わず、ナスビのチ×ポは巨大だった。まるでイ×ローが試合で使うバットのようだ。もちろん長さは半分以下だが、肉竿と亀頭はかなり太く、少なく見積もっても直径5センチ以上はありそうだ。
「へっへっへ。怖いか？　怖いんだろう？」
ナスビは巨根を片手でブルブル揺すってみせる。太竿の下では驚くほど大きなキ×タマがぶらぶらしている。肉竿もタマタマも、かなりの重量がありそうだ。
「淳ちゃんのは入れるととっても気持ちいいのよぉ。女の子なら誰だって絶対3回はイッちゃうんだからぁ」
トマトがうっとりしながら英里奈に説明する。
ビデで洗浄し切れなかったぶどうの残骸が混じる愛液をしたたらせ、甘く香る充血した狭間にゴールデンバット……もとい肉製のバットの先端が押しつけられる。
ダメぇッ！　そんなの入れたら裂けちゃうっ！……
「んぐううーっ！」
「そんなに喜ばなくたって、今すぐハメてやっからな」
ばかでかい亀頭が秘孔にめりこんだとたん、英里奈はさるぐつわの下で絶叫した。

だめぇえーっ！　入らないーっ！

「狭いな。ひょっとして処女だったか？」

ナスビがつぶやいた時、女子トイレの扉が激しい音とともに開いた。

「おい、なにしてるんだよ？」

「うるせぇ、ガキは引っこんでな！」

「そうよぉ。わたしたち、お楽しみの真っ最中なんだからぁ。用を足すなら男子トイレでなさいよ」

「あいにく、用があるのはその女なんでね」

どうしよう!?　誰かに見られちゃった！　もうお嫁にいけないよおっ！……

ボロボロ涙をこぼして泣きだす英里奈の後ろに、なぜか背広姿のユウヤが立っている。

ユウヤは飛びかかってくるトマトの腹に拳をめりこませた。

「このガキっ！」

ナスビはほんの2センチほど挿入していたチ×ポを抜き取り、ナイフを逆手につかんで突進する。しかし、黙って胸に凶器を食らうようなユウヤではない。さっと身をかわし、首筋に手刀をぶちこむ。うつぶせに倒れかかる腹に膝蹴り（ひざげ）りを決め、組んだ両手で背中をどやしつける。ナスビは声も出せずに床に倒れた。

「じっ、淳ちゃんっ！」
メイド姿のトマトは汗で化粧がぐちゃぐちゃに乱れた顔をあげ、ユウヤをねめつける。
「あんたたち、覚えておきなさいよっ！　えぇいっ！」
隠し持っていたものを床に投げつけた直後、あたりにもうもうと白煙がたちこめはじめる。煙を探知したスプリンクラーが水を噴出し、火災報知器が鳴り響いた。
「チッ！　発煙筒か!!」
英里奈はさるぐつわは自分ではずせたが、腰が抜けていてすぐには立てない。へなっと座りこんでいると、腕をつかまれひょいと抱きあげられた。
「いやーっ！」
「オレだっ。暴れるな！」
ふたり組に拉致（らち）されると思っていた英里奈は、声の主を見ておとなしくなった。
「ゆ、ユウヤぁ……ふぇぇえんっ」
ユウヤは首にしがみついてくる英里奈を抱きあげたままトイレを出た。トマトが人払いのために立てておいた『清掃中』の看板を蹴倒し、廊下の突き当たりにある非常出口から外へ飛びだし、まだ泣いている英里奈を階段に座らせた。
「どっ、どうしてこんなとこにいるの？　サインが会がはじまっちゃうのに……」

「ああ。わかってる。ヤボ用があったんだ。これからいくよ」
ユウヤは両膝に手をつき、肉厚の胸で深呼吸しながら、ちらっと英里奈をにらんだ。
「それより、入れられたのか？」
「え？　入れられるってなにを？」
「あいつのチ×ポだよ。オレよか太かっただろ？」
英里奈はユデダコよりも真っ赤になった。ユウヤから目をそらし、言葉を濁す。
「そっ、そんなこと……」
「どうなんだよ？　はっきり答えろよ」
「知らないっ！　そんなこと、言う必要ないもんっ！」
「なんだよ？　答えないってことは、入れられたってことかよ？」
「あなたなんかに関係ないわ。とにかく、今すぐサイン会にいってよ！　約束でしょ？
あたし、処女だったのに、あなたに6回も犯られてあげたんだから」
「チェッ。不満そうな言い方すんなよな。さんざんイキまくって、最後にゃオレのチ×ポをうまそうにしゃぶって離さなかったクセに」
英里奈はムッとしてユウヤをにらみかえした。
「約束が守れないんなら、ここでレイプされそうになった、って騒いでもいいけど？」

「ふんっ。可愛くねぇやつ！……じゃあな」
ユウヤはくるりと背を向け、非常階段を素早く駆け降りていく。ひとり残された英里奈はため息をついて、遠ざかる足音に耳を傾けた。
「最低。あんなやつだと思わなかった……」
つぶやきながらプッとふくれていると、非常ドアが中から開いた。
「英里奈ちゃんっ！　だいじょ……んまぁっ！　どうしたのその格好は⁉」
お母さまはあんぐりと口を開いて黙りこむ。英里奈の身体を上から下まで見まわして、目をぱちくりさせる。英里奈ははだけられた着物の胸もとを急いでかき合わせた。
「だっ、だいじょうぶなの。おトイレで帯がほどけちゃって、直そうとしたんだけど、うまくいかなくて……」
「まぁ、そうだったの。びっくりしたわ。火災報知器が鳴るんですもの。それにしてもずいぶん乱れてしまったわね。これでは、全部脱いでしまわないと直せないわ」
英里奈は内心ホッとした。
「それじゃ、お見合いはやめるってことで……」
「そうはいかなくってよ。大切なご縁談ですもの。ぼや騒ぎでダメにするなんてもったいないわ。今すぐ着付けをし直してもらいましょう」

お母さまは渋る英里奈を美容室へ連れていった。
着物を直して『扇の間』に戻ってみると、お見合いの相手はなぜかまだきていない。
「どぉーもすみません。お待たせいたしました。……あら、お坊ちゃんは？」
「まだです。……それにしても遅すぎる！」
先方の父親が叫んだ時だった。ドアにノックがあり、ホテルの従業員が入ってきた。父親の耳になにやらコソコソ伝言を伝える。
「なんだとっ！　この、親不孝者がっ！」
大声で怒鳴り散らす父親を、そばで話を聞いていた母親が必死になだめる。
「しょうがないじゃありませんか、あなた。……大変申しわけありませんけど、息子の都合が悪くなりまして……。また、別の機会を設けてはいただけないでしょうか？」
「それじゃあ、あたし約束がありますので、これで失礼します」
英里奈もすかさず席を立つ。お母さまに呼びとめられたが、無視して廊下を突っ走る。
サイン会まで、あと10分！……
英里奈はホテルを抜けだし、タクシーに飛び乗った。

第6章　蘭とユウヤの衝撃キッス

由美子はテレビ局の廊下を歩きつづけている。
得体の知れぬ男にピストルを突きつけられていると思うと、背筋が寒くなる。目を覆うサングラスは遮光性が高く、なにも見えない。不安のあまり肩越しに男に問いかける。
「どこへいくの？」
返事のかわりに銃口で背中を押されてしまい、由美子は小さな吐息をもらした。
このままどこかへ拉致されて殺されるの？　それとも、何人もの仲間がいて、輪姦される？　いずれにせよ、あのフィルムだけは命をかけてでも取り戻さなくちゃ……。
「そこでとまれ」
由美子は命ぜられるまま立ちどまった。男の気配が横を通り、目の前のドアが開く音が

する。夜風がサッと吹きこみ、剝きだしの脛を撫であげる。
ふと、別の人間の駆け寄る気配がした。
「うぐぅっ！」
うめき声とともに、男が由美子の身体に倒れこんできた。そのはずみでサングラスがはずれ床に落ち、小さな音をたてて割れた。
ハッと足もとを見ると、由美子を脅していた男はしゃがみこみ、左胸を押さえている。歩いている途中にマスクをはずしたのか、あらわになった素顔に驚愕の表情を浮かべ、ずるずる床にへたりこむ。
「小室教授っ⁉」
由美子は悲鳴をあげた。大学時代、経済的な援助と引き換えに由美子の若い肉体をむさぼっていた小室が、目前に倒れていたのだ。胸を押さえる五指の間から細いナイフの柄が飛びだし、じわじわと血がにじみでている。
「教授っ！　しっかりして！」
由美子は拘束された不自由な両手で小室の肩を抱き、犯人を見あげた。
「どうしてっ⁉　どうしてこんな……」
声が途切れた。本番前、控え室で由美子の女陰にバイブを押しこんだ男が、目の前に立

っていた。薄く笑みを浮かべ、冷酷な目つきでふたりを見降ろしている。
「小室は我々の要求を拒否した。もはや用ずみなのだ」
「どういうことなの？」
男は由美子の前に白いフィルムケースを出して見せる。
「スキャンダルなど怖くない。写真を公表するならしてもいい。こいつはそう言っていたが、おまえはどうするかな？」
この男はあのフィルムをネタに、小室教授を強請っていたんだ。教授はそれを拒否したせいで、こんなところで命を落とすことに……。
由美子の腕の中で、小室の体はどんどん冷たくなっていく。
「教授、しっかりして……」
声をかければ息を吹きかえす。そう信じているかのように、涙声でささやきながら小室の頬に頬をすり寄せる。この男を愛していたわけじゃない。それでも、数年間身体をかわし、様々なことを語り合った記憶が由美子の胸を切なく締めあげる。
「わたしと一緒にくるんだ」
由美子は肩をつかむ男の手を思わず振り払った。男をにらみつける双眼には涙が溢れている。

「人の命を奪う権利は誰にもないわ！　あんたなんか地獄に落ちてしまえばいいのよ！」
他には誰もいない廊下に由美子の声が響き渡る。
涙で濡れた頬に男の平手が飛んだ。由美子は頭を壁にぶつけ、はずみで小室の屍がゴトリと床に落ちる。
「泣きごとを聞いている暇はない。さっさとくるんだ」
喉輪からぶらさがる銀色の鎖をつかまれ、乱暴に立たせられる。非常口から外へ出ると、階段の下に黒いローレルがとまっているのが見えた。由美子は全裸に黒いロングの毛皮をまとっただけの姿で、車の後部座席に押しこまれた。男が後から乗りこみ、車は音もなく走りだす。
男は当然のように由美子の毛皮をはだけた。白い太腿の奥に指を這わせて、すでに複数の男のだ液と淫水にまみれた恥丘に、右手を押しこむ。
「イヤッ！」
由美子は目の前で小室を殺されたショックからか、ガタガタ震えながら身をよじる。ところが、簡単にシートに押し倒されてしまい、乳房をわしづかみにされた。そのうちに乳首がピンと張りつめ、全身が熱くなった。ぬらぬらした男の舌は腹部を伝い、股間へと降りていく。充血してプクッとふくれた肉芽を舐め、愛液をちゅぶちゅぶと吸いあげる。

敏感な秘孔を太い指でズボズボえぐられ、クリ×リスに歯を立てられてはたまらない。由美子は背中をのけぞらせ、とうとうあられもない声をあげてしまう。
「ひっ……ひぁあっ！　いいっ！」
「バイブをはめたまんまで本番に出るとは思わなかったぜ。100万人以上の視聴者が見ている前で失神するとは、根っから淫らな女だな」
「いっ、言わないでぇっ！」
由美子はイヤイヤと頭を振り、おま×こを指で嬲(なぶ)られながら腰を妖しく揺すりたてる。太く硬く勃起したペニスを求めて、ヴァギナの入り口をひくつかせる。
車が赤信号に引っかかって停止した。
「やっ、やめてぇ……」
こんな格好を誰かに外から見られたら……と思い、羞恥で顔が熱くなる。それでも、激しい愛撫を受けて敏感になっている由美子の身体は、剛直が欲しくてたまらない。エッチな下の唇からトロトロの淫蜜を溢れさせ、身もだえしながら男の胸にすり寄っていく。
「お、お願いっ！　ほ、欲しいのっ」
「指だけじゃ不満か？　こいつをおま×この奥まで突っこんで欲しいんだろ？」
男の太竿が目の前に突きつけられた。たくさんの男たちにつづけざまに嬲られたため、



由美子の神経はすっかり錯乱していた。普段なら絶対に口にしないようなあられもない言葉を思わず口走っていた。
「入れてっ！　由美子のおま×こに入れて欲しいのっ！　チ×ポを根元まで突っこんでメチャメチャにかきまわしてぇっ！」
男は由美子の髪をつかみ、半開きになった唇に剛棒を押しこむ。
「入れて欲しかったらたっぷりしゃぶんな。おま×こは、後でたっぷり犯ってやるぜ」
由美子は子供がアイスキャンディーを食べるように、硬くそりかえったペニスを夢中になって舐めはじめる。竿に手を添え、根元から敏感な先端へとていねいに舐めあげる。
車がとある高級マンションの地下駐車場に入ったことには、全く気づいていなかった。

☆

タクシーを降りた英里奈は、池で溺(おぼ)れたアヒルみたいにバタバタ袖を振りまわしながら二之国屋書店のサイン会会場へ走った。
だが、奥まで行かないうちに人垣にぶつかり、それ以上は動けなくなってしまう。
「これって……」
中、高校生の少女たちが胸に抱えているのは黒須裕也の文庫本だ。中にはOLらしき女性もいて、薔薇の花束やリボンのついた贈り物を持って立っている。

「ちょっと見てよ。やなオンナぁ～」
「裕也サマのサイン会に着物なんか着てくるなんて、めだとー根性マルだしじゃん？」
振り向くと、16～17歳くらいの女の子が英里奈をジロジロ見まわしている。
「これって、黒須裕也のサイン会なの？」
「そうよ。あんた、整理券がないんなら、最後尾に並んだら？」
やっぱりあたしのサイン会なんだ！　こんなにファンがいるなんて、すごい！……
英里奈の胸がジーンと熱くなる。感激の涙でうるうるしながら背のびして奥を覗きこむと、2階のヤングアダルトコーナーの隣りにイスとテーブルがセットされていて、天井から『裕也クン』のポスターがさがっていた。でも、ユウヤの姿はない。
「どうしたのよ？　泣きそうな顔しちゃって」
振り向くと菊華が立っている。英里奈は菊華を階段のすみっこまで引っぱっていった。
「ユウヤは？　まだきてないの？」
「それって、きのう英里奈の処女膜ぶち破って6回もやっちゃった男のこと？　そいつ、本当に代役やってくれるって約束したの？」
「うん。さっき、ホテルで会ったんだけど、あたしより先にこっちへ向かったのに……」
菊華は疑わしげな表情で、耳まで真っ赤になった英里奈を見つめる。

「英里奈ってば、好きねぇ。昨日の今日だってのに、男とホテルでまたHしてたの？」
「もぉっ！　そうじゃないってば！　ところで原田さんは？」
「黒須の到着が遅れてるんで、本屋の社長さんと打ち合わせしてる。でも英里奈がきたからこれでひと安心よね。呼んでこなきゃ」
「待って！　あたしは出られないってば」
「んなこと言って、どうすんのよ？」
「ファンの子には悪いけど、中止してもらうしかないよ」
そこへ原田がやってきた。
「やぁ。きれいにおめかししてきたね？　遅刻したのはそのせいかな？」
「いいえ、あたし、代役を頼んだんですけど、まだきてないみたいで……」
原田はそうか、とつぶやき、英里奈のあごを指でつまんで瞳の奥をじっと覗きこむ。
「今すぐ英里奈ちゃんが出てくれたら、ご褒美に黒人ふたりを雇ってひと晩中ファックしてもらってもいいんだけど」
「こ、黒人っ!?」
「そう。きみはとても感じやすい身体をしているからな。デカくて硬いペニスをま×この穴にぶちこまれただけでイッちゃうかもしれないな」

「そ、そんな……」

英里奈は見あげるほど背の高いマッチョな黒人ふたりに後ろと前から犯されているところを想像し、クラクラッとめまいがしてきた。

好奇心という名の悪魔が「うなずいちゃえよ」と英里奈をそそのかす。でも、理性は逆に「愛のないエッチなんかしちゃダメ！」と天使の姿でブレーキをかけてくる。

「どうする？　この次の小説のネタにできそうだと思うけど？」

仕事のため、と言われると、英里奈にはどうしても抗えない。頭の中で戦っていた悪魔はあっと言う間に天使を組み敷いていた。ここまできてはもう引きかえせない。

「本当にあたしが出てもいいのかなぁ？　女の子たちの想像を裏切ったりしたら……」

「よっ！」

ポンと肩を叩かれ、振り向くとユウヤが立っていた。黒い皮ジャンと濃紺のGパン。レイバンのサングラスをかけ、風になぶられた髪が額に乱れている。すご～くワイルドな雰囲気で、英里奈は思わずポーッと見とれてしまう。だが、すぐにハッと我に返り、背の高いユウヤをムッとした顔でにらみつけた。

「よっ！　じゃないわよ。心配したじゃない」

「悪い。悪い」

ユウヤは原田を一瞥(いちべつ)し、真っ赤な顔の英里奈に聞いた。
「あれ？　オレは用なしか？」
「え？　ううん。……こちらは好男出版の編集部の原田さん。黒須がデビューした時からの担当さんなの。今日の司会もしてくれるのよ」
原田さんはニコッと笑って英里奈に言った。
「なんだ、やっぱり恋人がいたんじゃないか」
「ちがいますっ！　この人は恋人じゃなくて……」
「恋人っていうより『ひと晩で6回の仲』ってとこだよな」
すかさずユウヤが口を狭む。
英里奈は酸欠の金魚状態、口をパクパクするだけで、なにも言いかえせない。
「ま。とにかく、さっさとサイン会をやっつけちまおうぜ」
ユウヤは乱れた前髪を両手でかきあげ、会場へ歩いていった。原田も後につづく。肩幅が広いユウヤの後ろ姿を見送りながら、菊華は眉をしかめて英里奈に言った。
「なんか、変わったやつだわね」
「変なことにならなきゃいいけど……」
それにしても、あいつ、なんで背広なんか着てホテルにいたりしたんだろう？……

「本日はお忙しい中をご来店いただき、ありがとうございます。これより黒須裕也先生のサイン会を開催させていただきます」
原田はワイヤレスマイクをユウヤに渡した。
「遅れてすみませんでした。愛車が急にダダをこねちゃってね。きみたちに会うのを知って、やきもちを焼いたみたいなんだ」
クサい冗談を言うと、ファンの少女たちがうれしそうに黄色い悲鳴をあげる。そして次々と色紙や文庫本を差しだし、サインと握手を求める。
英里奈は会場の隅で、敬虔なクリスチャンのように両手を胸の上で合わせている。
サインするのはあたしじゃないけど、どうか無事にうまくいきますように！……
「一生のお願いですっ！　ほ、ほ、ホッペにキスしてくださいっ！」
青森方面在住の赤ホッぺりんごっ娘が、死にそうなほどバックンバックン高鳴っている胸を押さえて、ユウヤに一生に一度のお願いをしている。
「キスだけでいいの？」
やさしく聞きかえすと、女の子たちからいっせいにきゃぁ〜っ！　と声があがる。
ユウヤはこくっとうなずくりんごっ娘の頰にそっとキスをしてやった。
「いやぁ〜っ！　裕也サマぁ〜っ！」

「あたしもあたしもっ！　キスよかもっとすごいことしてぇっ！」
ん〜、気に食わないっ！　も少し、シブぅくやってくんないかなぁ？……
　ユウヤは鋭く怒りの眼を向ける英里奈に気づき、ニッと笑いかえす。そしてそのまま平気な顔でキスしたり握手したりを繰りかえしている。
　もうすぐ終了時間になるという時だった。
「英里奈ぁ、このままだと無事にすみそうじゃない？　近くでお茶でも飲んでこようよ」
「でも、なんかちょっと心配で……」
　そこまで言って、英里奈は赤いドレスの女がエスカレーターを昇ってくるのを見つけ、口をつぐんだ。
　腰まであるロングの茶髪(ちゃぱつ)をソバージュにし、女豹(めひょう)のような派手なメイクをした美しい女だ。年は25歳前後。上からB93、W58、H88といったところか？　バストはGカップくらいでウエストもキュッとくびれている。手脚が長いのでプロポーションは抜群だ。
　女は真っ直ぐにユウヤのほうへ歩み寄る。女の気迫を感じたのか、人垣がぱっくりふたつに割れた。美女は原田が声をかけるよりも早く、立ちあがったユウヤの前に歩み寄る。
　微笑みを浮かべ、つま先立ちになった女は、ユウヤの肩に両腕をまわした。間髪を入れず熱いくちづけがかわされる。ユウヤも女のウエストを両手で支え、ディープに応える。



英里奈は驚きのあまり、あんぐりと口を開けた。
「うっそーっ⁉ 早乙女蘭よー！」
「ひっどぉーい、あのふたりがデキてたなんてーっ！」
女の子たちは絶叫し、みなヒステリックにわめきまくる。
英里奈はふたりが体を離すか離さないかのうちに、草履をパフパフ言わせて、ユウヤの元へ駆け寄った。振りあげた右手で、思いっ切りユウヤの頬をひっぱたく。
「いてっ！ なにするんだよ⁉」
英里奈は涙ぐみ、ファンの人混みを乱暴にかき分けて走りだす。下りエスカレーターを駆け降り、本屋の前に飛びだした。タクシーをとめようと涙目をキョロキョロさせていると、あのナスビが背後から現われ、英里奈の腕をつかんだ。
「くそっ。セワ焼かせんじゃねぇや！」
「どっ、どうしてここに⁉」
ナスビは唇の端を歪め、ニヒルな笑みを浮かべて言った。
「そんなに派手な格好じゃ、尾行するのは屁でもなかったぜ。さっ、オレと一緒にこい」
ナスビは英里奈の腕をつかみ、車道へ引きずっていく。英里奈はその手を振りほどいて逃げようとするが、男の指はまるで瞬間接着剤を塗ったようにビクとも動かない。

「淳ちゃん！」
目の前の車道いっぱいに大きなバキュームカーがとまった。運転席の窓から白い包帯を巻いた手をヒラヒラ振っているのはメイド姿のトマトだ。
そこへようやく菊華が追いついてくる。
「英里奈っ、どこいくの……ちょっとあんたっ！　その手を離しなさいっ！」
「うるせぇっ！　ガキは引っこんで……ぎゃーっ！」
腕に噛みつかれ、ナスビは悲鳴をあげて菊華を突き飛ばした。
「じゃあ、あたしも引っこんでるわ」
ナスビは、ん？　と首をかしげて英里奈を見た。一瞬深々考えこみ、渋い顔になって、
「いや、そーじゃなくてね。……おまえはガキでも一緒にくるんだよっ！」
抵抗する英里奈を無理やりバキュームカーへ乗せようとする。
「やめてよっ！」
「おとなしく乗らねぇと、痛い目を見るぜ。今すぐ刺し殺したっていいんだからな」
ナスビの手にたっぷり30センチはありそうなアーミーナイフが光る。
「さっさとしろ！」
英里奈は着物姿だというのに、大股開きでイスの上に這い登らされてしまった。すぐ後

からナスビも乗りこむ。これじゃまるで野菜のサンドイッチ状態だ。
「淳ちゃん、いくわよ！」
かん高いトマトのかけ声とともに、バキュームカーがゴーッと音をたてて走りだす。
「くそっ！　どうしてバキュームカーなんか盗んだんだっ！」
「だってぇ……。さがしたんだけど、キーのついてる車って、これしかなかったのよぉ」
ナスビはチッと舌打ちをして、英里奈の喉にギラリと光るナイフを突きつける。
「くそっ！　ブツはどこだ？」
「だから、ブツとか乳アテとか言ってるけど、それっていったいなんなのよっ⁉」
「淳ちゃん、ピザ屋さんの車が追いかけてくるみたいよ！」
「なにっ⁉」
窓から後ろを振りかえったナスビは、クソッとつぶやき英里奈の前に身を乗りだした。
「おい、運転をかわれ！」
「えっ？　でも、淳ちゃんって、原付バイクの免許しか持ってなかったでしょ？　それもこないだスピード違反できっれーな婦警さんに捕まって免停になっちゃって……」
「るせぇ！　ガタガタ言うんじゃねぇや！」
ナスビは英里奈の膝を乗り越え、トマトと運転をかわった。

英里奈は覚悟を決め、速度が落ちたのをねらって、ドアを開けて飛び降りようとする。
こんなことしたら、道路で頭カチ割って死んじゃうかも⁉……
だが、すんでのところでトマトに気づかれ腕をつかまれた。
「あぁら。逃げだそうとしたってムダよぉ。あたしたちはブツを手に入れるまでは、絶対にあなたから離れませんからねーだ！」
「だから、ブツってなんなの？　って聞いてるの！」
「うるせぇっ！　アメリカ製の乳アテだ！　くそっ、くそっ、くそーっ！」
ナスビは青白い顔を引きつらせ、食いしばった歯の隙間からうめくように叫ぶ。
「英里奈っ！」
ハッとして窓の外を見ると、ばく進するバキュームカーの横に、ボディに蛍光ピンクのペンキで『ピザ・イタリアン・テイスト』と書かれた軽自動車が並走している。ハンドルを握っているのはユウヤだ。ユウヤは、バキュームカーをとめようと前に走りでる。
「くそっ！　踏みつぶしてやるっ！」
「きゃーっ！　淳ちゃんって、ザンコクぅ〜！」
ナスビはアクセルを床まで踏みこみ、ちっこい車のカマを掘る。1回、2回、後部バンパーを突きあげ、隣りに並んで道路の外へ追いやろうと体当たりをかます。左サイドがガ

ードレールに当たり、軽自動車の助手席の窓が割れ、ガラスが路上に飛び散る。
「イケイケ、淳ちゃんカッコいいーっ！　もっとやっちゃってーっ！」
「そうはさせるもんですか！」
英里奈は両手で顔を覆うトマトを押しのけ、ナスビの腕につかみかかって、力まかせにハンドルをまわす。
「あっ！　くそーっ！」
「きゃーっ！　淳ちゃん、とめてーっ！」
トマトの叫びも空しく、バキュームカーは車道をそれて歩道に乗りあげ、重い車体を左右に揺すり、バウンドしながらペットショップの店先へ突っこんでいく。
ガッゴーン！
数十メートルの高さからいきなり海に放りだされたような衝撃が走った。店のガラスは粉々に砕け、壊れたオリから小鳥や子犬がバラバラ逃げだす。一瞬のち、鼻が曲がりそうなほど強烈で素敵なウ×コの香があたりに漂いはじめた。
「じ、淳ちゃぁん」
英里奈は泣きだすトマトの膝の上から、やっとのことで身体を起こした。バキュームカーは斜めになり、今にも完全にひっくりかえってしまいそうだ。

「だいじょうぶかっ!? つかまれっ!」
ユウヤは車体によじ登り、ドアを開けて力まかせに英里奈を引きずりあげようとする。
でも、英里奈の足首にはナスビの手が食いこんでいる。ジタバタすると、草履が足から脱げてトマトの顔面を直撃した。
「やーっ! 離してぇーっ!」
ナスビは英里奈の蹴りをモロに顔面に食らい、トマトの上に墜落する。それでもナスビは、離すもんかと英里奈の着物の袖を両手でつかんだ。しかし振り袖はあっけなく肩からベリベリベリッともげてしまい、運転席のほうへ落っこちてしまう。
「じ、淳ちゃぁん! 重たいわようっ!」
「るせえっ! これでもダイエット中だっ!」
助手席から外へ出た瞬間、英里奈とユウヤはふたり一緒に歩道に転げ落ちた。
「痛ぁい!」
「てーっ! だ、だいじょうぶか?」
ふたりはヨボヨボの老人状態でヨロヨロ立ちあがる。その目の前に中国産やせる石鹸とデ×オールのクリームでダイエット中のナスビが、シュタッと飛び降りた。怒りに血走った目でユウヤと英里奈を見くらべて、握った拳をプルプル震わせながら叫んだ。

「おまえら、タダじゃおかねえっ！」
「そいつはオレのセリフだぜっ！」
ユウヤは殴りかかるナスビを、上体をひょいとかがめてかわし、ボディに1発叩きこむ。見事に鳩尾にジャストミート！
「ぐがーッ！」
ナスビの体はぶっ飛び、ぐしゃぐしゃに壊れた店先に背中から突っこんだ。たったひとつ無事だった熱帯魚の水槽をぶち破り、顔も体もグッピーまみれになっている。
「サツがくるとヤバい。ここをずらかろう」
ユウヤは警察に追われているチンピラのような口をきき、英里奈の手をつかんだ。ワラワラ集まってきたやじ馬をかき分け、つつつーっと走りだす。
「待って。着物のせいで、うまく走れないの」
「本当は1メートルFカップの爆乳が邪魔なんだろ？　すげぇ重くてタプタプだもんな」
「99センチっ!……やっ！　なに言わせせんのよ、バカっ！」
英里奈は耳まで赤く染めてユウヤの頬をひっぱたいた。
「痛ってーっ！　ったく、おまえってやつは、あっタマくんなっ！」
ユウヤは声を荒らげて言い、おもむろに英里奈をひょいと抱きあげる。

「やだっ、降ろして！」

「るせーな。少しの間、黙ってねぇと、今すぐここで裸にひん剝くぞ！」

英里奈はイヤッ！　と小声で叫び、ユウヤの胸に顔をうずめた。

なぜなんだろう？　この人にはどうしても逆らいたくなっちゃう。外見はとっても好きな人に似ていて、でも、性格は想像していたのと全然ちがうからなのかしら？……

ユウヤは英里奈を抱えたまま、狭い路地を駆け抜ける。ふたつめの角を曲がると小さな公園にぶつかった。日曜の午後だというのに、人っこひとり見当たらない。

「ねぇ、ここまでくれば、もういいんじゃない？」

「たぶんな」

ふたりはベンチに座りこんだ。英里奈はムスッとした顔で問いかける。

「ねぇ、なんだって蘭とキスなんかしたのよ？」

「文庫のあとがきに書いてあった通り、『ナンパで女好き』っていう黒須のキャラクターに合わせただけじゃないか」

「でも、よりによって、ライバルの蘭なんかとキスすることないでしょ！」

「あれは不可抗力ってもんさ。考えてもみろよ。あの時、彼女を拒んだりしてみろ、険悪な雰囲気になったにちがいないだろ？」

「そりゃそうだけど……。あんたと蘭って恋人なの？」
ユウヤはニヤリと笑って英里奈の瞳を覗きこむ。
「だったらどうする？　妬いてんのかよ？」
「バカ言わないでよ。どうしてあたしが……」
ユウヤは最後まで言わせず、英里奈の唇を唇でふさいだ。舌に舌を絡め、着物の合わせ目に手を入れると、普段は知的な英里奈の顔が、トロンと色っぽい表情に変わっていく。
「んっ……イヤっ……」
逃れようと身をよじったのが裏目に出て、ユウヤの手がなにもつけていない秘部に到達してしまう。そのまま指は若草の生えた恥丘を乗り越え、クリ×リスをさがしだした。指腹で嬲りながら、花弁の奥にある秘孔をえぐる、ちゅぷちゅぷという音が、英里奈の耳にも聞こえてくる。
「本当にイヤなのか？　もう濡れてるぞ。ほら、ラブジュースでヌルヌルだ」
「やっ……。言わないで」
抵抗するフリをしても、身体は正直に感じてしまい、背筋が興奮でゾクゾクする。濡れぬれの秘部を思うぞんぶん触られて、英里奈はもう逃げだすことすらできない。
ユウヤは英里奈の首筋にキスマークをつけながら、片手で帯をほどこうとする。

「チェッ、ややこしく縛ってあるな。……頼むからオレに『あれぇっ、ご無体(ムタイ)な～っ！』てのをやらせてくれよ」
「なにそれ？」
「ほら、時代劇で、悪代官が町娘の帯をつかんでくるくるくるーっとまわすやつさ」
「やーん。そんなのできないよぉっ」
と言いながらも、英里奈は協力して帯の結び目を解いていく。ユウヤはほどけた帯の端をつかみ、英里奈のウエストをつかんで目の前に立たせる。
「生意気な小娘め、こらしめてくれるわ！」
声色を使って帯を一気に引き寄せる。
「あーれぇーっ！」
英里奈は文字通りくるくるくるーっとまわされ、赤い襦袢姿になって、よろめきながら芝生の上に倒れこむ。乱れた裾からのぞく白い太腿が妙に艶めかしい。
ユウヤは英里奈の上に覆いかぶさり、襦袢の胸もとを両手ではだけて、ポロリとこぼれでた白い巨乳にむしゃぶりつく。
「やんっ！　乱暴にしないで」
「プレゼントのパッケージは乱暴に破くのが趣味なのさ」

英里奈は肩と腰に赤い絹をまとっただけの姿で、淫らに濡れた秘唇に指を挿入される。乳首を嚙まれ、熱い肉壁を指でえぐらえるたびに、快感が背筋を駆け抜ける。
「こんなっ、トコでぇ……。誰かに見られちゃうよぉっ！　はっ、あはっ♡　はぁあっ」
セックスしている恥ずかしい姿を覗き見されたら……と思うだけで、身体が燃えてくる。英里奈は羞恥にもだえつつ、愛撫が欲しくて自分から両脚をひろげてしまう。
「おまえ、すごくわいせつな顔してるな。色っぽくてそそられるぜ」
「そんなこと言っちゃ、イヤぁ……んっ！」
赤い襦袢1枚をまとっただけの美少女は、男の頭を抱えこんだまま甘い声をあげる。
「あん、あんっ。あはぁんっ♡　気持ちいいよぉっ！……もっとかきまわして。いっぱいいっぱい感じたいのっ！」
「こういうことするの、好きなんだろ？」
「好き好き。だぁ～い好きっ！」
「チ×ポが好きなら、ひとりでよがってないで舐めてくれ」
突然、ユウヤの股間が英里奈の目の前にくる。シックスナインの体勢になると、英里奈は震える指でGパンのファスナーを降ろし、トランクスの合わせ目から硬くそりかえった剛棒をおずおずと取りだす。


Ha
Ha
Nupu
Nupu
Jyupu
Jyupu

「どっ、どうしよう?」
「舐めるんだよ。初めてじゃないだろ?」
「わかってる。……けど、こんなトコでエッチなことして、あ、あたし……んぅうっ!」
クリ×リスを強く吸われると、目がくらんでなにも見えなくなってしまう。
今のあたしはいつものあたしじゃない。別のあたしがペニスをしゃぶっているの。あられもない姿でおま×こをいじられてるの……。
英里奈は自分にそう言い聞かせ、ビクビク脈打っている太竿を美唇に含み、命じられるまま、フェラチオをはじめる。屹立したチ×ポは燃えるように熱い。細くしなやかな指をカリに当て、亀頭の先端を舐めると、英里奈の愛撫に反応して、小さな割れ目から透明な液がたらたら溢れてくる。水を飲むように喉を鳴らして吸いあげ、次々とにじみだす液を肌色の暴れん棒の顔に指で塗りつけ、ぬらぬらさせて舌で舐め取る。
ユウヤはたまらず英里奈の股間から顔をあげる。チ×ポはすでに暴発寸前だ。
「んっ……。やべぇぜ」
ついに英里奈も誘うようにおま×この丘に片手を添え、小さな声で甘える。
「入れて。お願い」
「自分で入れてみろよ」

ユウヤは張りつめたペニスの根元を指で締めつけ、爆発しないようにしてからゴロリとあおむけに寝そべる。
裸身をピンク色に染めた美少女は男の乳首の周囲を指でなぞり、甘えた声を出す。
「入れてくれないのぉ？」
「騎乗位ってやつ、試してみたくないか？」
「……ユウヤがそう言うなら……」
英里奈はもの憂げな表情でゆっくりと身体を起こした。困惑した顔で屹立したチ×ポをちらちら見て、恥ずかしそうにポッと赤くなる。
「どうやればいいのぉ？」
「オレの上にまたがって、自分でおま×こをおっぴろげな」
英里奈はそっとユウヤの上にまたがった。太腿の上にチョコンとヒップを降ろし、巨根のほうへゆっくりずりあがる。潤んだ瞳を流し目にして、媚びた猫のような表情をつくる。
「お願い、入れて♡」
「やだね。自分の指でスケべな穴に入れろよ」
「やぁん！　スケべな穴なんてないもんっ！」
「ここにあるだろ」

ユウヤに秘孔をえぐられ、英里奈は、ひあっ！　と声をあげる。
「チ×ポをつかんでぶちこめよ。ま×この穴に亀頭を当てて、座ればいいんだ」
言われた通りにこわばりをつかみ、秘孔にそっとあてがう。ゆっくり腰を沈めると、トロトロの蜜壺に、そそり勃つ巨塔がズブリと突き刺さる。
「んぁああっ！」
英里奈はのけぞり、硬く引き締まったユウヤの腰を手でつかむ。
「はっ、はぁあっ……助けてぇ……アソコがいっぱいなのぉっ！」
「あとはわかるだろ？　自分で動いて出し入れしな」
腰をつかんだまま、ロデオライダーのようにヒップを上下させる。太竿の表面でクリ×リスをこすられ、身体中が飴のように溶けていく。赤い襦袢をウエストに絡ませただけのエッチな姿で背をそらし、両膝を立てて快感をむさぼる。
「もっと深くぅっ！　ふみゃぁあ～っ」
半開きになった唇から甘えている子猫のような鳴き声がもれる。股間を突きあげる快感に耐え切れず、苦しげに眉根を寄せてヒップを揺する。
「んぅっ！　すげぇ締まるぜ」
硬直した太竿をこすられ、肉壁で吸いつかれると、ユウヤはもうたまらない。腰を突き


Zuchu
Zuchu

あげ、両手で柔らかな乳房をわしづかみに揉む。乳首は痛いほど硬く張りつめている。
英里奈は剛棒に貫かれた狭間を前に突きだし、円を描くようにグリグリ動かす。ゴムのような硬い弾力があるカリでGスポットをモロにこすられ、快感が脳天まで突き抜ける。
「ふみぃいんっ！　イクイク、イッちゃうぅっ！　おしっこ溢れちゃうよぉおっ！」
「イクのは早いぜ」
という、突然のナスビの声と同時に、英里奈は後ろからはがい締めにされた。
「ひぁあんっ！」
Fカップの美乳を乱暴につかまれて、息がとまる。
「英里奈っ！」
上半身を起こしたユウヤの後頭部を、トマトがビール瓶で殴りつける。
「きゃあぁっ！」
ナスビは薄汚れた白いタオルを英里奈の口に無理やり押しつける。
薬品のツーンとしたにおいが英里奈の鼻をついた。
息をしちゃダメ……と思うゆとりもないまま薬品を肺いっぱい吸いこんでしまい、英里奈の意識はすうっと遠のいていった。

第7章　拷問されてエクスタシー!?

由美子は半裸に剝かれた姿で車から引きずり降ろされ、駐車場の隅のエレベーターに連れこまれる。

男は由美子のウエストをつかんだままポケットからキーを出し、鍵穴に差しこんでＰのボタンを押す。ペントハウスの略だ。扉が開くまでのわずかな間も、淫液をたらしてヒクついている花奥を指で嬲りつづける。

エレベーターがとまった。開いた扉の向こう側はすぐ部屋になっていた。20帖はありそうなリビングはきれいに整頓され、美しい家具と調度品が並べられている。敷き詰められたジュウタンは新しく、毛足が長い。隅には鉢植えの観葉植物が置かれていた。

「右の奥にバスルームがある。さっそく衣装に着替えて仕事をしてもらおうか」

「仕事？」
男の手が素早くのび、聞きかえす由美子の喉をつかんで乱暴にあおむかせる。
「おまえには質問をする権利などない。われわれの命令にはすべて柔順に隷従するのだ」
由美子の瞳に反抗的な光が閃く。
「いいか、おまえには命令に逆らう権利はない。いつでもどこでも命じられれば素直に尻を差しだし、脚をひろげておま×こを剝きだしにするんだ。わかったな？」
念を押されなくとも、今の由美子にはNOすら言うことができない。わずかでも反抗の意志を示そうと男から目をそらす。とたんに突き飛ばされ、床の上に尻餅をついた。
「今すぐ身体を洗って衣装に着替えてこい」
由美子はぶつけた腰をさすりながらノロノロと立ちあがって、バスルームへ歩いていく。
「おまえの命はオレたちが握っている。変な気を起こすなよ」
湯を張った巨大なバスタブにつかりながら、由美子はポロポロと涙をこぼした。
あの写真……フィルムさえなければ、こんな目にあわずにすんだのに……。
閉じたまぶたの裏に、腕の中で絶命した小室の顔が浮かぶ。突然やってきた死神を目の当たりにした恐怖と絶望の表情。もう二度と聞くことのないソフトな低い声。
こんなことになるはずじゃなかった。こんなことに……。

溢れる涙をぬぐおうともせず、声を押し殺して泣いていると、ドアが乱暴に開いた。
「いつまでグズグズしてるんだ!! 早くしねぇか！」
大声にビクッと身体を震わせ、バスタブからあがる。おざなりに髪を洗い、たっぷりと泡立てた石鹸で白い裸身を清める。
わたし、誰のためにこんなことをしているの？ どうしてこんなことを……。
ピンク色に火照った身体に白いタオルを巻きつけ、バスルームを出る。壁に、男が言う『衣装』がさがっていた。
素肌の上に黒鳥のようなミニ丈の黒いチュチュをつける。胸の部分はコルセットのようなデザインで、張りのある乳房を誇張するように持ちあげて支えている。
スカートの部分はレースでできており、黒いガーターベルトと小さなパンティが透けて見える。パンプスのヒールは折れてしまいそうなほど細く、9センチの高さがある。
衣装をつけた由美子はまるでバレリーナのようだった。
「できたか？」
別室で監視していたのか、男がタイミングよく入ってくる。由美子の姿をひと目見ると、満足そうにうなずき、細い手首をつかんだ。
「さっさとしろ。客はもうきてるんだからな」

由美子は『客』という言葉に敏感に反応する。けれども、由美子には質問をすることも命令にそむくことも許されていない。

リビングに戻ると、夜景の見える窓ぎわに男が立っていた。

「お待たせしてすいません」

振りかえった男の顔を見て、由美子は、あっ！　と声をあげそうになった。

でっぷりと太った初老の男は、さる有名な政治家だった。国会関連のニュースやN×Kの国会討論会でよく顔を見かける男だ。赤らんだ狸顔の老人は由美子を見るなり、満面に笑みを浮かべて何度もうなずく。

「そうかそうか。用意してくれたか」

見るからに狡猾そうな政治家は背広を脱ぎ、ネクタイを緩めはじめる。

「いいな。先生の命令には絶対に服従しろ。逆らえばおまえの命はないと思え」

男は耳もとにささやき、震えている白い肩を乱暴にどつく。

由美子は高いヒールのせいでよろめきながら前に1歩出て、我が身を保護するように、剝きだしの乳房を両腕で隠す。背後でドアがパタンと閉まった。

初老の男は半裸に剝かれた若い女を前にして、股間を大きくふくらませている。興奮に息を弾ませて、口から溢れるよだれをジュルリとすすりあげた。日頃から世界平和と消費

税廃止を訴え、庶民派で鳴らす政治家の姿はみじんもない。丸太のような短かい脚で由美子のほうへと歩み寄る。
「ほ、本当に森丘由美子本人なんだな？」
嘘だと言えたなら、どんなに気が楽だったろう？……でも、あの男に別室で監視されていると思うと、由美子にはうなずくことしかできない。
ボイルしたソーセージのような指が肩にかかる。滑らかな肌をなぞり、由美子の両腕をどけさせる。あらわになった乳房の上で、小さな乳首が震えている。
「な、舐めさせてくれ」
由美子より20センチ近く背の低い政治家は、片方の乳房をむんずとつかみ、尖らせた舌で乳首をペロペロ舐めはじめる。
「うっ……はぁっ……。い、痛い、噛まないで」
たまらずのけぞる由美子の前に老人がひざまずく。淫らに光る目で売れっ子のスポーツキャスターを見あげ、舌なめずりをする。
「どれどれ、森丘由美子のマ×毛はどんなかな？」
透けたスカートの中にハゲ頭を突っこみ、震える手でパンティをずり降ろす。柔らかで縮れた若草は秘部の周囲をふちどるように、ダイヤモンド型に生えそろっている。

由美子は羞恥のあまり唇を嚙み、両目をきつく閉じた。
「あっ……」
熱い息を秘唇に吹きかけられ、白い下腹が波打つ。くすんだピンク色のビラビラを両手の指で挟まれて、左右にひろげられてしまう。
ああっ！　わたしの大切なところを見られている……こんな、こんな卑劣な男に……。
「このままオナニーしてみせろ。命令だぞ」
由美子は哀願する目で男を見降ろす。
「お願いです。それだけは堪忍してください」
オナニーするところを見られるくらいなら、いっそレイプされたほうがマシだ。
「聞いていないのか？　おまえにはワシの命令に逆らう権利はない。ワシに命令されればケツの穴もチ×ポも、喜んでおしゃぶりするんだ」
「そ、そんな……」
由美子は絶望に涙をにじませ、がっくりとうなだれながらそろそろと両手をのばして剝きだしにされた花弁の中心に触れる。片手でクリ×リスを転がし、湿った秘孔に指を挿入する。
生きていくには命令に従うしかない。だけど、こんなことまでさせられて、生きている

価値などあるというの？……

「1本しか入れないのか？　2本や3本、ぐぐーっと入るんだろ？」

複雑な肉襞の奥に男の指が突き刺さる。膣壁を刺激され、愛液がじわりとにじみでる。

「ひぃいっ！」

由美子は腰をくねらせ、硬く尖ってきた乳首を指でこすりたてる。男の太い指はじゅくじゅくに濡れた穴を出入りする。

今すぐ舌を嚙み切って自殺したいほどの羞恥が、由美子の裸身を赤く染めあげる。しかし、身体は理性を裏切り、どんどん昇りつめていく。全身から霧のような汗がじっとりと吹きだして、由美子は腰をいっそう激しく振りたてる。

「あぐっ……ひぁああっ！　イッちゃうっ！」

そりかえった背筋を甘美なものがゾクゾクッと駆け抜ける。絶頂を迎え、弛緩(しかん)していく由美子の身体を男が押し倒す。

「いつもテレビで見るたび、想像していたんだ。知的で美しいおまえをこうして思うぞんぶん犯すことをな」

男はジッパーを降ろし、ペニスをズボンから引きずりだす。陰茎は完全に怒張しているが、長さはほんの10センチほどしかない。ぬらぬらしている花弁をかきわけ、コドモのお



もちゃのようなチ×ポを秘孔に突き立てる。
「うっ！」
挿入した瞬間、狸づらの政治家は果ててしまった。
「ああ……」
イキ切れなかった女陰が、硬い男根を求めてヒクヒクうごめいている。床の上にはりつけにされたまま天井を見あげている由美子の瞳には、もうなにも映ってはいなかった。

☆

「だいじょうぶかい？」
原田はナスビに突き飛ばされて転んだ菊華を助け起こした。
「あたしはだいじょうぶ。でも、英里奈が……」
英里奈を拉致したバキュームカーは、ちょうど向こうの角を曲ったところだ。
「すぐ追いかけたほうがいいな」
タクシーを捕まえようとするふたりの目の前に、漆黒のベンツがとまった。黒い遮光フィルムを貼った運転席の窓が静かに開く。顔を出したのは赤いドレス姿の蘭だ。
「どうかなさったの？」
「早乙女さんか。悪いけどあのバキュームカーを追ってくれないか？」

「バキュームカーですって？」
「そうよ。英里奈が拉致されたの。つべこべ言わずに車出してっ！　でなきゃ、10円玉でボディに傷をつけるわよ！」
「わかったわよ。なんだか知らないけど乗って」
ふたりが後部座席に転がりこむと、蘭はすぐに車を発進する。ドイツの高級車、ベンツはさすがに加速も乗り心地も最高だ。あっと言う間に軽く60キロを超えるが、目指す車は見つからない。
「次の角、左ねっ！……やだ、見えなくなっちゃった」
「いったいどういうことなの？」
「黒須裕也の親しい人がバキュームカーに乗った男ふたりに拉致されたんだ」
「それ、さっきサイン会で裕也を殴った女の子のことじゃないわよね？」
「そのとおりよ。あんたが人前で裕也にキスしたりするからこんなことになったのよ！英里奈、すごくショック受けて、本屋を飛びだしちゃったんだから！」
菊華は激昂し、今すぐ蘭の目ん玉をえぐりだしてやろうかしら？　と言いたげな殺気に満ちた顔でソバージュヘアの後頭部をねめつけている。
「とにかく、これ以上さがしても見つからないとなると、警察に連絡するしかないな」

「ちょっと待って。それは早すぎるんじゃない？」
蘭は車を路肩にとめて振りかえった。
「もしそのふたり組があなたのお友だちを誘拐したのなら、きっと身代金を要求してくるはずよ。だから、お友だちの家で連絡がくるのを待ったほうがよくはないかしら？」
菊華と原田は同時に顔を見合わせる。
「でも、男たちは営利目的に誘拐したわけじゃないかもしれない。となると英里奈ちゃんが危険だ。警察にすぐ連絡したほうが……」
「原田さん、あたし、きのうの夜、あのふたり組に会ってるんです。きのうも英里奈が襲われて……」
「なんだって!?」
そこで菊華はディスコで起きたことをふたりに説明した。
「……だから、あいつらは英里奈と引きかえにチチアテとかいうものを要求してくるかもしれないわ」
「それじゃ、犯人から連絡がくるまで待ちましょう。家はどこなの？」
住所を聞いた蘭は、慣れた手つきでノーズをターンさせた。
マンションに着くと、菊華はドアを開けようとして首を傾げた。

「どうかしたの？」

「ドアの鍵が開いてるの。今朝、きちんとかけたはずなのに……」

原田が先に立って玄関に踏みこむ。

「こいつはひどいな」

部屋の中は見るも無残に荒らされていた。床の上は家具や小物がぶちまけられ、足の踏み場がないほどだ。リビングのカップボードやキッチンの引き出しは開けっぱなし、冷蔵庫のドアは半開きのままで、その下に歯形のついたチーズと食い散らしたポッチンプリンの空カップが転がっている。

「もしかして……」

急いで英里奈の部屋にいってみると、ファンレターとワープロのフロッピー、バッグの中身が、机や床の上にゴチャゴチャに散らばっていた。当然のようにタンスや押し入れもひっちゃかめっちゃかにかきまわされている。

「なんてやつらだ……。ただの空き巣じゃないな」

言いながら、原田が総レースでスケスケの白いパンティをつまみあげている。

「ちょっとーっ！　それ、あたしのよっ！」

菊華が真っ赤になって引ったくる。

「やっぱり警察を呼んだほうがいいんじゃないか？」
「その必要はないわ」
蘭は端正な顔に微笑を浮かべ、手にしていた黒い棒状のものを原田の腕に押しつける。
ビシッという音とともに、原田は声ひとつたてずにその場に倒れた。
「なっ、どうしたのっ⁉」
その瞬間を見ていなかった菊華は、驚いて原田のもとにしゃがみこんだ。脈はあったので、まだ生きてはいるようだ。蘭を見あげてようやく黒い武器に気づく。
「原田さんになにをしたの？」
「別に。C×Aが最近開発した武器を試させてもらっただけよ。簡単に言えばスタンガンのようなものなの。これで10分以上は意識がないままだわ」
蘭はきれいにマニュキアを塗った指で菊華のあごを上向かせる。瞳を覗きこむように見つめながらハスキーな声で言った。
「命令よ。この男を裸にして、自分も全部脱ぎなさい」
気の強い菊華はムッとして蘭の手を振り払った。
「いやよ！　誰があんたなんかの言うことなんか聞くもんですか！」
「バカな子ね、まだわからないの？　わたくしの命令を聞くのはあなたよ」

言い聞かせるように菊華の頰をショックガンの先でピタピタ叩く。
「痛い目にあいたくなかったら、おとなしく命令に従いなさい。武器はほかにもあるのよ。誰もいない山奥で骨も肉もこっぱみじんに吹き飛ばされたい？」
嘘かホントか知らないが、C×Aが最近開発した武器を持っているくらいだ。バズーカ砲ぐらい簡単に手に入るのかもしれない。
菊華はとりあえず目の前でノビている原田の服を脱がせることにした。意識があれば、「乱暴だ」と抗議されそうなほど手荒く裸にひん剝く。青いブリーフを脱がせるとチ×ポもぐったり気絶している。
菊華はミニ丈のスカートを脱ごうとして躊躇する。
バカね！　こんな女の前で、ためらう必要なんかないわよ。あたしのほうが10歳も若いし、ナイスボディなんだからっ！……
いさぎよく服をパパパッと脱ぎ捨てる。アイスブルーのブラとTバックを取ると、小麦色の裸身があらわになる。一応、逆三角形に生えそろっている恥毛を片手で隠す。
「よろしい。次はこいつのペニスを勃起させて自分のおま×こに入れなさい」
さすがの菊華も真っ赤になる。
「なにバカなこと言ってんのよ？　んなことできるわけないじゃ……」

蘭は最後まで言わせず、平手で菊華の頬を叩く。ビシッと小気味いい音がし、菊華は床に吹っ飛ばされる。

「言ったでしょう？　命令に逆らうのなら、もっと痛い目にあうことになるのよ。チ×ポを咥えて勃起させなさい」

菊華はヒリヒリする頬を手で押さえ、しかたなく原田の股間に唇を寄せた。片手で太筒をつかみ、裏側を走る敏感な縫い目におずおずと舌を這わせる。

「まじめにやるのよ！」

高く突きだしている尻を叩かれ、菊華は痛みに顔をしかめて蘭を振りかえる。

「意識がないから勃たないんじゃない？」

「意識がなくても勃つものは勃つわ。女だって寝ている時でもおま×こを触られると感じるでしょう？」

蘭の言葉通り、じっくり舐めつづけていると原田のチ×ポが目覚めはじめた。根元から徐々にムクムク硬くなって、完全に勃起する。

「勃ったわ」

「それじゃあ、騎乗位でおま×こに入れなさい」

「イヤよ」



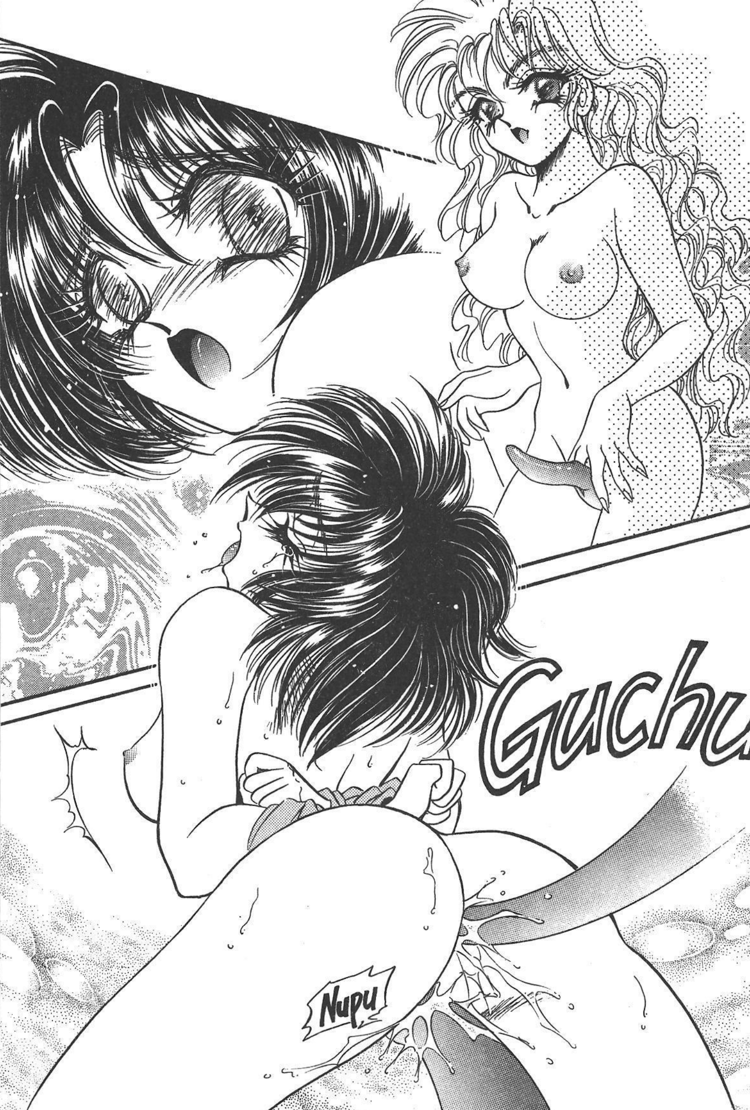
蘭は逃げだそうとする菊華の腕を素早くつかみ、後ろ手にねじあげる。
「何度も言わせるんじゃないの！　騎乗位でおま×こにチ×ポを入れなさい」
「イヤッ！　イヤぁああっ！」
蘭の手が背後から菊華の秘部にのびて淡い草むらをかき分け、肉芽をコリコリ揉みあげる。感じやすい乳首を指腹で刺激されると、全身から力が抜けていく。
「はっ、はぅっ……。イヤんぅうっ、やめてぇ……」
「いやがるわりには濡れてるわよ。指がラブジュースでびちょびちょだわ」
菊華はそのまま原田の体をまたがされる。気絶したままの原田のチ×ポはまだ勃起していた。
「いやぁあああっ！」
「安心なさい。痛くないように手伝ってあげるから」
蘭は、濡れそぼる薄い花びらをかきわけ、指でおま×この穴をひろげるようにして、菊華の肩を上から押さえつける。秘孔に亀頭がめりこんだ瞬間、菊華が暴れだした。
「ひぎぃいいーっ！」
「まぁ！　もしかしてまだバージンだったの？」
意外そうな表情を見せた蘭は、菊華の腋の下に手を入れて男根に貫かれた処女の身体を

上下に動かす。
「抜いてぇえっ！　裂けちゃううぅーっ！」
菊華は涙をボロボロこぼしながら、されるがままになっている。狭隘なヴァギナに押し入ったチ×ポは最大限にふくれあがったまま、ドクドクと脈打っている。
英里奈や友達にはとっくに脱処女していると思われていた菊華だが、実はまだバージンだったのだ。男友達はたくさんいたけど、いい線までいっても、いつもふんぎりがつかず、フェラチオやパイズリまでしか進んでいない。
「や……やめてぇ、痛いのぉっ」
蘭は秘孔を犯す元気棒から逃れようとする菊華をうつぶせに押し倒し、肉の薄い背中にヒップを乗せる。
「すぐによくなるから、このまま自分で動いてごらん？」
「いやっ！　やぁああっ……」
蘭は赤いドレスを肩からゆっくり滑り落とした。深紅のブラの下で、クリーム色の乳房がはち切れんばかりに隆起している。ひょっとするとGカップはあるかもしれない。誇示するように柔肉を揺すりながらランジェリーのスナップをはずした蘭は、グレープフルーツのような乳房の上にポチッと浮かんだ乳首を、指で挟んで軽くこすった。愛撫を受けた

ふたつの乳首は、みるみるうちに硬くなってくる。
「んふっ♡　今日も感度良好だわ」
ハスキーな声でつぶやくと、菊華の髪を乱暴につかんで目の前に立つ。
「おまえ、これがなにかわかる？」
菊華は驚き、目を見張った。
蘭が身につけているブラジャーと同色のハイレグパンティから、青白い肉竿が突きでている。それはどう見てもペニスではない。なぜなら、男根にあるべき亀頭がそっくり欠落しているのだ。
「信じられないでしょうけど、これはクリ×リスなの。10億人にひとりいるかどうかという奇形なのよ。中身はペニスと同じ海綿体でできているの。ほら、触ってみて」
菊華は生まれて初めて女陰を貫かれているショックで、理性を失っている。
「い、いや……」
か細い声で抵抗しつつも、菊華の両手は目の前に突きつけられた巨大なクリ×リスにのびる。壊れ物を扱うようにそっと触れ、感触を確かめる。
弾力があって、温かい。ペニスと同じ感じだけど、本当にこれがクリ×リスなの？……
「触るだけじゃつまらないわ。クリ×リスをたっぷりおしゃぶりしなさい」

唇を開き、肉棒となったクリ×リス先端を舌の上に乗せる。お祭りの縁日で売っているチョコバナナのチョコを舐め取るように、太い肉芽の表面をしゃぶる。
「おまえに聞きたいことがあるの。正直に答えたなら、ご褒美をあげるわ」
淫魔に精神を支配され、菊華はぼうっとかすむ目で蘭を見あげる。
「半月くらい前、黒須裕也あてに海外からランジェリーのプレゼントが届かなかった？黒いレースのブラとパンティよ」
「し、知らない」
蘭はかぶりを振る菊華の髪をつかみ、力まかせに引っぱる。
「うそおっしゃい！　ロサンゼルスに住んでいる女性からのプレゼントよ。先週編集部のバカが回送したんだから、もう届いているはずだわ」
「あぐうぅっ！　し、知らないわよう」
菊華は、髪を根こそぎ引きむしられるような痛みにポロポロ涙を流している。
「そう。本当に知らないかどうか、あなたの身体に聞くことにするわ」
クールな声で吐き捨て、床に落ちていたストッキングで菊華を後ろ手に縛りあげる。
「いやっ……な、なにをするのっ⁉」
「言ったでしょう？　身体に聞くのよ！」

肩を後ろから乱暴に押され、菊華は原田の胸の上に倒れこむ。
そして背後から、丸く白い双丘を蘭の両手で割りひろげられてしまう。
「んあぁ～っ、ダメぇぇ～っ！」
バージンを無理やり奪われ、その上お尻をファックされるなんて耐えられない！……
といっても、菊華には抗う力も逃れるチャンスもない。
「それにしてもずいぶんヒワイなおま×こねぇ、エッチなよだれでぬるぬるじゃないの。処女喪失記念っていうことで、アヌスも犯ってあげるから、思うぞんぶん乱れてごらん」
硬直したままのチ×ポを挿入されたヴァギナの上でお尻の穴がヒクヒクしている。蘭は小さな菊門に巨大なクリ×リスをぶちこんだ。
直腸をえぐられた菊華は、とうとうよがり声をあげる。ヴァギナはまだ未開発だが、菊門は何度も男に犯られているのですぐに気持ちよくなってくる。
「んああっ……ひぅうっ！」
「そのまま身体を上下させなさい。一緒に自分の手でクリ×リスと乳首を刺激するのよ。そうすればすぐに天国にいる気分になれるわよ」
蘭の命令は菊華にとっては絶対だ。震える手を下腹にのばし、充血して尖っている敏感な花芯を指で挟みあげる。


Guchu
Nupu

「あひぃっ！」
蘭は背後から菊華の乳首を嬲りつつ、アヌスに押しこんだ巨大な肉芽を律動させる。腰をまわすように動かすと、快感が脳天を突きあげてくる。
「んぅっ、いいわっ！　菊華ちゃん、最高よっ！　お尻の穴がとっても締まるのっ！」
異物の侵入に慣れていない菊華の秘孔とアヌスが、同時にキュウーッとすぼまる。二カ所を貫く痛みが、いつの間にか快感にすり変わっている。身体のずっと奥のほうから、今まで一度も体験したことのない激しい波がどっとばかりに押し寄せてくる。
こんなのダメっ！　胎内（なか）で原田さんのペニスと蘭のクリ×リスがこすれ合って、気持ちがすんごくよすぎるのっ！……
「あひっ！　ひぃいっ！　感じ……きっ、気持ちいいのぉっ！　爆発しちゃうぅぅんっ！」
菊華はいつの間にか自分の意志で尻を激しく振りたてていた。乳房に指をめりこませ、尖ったクリ×リスをめちゃくちゃにこする。
菊華を拷問するつもりでアヌスを犯していた蘭も、しだいに興奮し、行為の意図を忘れそうになっている。
ふたりの女は気絶している原田の上で、エクスタシーを迎えようとしていた。

第8章　秘密のフィルムと黒いブラ

由美子は乱れたシーツを握り締め、うつろな目でなにもない壁を見つめている。

たった今まで、組織の男が連れてきた成り金の思うがままに犯されていた。身体中の穴という穴すべてをペニスで貫かれ、クタクタに疲れきっている。何度も執拗(しつよう)にこすられた菊門は傷ついてヒリヒリと痛み、嚙まれた乳首は腫れている。

このマンションに連れてこられて、もう1週間以上になるわ。黙って局からいなくなった上に、無断欠勤をつづけてしまったから、番組にも局にも戻れない。このままでは、わたし、ダメになってしまう……。

絶望の涙がひと粒流れ落ちる。

「おい、寝てんのか？」

普段別室で見張りをしている柴野という男が、由美子の肩を乱暴に叩く。返事をしない由美子の白い尻を手で押して、うつぶせにする。
「今日はこいつで終わりだぜ」
太いバイブが菊門に埋めこまれる。
「ひぐうっ！」
成り金に傷つけられたアヌスをまたも裂かれ、由美子は悲鳴をあげた。だが、柴野は容赦なくスイッチを入れる。男根をかたどったゴム製の張型は直腸を満たし、肉壁をえぐって女の秘部を刺激する。柴野はニキビだらけの顔に欲望の色を浮かべ、由美子の蜜壺に指を挿入する。まだ充血したままのクリ×リスがヒクヒクッとわななく。
「あんぅっ！　ま、待ってぇ。シャワーを浴びさせてぇ……」
由美子はあえぎながら哀願する。
「しょうがねぇスケだぜ。おらよっ！　こっちへきな」
バスタブにはすでに湯が半分ほど満ちていた。シャワーのノズルを開き、由美子をその下に立たせる。アヌスを貫くバイブの動きは由美子を淫らな女に変えていく。
「んふぅっ……お尻の穴がすごく感じちゃうのぉ。お願いよぉ、座らせてぇ」
「うるせえなっ！　洗ってやるからオレのチ×ポみたいにおっ立ってろ！」

柴野は泡立てた石鹸で女の身体を乱暴に洗っていく。ふと首筋のキスマークに気づいて顔色を変えた。

「チッ！　あのジジイ、商品に傷つけやがって！」

「商品？　わたしは商品なの？」

「そうだ。毎晩ここへくる男たちは、ボスに大金を払ってるんだ。元ニュースキャスターの森丘由美子と1発やれる、そう言われて金を積まなかった男はひとりもいないって話だぜ。明日は3人予約が入ってるし、あさっては野球解説者の郷田が愛人と3Pしにくるらしいぜ。おまえ、前に郷田と一緒に番組に出てただろ？」

「ご、郷田さんがここへ？　イヤっ！　それだけは堪忍してぇ！」

柴野は、身体中を泡だらけにしたまま風呂場から逃げだそうとする由美子のウエストを素早くつかんで引き寄せる。

「ずっと前から狙ってたんだ。今夜こそおまえを食い散らかしてやるぜ！」

酒臭い息を美しい顔に吐きかけながら、むっちりと脂の乗った太腿を抱えあげ、秘唇を指で割り開く。そして、そりかえった太竿を由美子のおま×こにぶちこむ。

「イヤイヤ、イヤぁあっ！」

尻の穴をうごめくオモチャで刺激され、その上ま×こに生のチ×ポをぶちこまれてしま



っては、イヤでも淫乱な血が煮えたぎってしまう。由美子はイヤイヤとつぶやきながら、いつの間にか腰を揺すり、薄っぺらい柴野の胸に硬くしこった乳首をこすりつけた。

「ああんっ、ひぁ～んっ！　気持ちいいのっ！　もっと動いてっ！　ずっと奥まで突きあげて欲しいのおっ！」

柴野は由美子の尻たぶを両手でつかみ、美しい裸身を揺すりあげる。怒張したペニスは熱く柔らかな粘膜で締めつけられ、発射寸前になっている。

「いいかっ？　えっ？　どうだ、答えろっ！」

「いいわっ、とってもいいのっ！　バイブとチ×ポが身体の中でこすれてるのおっ！」

「この淫売のメス豚めっ！　オレさまのスペルマをたっぷり飲ませてやるぜ！」

太筒の先から勢いよく精液がほとばしり、肉壁をべっとりと濡らした。

「ああーっ！　いいーっ！」

絶頂に達した瞬間、後ろの穴からバイブがぬるっと半分出た。気づいた由美子は手でつかみ、完全に抜き取る。男の肩にもたれかかり、

「あはぁ～っ……。とってもいい気持ちだわ……」

甘い声でささやきながら、柴野の顔を見て、血色の悪い唇に指で触れる。

「キスさせて」

唇を重ねると見せかけて、逆手に握ったバイブを柴野の口に押しこんだ。
「うぐーっ!!」
柴野は突然のことに驚き、由美子の腕をつかむ。けれど由美子は渾身の力を振り絞って張型を喉にぐいぐい突き立てる。柴野の膝がガクッと折れ、タイルの上に尻餅をついた。
青黒い顔で由美子をにらみながら、白い腕に爪を立てる。
由美子は馬乗りになって柴野の首を締めた。両手の指に全身の力をこめる。
数分後、由美子を凌辱した若い男は完全に動かなくなった。汚物にまみれたバイブを口いっぱいに頬張ったまま、虚空をねめつけている。
殺した。わたしが殺したんだわ……。
由美子は呆然とした表情でよろよろと立ちあがった。目の前の死体を信じられない思いで見降ろしながら、ガクガク震えだす身体を両手で抱きしめる。
「わたしが殺した……。殺したんだわ……」
由美子はつぶやき、醜悪な男の屍から目をそらした。

☆

「痛っ!」
ほっぺを叩かれ、英里奈は意識を取り戻した。

「フッフッフ。目が覚めたか？」
灰色の背広を着た歯ブラシの押し売りセールスマン風のナスビと、お化粧めちゃハデ&ふりふりリボンのワンピース姿のトマトが、英里奈の目の前に立っている。
英里奈はセーラー服を着せられ、壁の前に鎖で大の字に吊るされていた。正面の壁一面は鏡張りになっている。クロロフォルムをかがされたために吐き気がする。
「ここはどこ？」
「ラブホテルの中よぉ。それもSM専門のトコ。天下ご免の女子高生でも、こういうトコにくるのは初めてでしょ？　ふふふふ……」
足もとのテーブルの上に、太くて長いムチと直径10センチのロウソク、ライターが置かれている。
「やだやだやだーっ！　ここから出してぇっ！」
英里奈は鎖から逃れようと身をよじった。しかし手首を手錠のような器具で拘束されているので、鎖がぶらぶら揺れるだけだ。銀色の拘束具は動けば動くほど引き締まり、白い肌を傷つけていく。
「おい、静かにしないと、こいつをお見舞いするぜ」
アーミーナイフを胸に突きつけられた英里奈は、瞬時にして『だるまさんが転んだ』状

態になった。オニにまっ正面からにらまれているので、身動きひとつできない。
「いいか、一度しか言わねぇから、よぉく聞くんだ」
「ええ、いいわ。あたし、黙ってる」
トマトが神妙な顔でコクコクうなずく。
「おまえじゃないっ！　このガキに言ってるんだよっ！」
「あらぁ、ごめんなさい」
「クソっ！　おいっ、今すぐ乳アテのありかを白状しろ。そうすれば、おまえには指1本触れずにここから帰してやってもいいぞ」
英里奈は眉間にくっきりタテジワを刻み、刑事コロンボも顔負けの神妙な表情でナスビに問いかえす。
「ねぇ、前々から気になってたんだけど、乳アテって、なんのこと？」
「淳ちゃぁん、ちょっとクチバシ挟んでもいいかしらぁ？」
「るせぇっ！　後にしろ後にっ！」
トマトはそれでも食いさがる。
「でもぉ……。あたし、今どきの女の子に乳アテなんて言ったってわからないと思うの。ちゃんとブラジャーって言わなくちゃ。ねっ？」

「ブラジャー？　あたしのブラが欲しいの？」
「そうだっ！　最近、おまえの読者から黒い下着が届いただろう？　えっ？」
英里奈はギクッとし、あわててナスビから目をそらす。
まさかこいつら、あたしの秘密を知ってるんじゃ⁉……
「なに言ってるのかぜーんぜんわかんないんだけど？」
「しらばっくれるのもいい加減にしろ！　おまえが『黒須裕也』のペンネームでスケベェな小説を書いてるのはとっくにバレてるんだっ！　乳アテのありかを正直に言わねぇと、痛い目にあ、あ、あ、あうこと、に……」
ひと息にまくし立てようとして息がつづかなくなり、ぜぃぜぃあえぎながら深呼吸する。
「淳ちゃんっ！　だいじょうぶ？　ぜんそくの発作が出たのねっ！　深呼吸して。ちょっとあなた、淳ちゃんの言う通りにしたほうが身のためよぉっ！」
英里奈はじっと考えこむ。
『黒い下着』って、ディスコに出かけた時に着てったランジェリーのこと⁉　あのブラにはなにか秘密があるのかしら？　そんなことより、こんなトコでこいつらに思うぞんぶんいたぶられて殺されたりしたら、どうしよう？　あたしが書いてるポルノなら、こういう時はやっぱりヒロインは悪者に犯られちゃって、イヤなのにすごぉーく感じちゃってエク

スタシーしちゃうのよね。ひぇーっ、まさかあたしもそうなるのかしら⁉ そういえば、ナスビのチ×ポってすごく太かったわよね？ 太幹って言うよか極太魔羅って感じで、あたしの大切なトコが裂けちゃいそうだったっけ。今度こそアソコに入れられちゃうのかしら？ あーんっ！ 想像しただけで胸がドキドキしちゃうっ！……

「どうぉ？ 思いだしたぁ？」

自分の想像に夢中になっていた英里奈は、ついつい適当な返事をしてしまった。

「え？ 別に。そんなの知らないわよ」

「うそをつくな！」

「うそじゃありません。あたし、ウソだけは、生まれてから一度も言ったことがないんですからねっ！ 空き巣でもなんでもして調べればいいでしょ！」

「おまえんちに空き巣に入るのは簡単だったぜ。でも、乳アテはなかったぞ」

ナスビは、ポケットからおもむろに英里奈の写真入りの生徒手帳を取りだし、これ見よがしにちらつかせる。

「現役の女子高校生ポルノ作家がこんないかがわしい場所で殺されたとなると、さぞかしマスコミは喜ぶだろうな。『SM専門ラブホテルで殺害された女子高校生は、実は売れっ子のポルノ作家だった』てな見出しが目に浮かんでくるぜ。くっくっく……」

冗談じゃないわ。こんなトコで殺されたりしたら、二度と小説が書けなくなるわっ！　それに黒須裕也が女だってことがバレたら、いったい何十万人の読者がショックを受けると思ってるのよ⁉……

「あくまでも白状しないつもりなら、おまえの身体に直接聞いてやるぜ。たいていの女は上の口が固くても、下の口は正直だからな」

ナスビはセーラー服の襟をつかみ、力まかせに左右に引っぱった。縫い目がビビッと裂け、Ｆカップのバストと乳首が剝きだしになる。

「イヤッ！　やめてぇっ！　本当に知らないんだってば！」

「おい、こいつのおま×こに手を入れてみな」

拷問はナスビにまかせ、ちゃぷちゃぷ波打つウォーターベッドに飛び乗って弾力を試していたトマトが、キョトンとして聞きかえす。

「おま×こに手を入れるですって⁉　このあたしが⁉」

「ああ。おまえ以外に誰がいるってんだよ？　さっさとしろ」

「あたしはイヤよっ！　女の子の大事なトコに手を入れるなんて絶対できないわぁっ！」

「なんだとっ⁉　オカマのくせに！」

その瞬間、トマトの顔から笑みが消えた。

「淳ちゃんったらなんてこと言うの⁉　そりゃああたしはオカマよ。親子代々、ううん、ひいおじいちゃまの代から、ずうぅっとオカマだったわ。でも、女の子の大事なトコに手を入れるなんてことは、たとえイタリアのマフィアに脅されたってできないわっ！　先祖代々オカマの血をひくあたしのポリシーに反するんですもの」

オカマの王道をばく進するトマトは両目にいっぱい涙を浮かべ、震える声で訴える。

「ポリシーだかポリンキーだか知らんが、とにかく、今すぐこいつを裸にひん剝け」

「……そうね、それくらいならあたしにもできるわ」

トマトはテーブルからカミソリを取り、セーラー服の襟に押し当てる。

「いやーっ！　あたしの制服破かないでぇっ」

暴れる英里奈の肘がトマトのアゴを直撃する。

「いったぁーい、もうっ！　女の子のクセに乱暴ねっ！」

トマトは薄化粧した顔に怒りの色を浮かべ、カミソリを素早く動かし、あっと言う間にセーラー服を全部切り裂いてしまった。英里奈は下着をつけていないので、たちまち白く滑らかな裸身が剝きだしになってしまう。

「いいこと？　ここはこのホテルで料金が一番高い部屋なの。その名も『ロイヤルスウィート』よ。あのブラのありかを白状するまで、たっぷりいじめてあげちゃうんだから」

英里奈は内心、やっぱり、とため息をついた。
ここでヒロインが悪者に犯されなきゃ、ポルノとは言えないわよね？　ずばりパターンなんだからぁ。もぉ、やんなっちゃうっ！……
と思いながらも、SM専門のラブホテルってどんなことをするんだろう？……とワクワクしていたりする。英里奈はどんな状況に置かれても、自分の好奇心には逆らえないのだ。
「え？　このにおい……」
どこからともなく甘い香が漂ってきて、英里奈の鼻をくすぐった。
「生クリームよぉ。『ロイヤルスゥイート』ですもの。甘いお菓子をたっぷり味わわせてあげちゃうんだから！」
トマトは別室から持ってきた絞りぶくろを英里奈の乳房の上にかざした。逆さまにして押すと中から白い生クリームがウニューッと溢れでる。
「うそーっ!?　やっ、やだぁっ！」
「動いちゃダメよぉ。きれいきれいにデコレーションしてあげるんだからぁ」
トマトは直径5センチの太さがあるバイブを英里奈の上の唇に押しこみ、後ろでベルトを固定してスイッチを入れた。
口の中でバイブがうねうね動いてる。まるでフェラチオさせられてるみたい。こんなの

イヤッ。誰か助けてっ!……

叫ぼうとしても、口いっぱいに挿入された張型のせいで声が出せない。かわりに唇の端からよだれがたらたら溢れだし、形のいいあごを濡らす。

トマトは作品制作中の芸術家のように神妙な顔つきになっている。起伏のあるキャンバスに絵を描くように絞りぶくろを動かして、乳首を中心にして生クリームをぐるぐる渦巻き模様のブラジャーの形に塗りたくっていく。

英里奈は、指で触れられてもいないのに恥ずかしいところがジュクッと濡れてくるのに気がついた。いつの間にかすごくエッチなことを考えている。

生クリームの次はなにを塗るのかしら? ああんっ、この唇を犯しているのが生のチ×ポだったらもっと気持ちがいいかもしれないわ。どうせならバイブはアヌスにぶちこんでくれればいいのに……。

「生クリームの上にスプレーチョコをまぶしましょ。赤、青、緑、とってもきれいだわ。おヘソには砂糖づけのチェリーを入れてあげるわ。下半身にはカナダ名産のメイプルシロップを塗って、スライスしたアーモンドをくっつけちゃおうかしら? スパンコールみたいでカッコイイと思わない?」

「むっ、むぐぅっ……」



「あらぁ、あたしの案に賛成なのね？　それじゃ、その線でいきましょ！」
トマトは英里奈のヘソから下にたっぷりシロップを塗っていく。ぽちゃぽちゃしたもみじまんじゅうのような手で若草の生えた恥丘をたっぷり揉みあげ、ピッタリと合わさった秘唇をかきわけ、指腹を使って小さな真珠にていねいにシロップを塗りこむ。
「ふむっーっ！」
由緒正しいオカマは女の子のお股に手は入れられないって言ったのにーっ！……
と叫びたいが、美唇をバイブで犯されている英里奈にはうめくことしかできない。
トマトはアーティスト気取りで、恥ずかしい下のお口にも甘い蜜色の液をまんべんなくまぶす。
そのとたん、英里奈の尻がブルルッと震えた。
「あらぁん。英里奈ちゃんって、感じやすいのねぇ。鏡に映ってる自分の姿を見て、興奮しちゃったんでしょう？　ほらぁ、ラブジュースがたーっぷり溢れちゃってるもの」
トマトはシロップと淫蜜が混じり合った液を指ですくい、目の前に突きつける。
英里奈は唇を大人のオモチャでふさがれ、鼻だけで激しく息を吸いこんだ。生クリームを塗られたFカップの爆乳はプリンのようにプルプル揺れている。
もうダメぇっ！　身体がうずいてきちゃう。いっぺんでいいからイカせてっ！　今すぐ

おま×こをメチャメチャにしてくれないと、頭がおかしくなっちゃうよぉっ!……」
「お尻にはチョコを塗ってあげるわ。淳ちゃんって、チョコに目がないんですもの」
お菓子づくりが趣味なのか、トマトは若々しい英里奈の身体を手際よくデコレートした。
「できたっ! これで完成よん。あら残念、ここにカメラがあれば、あたしの作品が写真に残せたのに……。しょうがないわね、かわりにビデオでも撮っておこうかしら」
「ビデオは証拠になるからやめておけ」
ナスビが現われた。英里奈の記憶通り、信じられないほど壮大なチ×ポがそそり勃っている。どす黒い皮膚はピンと張りつめ、太竿に浮きでた血管がビクビクと脈打っていて、大きな亀頭の割れ目から先走りの液が溢れている。ナスビは極太の男根を見せつけるようにぶらぶら揺すりながら、英里奈のアゴをつかんで顔をあげさせる。
「どうだ? 答える気になったか?」
英里奈はナスビを淫らな目つきで見かえしたまま、イヤイヤと首を左右に振る。知らないものは答えようがない。
「それじゃあ食わせてもらうとするか」
「淳ちゃぁん、お願いよ。芸術作品なんだから、上品に召しあがってねっ♡」
ナスビはアバウトにうなずき、英里奈の背後からヒップの割れ目をたどって柔らかな股

奥へと武骨な右手をのばした。指先には、ラブジュースがぬらっとまとわりつく。
「なんだ、もう濡れてるじゃねぇか」
「それは当然よぉ。メイプルシロップには媚薬を混ぜてあるんですもの」
「ふふん。今日はヤケに準備がいいんだな？」
「オカマは悩める女の子のよき理解者ですもの。淳ちゃんの巨根で英里奈ちゃんの大事なアソコが裂けたら痛いでしょ？　だから前もってヌルヌルにしてあげたのよん」
イヤーッ！　鎖を引きちぎってでも逃げたい！……
でも、英里奈は身もだえするので精いっぱいだ。
このままじゃ、細いウエストをつかまれ、シロップまみれのおま×こに巨根をぶちこまれちゃう……。
「んぐぅーっ！」
突然、怖いほど巨大な異物が英里奈の腹の奥いっぱいに入ってきた。剛棒はヴァギナを満たし、子宮の壁をえぐるようにこねくりまわす。あまりの痛さに気絶しそうになると、ナスビはすかさず英里奈の尻をつねりあげる。
「おらっ！　どうだ？　白状する気になったか？」
英里奈はたまらず、涙を流してコクコクうなずく。英里奈の様子を心配そうに見守って


AAA
Zuchu
Zuchu

いたトマトが急いで唇からバイブを抜き取る。
「はっ、はぁっ……。お、お風呂場の、あたし専用、の……洗濯カゴの中、だと思……」
「風呂場なんざとっくに調べずみだっ！　どこにもないからこうして下の口にも聞いてんじゃねーかあっ！」
ナスビはクリームまみれのキングサイズ巨乳をめちゃくちゃ揉みながら、腰を上下左右にグラインドさせる。野太い肉竿は濡れそぼる小さな割れ目を我が物顔に出入りし、秘唇を嬲る。肉芽をこすられるたびに、強烈な快感が英里奈の身体を突き抜けていった。
「みぅっ！　みゃぁああっ！　もっとぉっ！……ああん」
ダメェッ！　こんなことされて喜んでるなんて、あたし、本当は変態だったんだわ！　だってだって、もっと太いチ×ポをアヌスにも入れて欲しいの！　バイブでもナスビでもなんでもいいから、たっぷり犯してぇっ！……
「ひぐうっ！　はぁあっ！」
ナスビは泣きながらよがる英里奈の首筋を舐めあげ、乳首を引っぱる。
「そろそろマジで白状しねぇと、ほかの道具で死ぬまで責めてやってもいいんだぜ。ここには、牛や馬をぶっ叩くためのムチや、奴隷のケツに押す焼きごてもある。なんならスケベェなビラビラにピアスホールを開けてやろうか？」

「いやぁあーっ！」
英里奈は悲鳴をあげて逃れようとするが、身体は逆にもっと深く快感をむさぼろうと、自分からナスビの下腹にヒップをぐいぐい押しつけてしまう。
「だっ、ダメぇーっ！　き、菊華がぁっ……」
「キッカ？　誰だそいつは？」
「ほらぁ、この子が一緒に暮らしてる女の子のことよぉ。淳ちゃんったら、本屋さんの前で腕に嚙みつかれたでしょお？」
「くそう！　あのスケか。あいつが持ってるんだな？」
「た、たぶん……」
菊華なら、なにか知ってるかもしれない。あのブラ、欲しそうな顔してたから……。
「よしっ！　今すぐ確認にいくぞっ！」
ナスビは急いで英里奈のおま×こから怒張した太魔羅を引き抜こうとする。
「あらぁん、淳ちゃんったらイジワルねぇ。一度くらいイカせてあげなきゃ、かわいそうじゃないのぉ！」
「ん？　それもそうだな。よし、おまえも手伝え」
「OKよっ！　ほら、英里奈ちゃん、あなた99センチのFカップもあるんだから、自分で

自分のお乳くらい舐められるでしょ？　ほら、乳首咥えさせてあげるわ。それから、と。あたしはクリちゃんを責めてあげるわね。……ええ、もちろん、オカマは女の子のお股には手を入れないものよ。でも、今だけは特別。英里奈ちゃんって、あたし好みでとっても可愛いんですもの」

トマトの指は英里奈の敏感なお豆を挟み、コロコロ転がして刺激する。ナスビの太竿は秘唇を嬲り、締めつけてくるヴァギナの肉壁をこすりたてる。

英里奈は鎖を片手だけはずされ、命令通り乳房を自分の舌で舐めあげる。ほんのり甘い生クリームとかすかにしょっぱい汗の入りまじった複雑な味が口の中にひろがる。

「ふみぃ～っ！　も、もうっ！　イッちゃうっ！　絶頂しちゃうのぉおーっ！」

エクスタシーを迎えた瞬間、英里奈の身体がビクビクッとけいれんした。意識がすうっと遠のき、全身から力が抜けてぐったりとなる。

一方、ナスビは秘裂から巨根を抜き取り、太腿目がけてスペルマを発射する。まったりと白濁した液はドピュドピュッと肌を濡らし、栗の花のにおいをあたりにまき散らす。

「淳ちゃんって、いつだって女の子を最高にイカせちゃうのねぇ。……あ～あ。あたしにもヴァギナがあったら太いのを入れてもらうのにぃ」

「ふざけたことを言うな。オレはひと足先にこいつのマンションへいってるからな。さっ

さと始末してこいよ」
ナスビはふたりを残して部屋を出ていく。
純正オカマのトマトは乱暴に閉められたドアを数秒間にらみつけ、相棒が戻ってこないとわかると鎖をはずして英里奈をベッドに横たえた。ひどく心配そうな表情で青白い頬をそっと叩く。
「英里奈ちゃん、英里奈ちゃん？」
目を覚ました英里奈は本能的に逃げようとしたが、太棒で嬲られた身体はクタクタですぐには動けない。耳まで真っ赤に染めながら、シーツをつかんで胸まで引きあげた。
「ああよかった。淳ちゃんがふたりっきりにしてくれて助かったわ。でなけりゃ、本当に殺さなきゃならなくなっていたもの」
「やめてっ！　殺さないでっ！」
「だいじょうぶよ、殺したりはしないから。ねぇ、そんなことより、教えてちょうだい。英里奈ちゃん、あなた、本当に黒須裕也なの？」
「えっ？」
「あたしたち、ブラをさがしに英里奈ちゃんのマンションへいったの。その時あなたの部屋でこれを見つけて……」

つぶれトマトがワンピースの肩からさげていたポシェットから取りだしたのは、なんと黒須裕也の最新刊『北の国より愛をこめて』だった。
「本棚で見つけて欲しくなっちゃったの。淳ちゃんには内緒で持ってきちゃった」
トマトは乙女のようなはにかみ笑いを浮かべ、えへっと肩をすくめる。
英里奈はポカンとしたままトマトに問いかけた。
「まさか、あなたって……」
すると、トマトはパアッと明るい笑顔になって答えた。
「そうなのっ！　あたし、黒須裕也センセの大大大ファンなのよっ！」
英里奈は内心、ひぇーっ！……と叫んだ。
生クリームでエッチなことをする変態オカマが、あたしのファンだなんて⁉……
とは思うものの、『読者サマは神様です』だ。
「そうだったんだぁ。ねぇ、お願い。黒須のファンなら、あたしを逃がしてくれない？
こんなトコで殺されたりしたら、あたし、二度と小説が書けなくなっちゃうもの。ね？」
「逃がしてあげたいわ。でも、その前にブラをあたしに渡して欲しいの」
「何度も言うようだけど、あたし、本当にあのブラジャーが今どこにあるのか知らないの。
ひょっとしたら菊華が持ってるかもしれないけど、はっきりはわからないし……」

「そうなの……。どうしたらいいかしら？　あれを手に入れなきゃ、あたしたち、ボスに殺されちゃうかもしれないわ」
英里奈は涙声でつぶやくトマトに問いかけた。
「ねぇ、あなたがさがしてるブラって、どんな秘密があるの？」
「えっ？　それは……」
「ちょっと水くさいわよ！　あたしだって、黒須裕也の秘密をバラしたんだから、あなたの秘密を教えてくれてもいいんじゃないの!?」
トマトはとたんにうれしげな顔でモジモジしはじめる。
「えー♡　ふたりだけの秘密ぅ？　や～ん、困っちゃうわぁ。ブラの秘密は誰にもナイショにしろ、って淳ちゃんに言われてるし……」
英里奈はダメ押しついでに、もうひと言つけ加えた。
「秘密を教えてくれたら、この次出版される本を送ってあげてもいいわよ。本屋さんに並ぶ前に誰よりも早く読めちゃうなんて、最高だと思わない？」
「う～ん。もし、教えてあげたら、主人公にあたしの名前を使ってくれる？」
「ええ、いいわ。約束する。名前、なんて言うの？」
「ユリオよ。女の子みたい、ってよく言われてるんだけど、素敵な名前でしょ？」

「ユリオくんね。わかったわ。次の作品で必ず使ってあげる！　あとがきにも書いちゃうわ。『ユリオくん、協力ありがとう』って」

英里奈はニコッと笑って約束する。もちろん、約束は約束なので絶対に守るつもりだ。つぶれオカマトマトことユリオくんは、感動にうるピーした目で英里奈を見つめる。

「じゃ、ぜーんぶ話しちゃう」

英里奈はユリオと一緒にベッドの端に座った。

「あたしたちがさがしてるブラには、あるフィルムが隠されているの。フィルムにはすごく高い値段で売れる情報が焼きつけられていて……」

「ってことは、あなたたち、本当はブラジャーじゃなくてフィルムをさがしてるのね？」

「ええそうなの」

「それで、ボスっていうのは誰なの？　もしかして、ユリオくんってマフィアの手下？」

「似たようなものよ。ボスはマフィアより怖い人なの。でも、誤解しないでね。あたし、『水戸黄門』の大ファンだから、いたいけな学生や生活の苦しい主婦なんかは絶対いじめたりしないんだから。あたし、そういうところはすっごぉーくマジメなの」

マジメな人間が悪人の手下になんか、なるもんですか！……

と思ったが、英里奈は軽く聞き流すことにした。そんなことより、どうやってユリオを

だましてここから逃げだすかが問題だ。ユリオに殺すつもりがなくても、ナスビには充分殺意がある。ここでのんびりしていたのでは、命がいくつあっても足りやしない。

ユリオは策略を練る英里奈には気づかず、媚びた目つきで話しかける。

「ねぇねぇ、お願いがあるんだけど、聞いてくれる?」

「なに?」

「今のうちにこの本にあたしの名前をサインしてくれないかしらん?」

「サイン? もちろんOKよ! ペンは持ってる?」

「ええ、たしかあそこの引き出しにサインペンがあっ……ウギャッ!」

ユリオは立ちあがったとたん、何者かに後頭部を殴られ、床にノビてしまった。英里奈は振りかえった男の顔を見て、一瞬ポカンとなる。

「り、隆一さんっ!!」

「あぶないところだったね」

「どうしてここに?」

「公園から拉致されたのを偶然目撃したんだ。それでずっと尾行してきたんだよ。それにしても、間に合ってよかった」

「そうだったんですか……」

あたしたちに気づかれることなく、音もたてずに忍びこんでくるなんて、この人、忍者の子孫なのかしら?……まさかね。

「すぐこの部屋を出よう。いや、その前にシャワーを浴びてくるといい」

英里奈は身体の汚れを素早く洗い流し、隆一のジャケットを借りて着た。男物でかなり大きいが、湿り気を帯びた若草が隠れるぐらいの長さしかない。

隆一は駐車場にとめてあった黒いスポーツカーの助手席に英里奈を乗せた。

悪夢のSM専門ラブホテルは、みるみるうちに遠くなっていく。

「英里奈ちゃん、さっきのあいつ、フィルムをさがしてるとか言ってたよね? なんのことだか知ってるかい?」

「さぁ? そこまでは聞いてませんけど……。ああっ! どうしよう!? あたし、菊華が持ってるかも、って言っちゃったんです。今すぐ菊華に連絡しなきゃ!」

「菊華ならボクのマンションにいるから、安心しなよ」

「えっ? そうなんですか……」

英里奈はホッと胸を撫で降ろした。だが、もうひとつ疑問が浮かびあがってくる。

フィルムの話を聞かれてたってことは、隆一さんはあたしが黒須裕也なんだってことも、知ってしまったのかしら?……

不安で胸がドキドキしてくる。今すぐ確認したいけど、ヘタな聞きかたをすれば、逆に知られたくないことがバレてしまいそうな気がする。しょうがないので、とりあえず話をそらすことにした。

「隆一さん、あたし、さっきのせいですごく疲れちゃって……。とても眠いんですけど」

「それじゃあ、少し眠るといいよ。マンションに着いたら起こしてあげるから」

英里奈はシートベルトをしっかり締めなおし、ヘッドレストに頭をもたれてウトウトしはじめる。けれども、きのうからずっと興奮に次ぐ興奮を経験したため、神経が高ぶっていて、どうしてもすぐには眠れない。

あのふたりはフィルムの入ったブラをさがしてる。フィルムには重要機密がプリントされていて、大金に変えることができる。なんか、あたしがいま書いてる小説の内容にそっくりだわ。あたしの小説に出てくるフィルムは、売れっ子アナウンサーが若いころSM不倫していた証拠の品なんだけど、トマトたちがさがしてるフィルムにはなにが隠されているのかしら?……

第9章　遊園地のラブラブ大作戦♡

「へえっくしょーい！」
英里奈は自分のクシャミに驚いて目を覚ました。ブルッと身震いして周囲をキョロキョロ見まわす。その目がルームミラーに映る隆一の視線とぶつかった。
「もうすぐきみのマンションに着くよ」
「あ。はい」
窓の外を見慣れた風景が流れてゆく。車はほどなくマンションの裏にある駐車場にとまった。隆一は全裸にジャケットをはおっただけの英里奈を隠すように、肩を抱いて裏口から入っていく。
英里奈はドアの前まできて鍵を持っていないことに気がついた。だが、それを言うより

早く、隆一がノブをつかみ、ドアを開けた。
「どうして開いているのかしら？」
英里奈の問いに答えるように、リビングのほうから声が聞こえてきた。
「ひうぅっ！　ふあっ、ひぁあっ……あはぁんっ！」
菊華の声だわ。それも、エッチしてる時の声みたい！……
「あ。待って！」
英里奈がとめようとした時には、隆一はもうリビングに踏みこんでいた。
部屋の真ん中に置かれた四角いガラステーブルの上に菊華が腹這いになっている。それだけではない。高く差しあげられた尻を早乙女蘭が犯していた。ピンク色の肉竿が女陰を出入りするたび、エッチなよだれが溢れて淫らな音をクチュクチュたてる。
どうして蘭がここにいるの⁉　それに、菊華のアソコを貫いているバイブみたいなのは、いったいなに⁉……
蘭はふたりの気配に気づき、妖艶な美顔に微笑みを浮かべて振り向く。
「待っていたのよ、黒須裕也さん」
思わず硬直する英里奈。
「サイン会にいけば捕まえられると思ったら、かわりに知らない男がいるとはね。彼を誘

Gichu...
Gichu...
Bikun
Bikun
AAA

惑して本人が出てきたところまでは思った通りだったのに……。意外に手こずらせてくれましたわね」
「ひうっ！……えっ、英里奈っ、きちゃダメぇっ……あうぅっ！」
菊華が必死に叫ぶ。
「原田、命令よ、その子をジュウタンの上に押さえつけなさい」
危険を感じて逃げだそうとしたが遅かった。振り向いた英里奈の目の前に、全裸の原田が立っていた。原田は英里奈を床へ押し倒し、ウエストの上に軽く腰を降ろす。それだけで英里奈は逃げられなくなってしまった。
「いやぁっ！　原田さん、離してぇっ！」
「残念ね。原田にはちょっとした媚薬を盛ったから、わたくしには絶対に逆らえないわ。もちろん、この子もよ。ほら、わたくしの足をお舐めなさい」
蘭に命令されて、菊華は口もとに突きつけられた足の指をしゃぶりはじめる。涙が出るほどいやなのに、どうしても命令には逆らえないのだ。
「やーっ！　りっ、隆一さぁんっ！」
「安心しなよ。あわてなくてもいま犯ってあげるから」
英里奈の目の前で隆一がズボンを降ろしている。黒いブリーフの下から赤茶けたチ×ポ

がヌッと現われた。
「ほら、よく見るんだ。ぼくのチ×ポをきみのちっちゃなおま×こに入れてあげるから」
英里奈は両手をひろげたあおむけの格好で原田に押さえつけられた。隆一は暴れる英里奈の太腿を強引に割り、秘部を充分引きつけて硬直したペニスの先端を突きつける。
なんでこんなことするの!?　菊華の目の前で隆一さんに犯されるなんて絶対イヤ!……
英里奈はここまでされても隆一が蘭の仲間だとは気づいていない。
「ああんっ、だめぇっ!　入れないでぇえっ!」
隆一の赤剝けチ×ポがおま×こにねじこまれた。
「いやーっ!　隆一ぃっ、そんなことしないでーっ!」
恋人の心変わりを目の前で見せつけられ、菊華が泣き叫ぶ。しかし、隆一は菊華など無視して英里奈のマ×コを犯しつづける。
「いやがるわりにはずいぶんすんなり入るもんだな?　つけ根までズブッと刺さったじゃないか。ひょっとして中はもう濡れてるのかな?」
隆一のペニスは最初は細かったが、蜜壺に入ると同時にまるで淫蜜を吸収したかのようにぶくぶくふくれだし、とうとうヴァギナをいっぱいにしてしまった。巨砲はミニチュア

化した怪獣のように英里奈の胎内で暴れはじめ、肉襞をえぐり、強くこすりたてる。
「原田、その子のでっかいお乳であんたのチ×ポを慰めてみたら？……そうよ。上のお口はわたくしのために空けておいてね。これから拷問するんだから」
原田は虚ろな目で英里奈の上にまたがり、99センチの美乳にチ×ポをサンドする。柔らかな肉まんじゅうに竿を狭んで二、三度腰を動かすと、剛棒はみるみるうちに硬くそそり勃ってくる。それと同時に、英里奈の乳首も充血してプクッとふくらんでしまう。
「ああんっ！　ふみぃ〜っ……やめてぇえんっ！」
「あんなにスケベなポルノを書くだけあって、よがりかたがじょうずじゃないの。ふん！甘い声で男はだませても、わたくしは絶対だまされやしませんからね。覚悟なさい」
「イくっ！　いくのぉっ！　ああぁーっ！」
テーブルに両手をついて背をそらし、菊華が絶叫する。スレンダーなボディがガクッと力つきると、蘭はけいれんしているおま×こから肉竿を抜き取った。
「何日か前、黒須裕也あてに読者からのプレゼントが届いたでしょう？　アメリカ製の黒いパンティよ。あれはどこにあるの？」
黒いパンティ？　どうしてパンティなんかをさがしてるの？　ユリオくんたちは黒いブラをさがしてたのに……。

「しっ、知らないっ……はぁっ、はぁっ、みゃうっ！　やんっ、やめてぇっ！」
「編集部から回送されたファンレターの中に入っていたはずよ。正直におっしゃい！」
あのパンティはたしかユウヤが持っていったはず。でも、今あの人がどこにいるのかなんてわからないし……。
気がつくと、隆一が英里奈のアヌスに指を入れている。第2関節を90度に曲げ、直腸の壁をクイクイッと引っかくように刺激されると、英里奈はシッポに火をつけられた猿のように激しく尻を振りたててしまう。
「ふみぃぃ〜っ！　そんなトコいじらないでぇえっ」
蘭はしびれを切らして英里奈の髪をつかみ、肉の剣を英里奈の顔に突きつける。
「強情な子ね。ほら、よがってばかりいないで見てごらん。高校生のクセにポルノを書くほど早熟なおまえなら、これがなにかわかるでしょう？」
ヴァギナを隆一のチ×ポで犯され、Fカップの乳房を原田の逸物で刺激されているせいで、英里奈の頭はもうろうとしている。目の前にある肌色の物体が張型なのか、それともペニスなのか、判断することさえできない。
「これは正真正銘、女のクリ×リスなのよ。おまえみたいにちっちゃな肉芽よりも感度は少し落ちるけど、男みたいに女を犯すことができて最高よ」

「んっ、うぅ〜っ！」

ふたりの男に裸身を揺すられ、英里奈は満足に息もできない。蘭の巨大なクリ×リスを呆然と見つめながら、岩場に打ち寄せる荒波のようなせりあがる快感に翻弄(ほんろう)されている。

「本当に答える気はないのね？……いいわ。隆一、わたくしと交代して」

愛液でぬらつくおま×この穴から太筒が抜き取られる。

「イヤァっ！　イカせてぇっ！　もっとぉっ！」

英里奈は思わず両脚を隆一の腰にまわして引きつけようとするが、間に合わなかった。

蘭は片方の脚を隆一に持たせて、ぱっくり開いた英里奈の秘部をしげしげと覗きこむ。

「まあっ、すごい！　びっしょびしょじゃないの。まさかあなた、お尻の穴をいじられて、おもらししたんじゃないでしょうね？」

「ちっ、ちがうよぉっ。……ふみぃぃん、欲しいのぉっ」

なんでもいいからおま×こに入れてかきまわして欲しい！　今すぐそうしてくれないと死んじゃいそうなの！……

「それじゃあ、ご希望通り入れてあげるわ。でも、イッたらブラのありかを正直に答えるのよ。でなきゃ、ここの毛に火をつけて燃やしてしまうからね」

「いやぁーっ！」

蘭は、震えている英里奈のマ×毛を引っぱり、隆一の剛直が抜け落ちたばかりのエッチなブラックホールに自分のクリ×リスを押しこむ。節も亀頭もない肉竿は、ドーナツの穴に糸を通すのと同じくらい簡単に花奥へ入ってしまう。

「あっ、あっ、ひぁあんっ！」

「おまえ、自分のライバルに犯されてるってのに、それでもイキたいわけ？　自分でお尻を振っちゃうくらいおま×こに物を入れるのが大好きなの？」

なんと言われようが、今の英里奈には通用しない。とにかく今すぐ絶頂に達しないと、頭がおかしくなりそうだ。

「みぅう〜っ！　くっ、クリ×リスいじってぇっ！」

「あらあら、自分からおねだりするなんてエッチな子ねぇ。触って欲しいならブラがどこにあるのか、正直におっしゃい」

「しっ、知らないのぉっ！　本当なのおっ！」

腰をくねらす英里奈の胸の上で、原田がブルブルッと体を震わせ、勢いよくスペルマを発射した。白濁した液は紅潮した英里奈の頬にかかり、飛沫がねっとりと肌を滑り落ちていく。鼻をつく男の香が英里奈の欲望をいっそうあおりたて、いつの間にか、蘭の肉竿を深く味わいたくて、腰をぐいぐい押しつけてしまう。



「ゆっ、ユウヤが持ってっちゃったのぉっ」
「ユウヤ？　それって、おまえのかわりにサイン会に出ていた男のこと？」
「そうよぉっ！　お願いぃっ、もっとちょうだいっ！」
「フン。バカな子ね。あとは自分でなさい」
蘭は非情にも英里奈のおま×こから肉茎を抜き取った。立ちあがりざま、英里奈の肩を脚で踏みつける。
「いやぁーっ！」
英里奈はジュウタンの上に張りつけにされたまま、おま×こに手をのばした。溢れたラブジュースでじゅぷじゅぷに濡れた秘孔に指を突き立てる。クリ×リスをくじりながら肉襞をかきまわすと、閉じたまぶたの奥で☆がチカチカスパークする。指戯が激しくなるにつれ、英里奈の身体は陸に打ちあげられた人魚のようにビチビチ跳ねてしまう。
「ひぅんっ！　あふぅうっ♡　んぁあんっ、気持ちいいっ！」
「ユウヤの連絡先は？」
「しっ、知らないぃ～んっ。あんっ！　はぁんっ。みぅうーんっ」
「嘘おっしゃい！」
蘭はオナニーに夢中になっている英里奈の手をつかんで、乱暴にねじあげた。

「電話番号は？　どこに住んでいるの？」
「ふみぃいっ。知らないのぉ……。痛いよぉ、離してぇ」
「ダメよ。本当のことを言うまでは、絶対にイカしてやらない」
蘭の言葉をさえぎるように、電話のベルが鳴りはじめた。気絶していた菊華がピクッと反応し、目を覚ます。
「おまえ、ちょっと出てごらん。よけいなことは言うんじゃないよ」
菊華はのろのろと立ちあがって、受話器を取った。
「もしもし……あ、はい」
「誰から？」
菊華は受話器を押さえて答える。
「ユウヤから。英里奈と話がしたいって」
しかし蘭は菊華から受話器を引ったくった。
「もしもし、あなた、ユウヤね？」
『ああ。そうだよ。あんたは？』
「わたくしが誰なのかはあなたには関係のないことよ。いいこと、黙ってお聞きなさい。今ここに英里奈が素っ裸で拘束されているわ。五体満足な姿で返して欲しければ、英里奈

から巻きあげた黒いパンティを持ってきなさい。30分以内によ」
『30分だぁ？　んなことできるわけねぇだろ』
「なんですって!?　この子がどうなってもいいって言うの？　なんなら、この子をミンチにして池の鯉の餌にしてやってもいいのよ！　それでもかまわないのっ!?」
『オレは別にかまわないぜ。英里奈って、純情そうな顔してるけど、実はすんげぇ好き者だからな。ＳＭでもスワップでも、おまえらの好きなようにすればいいだろ』
「ちょっと待ってて っ！　パンティはどこにあるのよ？　それだけでも教えてちょうだい」
『パンティならここ、「イマジネーションファクトリー」に持ってきてるぜ。30分以内に取りにこなかったら大人のオモチャ屋に売っとばすことにすっかな』
「えっ？　それだけはやめっ……ち、ちょっと、切らな……いやんもうっ！　切れちゃったわ。隆一、『イマジネーションファクトリー』って聞いたことはある？」
「ああ。最近オープンしたアメージングゾーンだろ？　入場料を払えば好きな衣装を着て園内を冒険できるってやつ。ディズニーランドに毛が生えたようなものらしいぜ」
「あいつ、そこにいるらしいの。今すぐいってパンティを取り戻さなきゃ」
隆一は菊華と原田にさるぐつわをかませ、手足を縛ってクロゼットに閉じこめた。
「おまえもいくのよ！」

蘭はジュウタンの上でまだひとり遊びに熱中している英里奈の腕をつかみ、乱暴に立たせた。全裸の上にコートを着せて、隆一の車の後部座席に押しこむ。

郊外へ向かって20分も走ると巨大な城が見えてきた。

白亜の城は中世ドイツのチューダー様式を模した本格的なもので、中央に巨大な時計塔がそびえ立っていた。塔のあちこちには架空の国の紋章を記した国旗が掲げられている。

「ちょっと、入場料は誰が払うの？」

「ボスが払うんだろ？」

「わたくしがぁ⁉　冗談言わないでよ。あいつらのせいで一文なしなんだから！」

ふたりの会話を聞いていた英里奈は、ん？　と首をひねった。ナスビとトマトは黒いブラを『ボスの命令でさがしている』と言っていた。隆一の『ボス』とふたりの『ボス』は蘭のことなのだろうか？……

「あんたが立て替えておいてよ。次の本の印税が入ったら払うから」

隆一は舌打ちをして、パーキングエリアで車をとめた。いつの間に用意したのか、蘭は黒光りするピストルを取りだし、英里奈の頭に突きつける。

「逃げだそうとしたり、誰かに助けを求めたりしたら、即刻こいつで頭に風穴開けてやるからね。脳ミソを道路にぶちまけたくなかったら、おとなしくついておいで」

蘭はたっぷり凄んで見せ、入り口で隆一のサイフから3人分の入場料を払った。
「3名様ですね。このチケットを隣りのA室までお持ちください」
田舎農家の娘風の衣装をつけた係員の指示に従ってA室に入る。そこには赤いトンガリ帽子をかぶった小柄な女の子が立っていた。
「いらっしゃいませ。わたくし、森のコビトのミミナと申します。みなさんが今日1日を楽しくすごせますよう、お手伝いさせていただきます」
「そんなことはどうでもいいのよ。……わたくしたちはあるものをさがしにきただけなんだから」
「まぁ？　あるものをさがしに⁉　それは財宝ですの？　それとも不老不死の薬？　冒険には危険がつきものですわ」
「どうでもいいから中に入らせてちょうだい！」
短気な蘭は、森のコビトの演技など無視してズンズン奥へ入っていこうとする。蘭の乳房までしか身長のないミミナは、必死になって蘭を押さえながら説明をつづける。
「園内は3つのゾーンに分かれています。呪いの森、魔法の宮殿、神々の楽園。みなさまにはご希望のお衣装に着替えていただき、それぞれのゾーンで冒険を楽しんで……」
「あーじれったいっ！　着替えればいいのね？　ほら、あんたたちもさっさとして！」

蘭はボーッとつっ立っているふたりに顎で命令する。けれどミミナは余裕の笑みを浮かべて口を挟む。
「わたくし、森のコビトはコスチュームプランナーを兼ねております。みなさまのイメージに合わせてお衣装をお選びいたしますので、今しばらくお待ちくださいませ」
「もーっ！　じれったいわねっ！　さっさとしてよ！」
「それではただちに……」
ミミナは壁ぎわにズラリと並べられた衣装の中から3人分のコスチュームを選び、それぞれに手渡した。更衣用のブースに入ると中にはメイクアップ担当のコビトがひとりずつ控えている。客が希望すれば衣装に合わせたメイクもしてもらえるのだ。
ブースから出てきた英里奈は純白のレースとプラチナをふんだんに使ったお姫さま風のドレスを着ていた。隆一は白馬の騎士の制服で、腰には刃をつぶした偽物の剣をぶらさげている。最後に蘭が登場した。ブースに入った時よりもっと怖い顔にメイクされている。
「ちょっとあんたっ、どうしてわたくしが悪い魔女のドレスなのよっ!?　これじゃあまるで白雪姫を毒殺するママ母女王みたいじゃないの！　えっ、なんとか言いなさいよ！」
森のコビトの胸ぐらをつかみ、のしかかるようにして文句を言う。蘭は血のような赤と黒の混ざり合ったドレスを着ていた。頭にはねじ曲った2本の角がニョキッと生え、地獄

の閻魔大王も思わずチビッてしまいそうなほど恐ろしいメイクで、黒い口紅を塗った口をクワッと開いただけで、気絶者続出まちがいなしだ。
案の定、ミミナの股間を生温かい液体がジョワーッと濡らす。それでも、家で寝ている持病持ちのおとっつあんのために職務を無理して果たそうと、震える唇を開く。
「も、森のコビトの魔法には、だ、誰も逆らうことはできません。悪の王国の女王様、どうぞ怒りをお静めになって、冒険をお楽しみください」
「誰が悪の王国の女王なのよっ⁉ 責任者出しなさいよっ！」
「もうよせって。さっさとしないとあいつに逃げられるぜ」
隆一にとめられ、蘭はムッとした表情で最初のプレイゾーン『呪いの森』につづくドアを開けた。
ドアの向こうはひどく薄暗く、表皮のゴツゴツした大木がうっそうと生い茂っている。足もとはぬかるみ、英里奈の大きらいなクモやムカデやゲジゲジがウジョウジョいそうで気持ちが悪い。頭上には青白い満月がぼんやり浮かんでいる。
「入場料は払わされるは、こんな格好にさせられるは……。それもこれも、みんなあんたが悪いのよ！　あのランジェリーは黒須あてのプレゼントじゃなかったんだから！」
英里奈はキョトンとして、目の前をいく蘭の後ろ姿に問いかけた。

「あのブラとパンティ、あたしあてじゃなかったの?」
「そうよ! それなのに編集部のバカがまちがって黒須に回送したりするからこんなことになっちゃって……もうっ! あったまくるわねっ! 帰ったら原田のアヌスをスリコギでえぐってやるわ。ヒィヒィ言うまで嬲っ……」
毒づいていた蘭の姿が突然消えた。
「えっ!? お、おい!!」
「こ、ここよぉ、助けてぇ……」
うろたえる隆一の足もとからか細い声が聞こえてくる。這いつくばって手さぐりすると、蘭の鼻をつまんでしまった。
「なにずるのよぉ!!」
蘭は落とし穴に落ちていた。とっさに腕をのばして縁に引っかかったが、両脚は地面に届かずブラブラしている。隆一は急いで蘭を引きあげてやった。蘭はぜいぜいあえぎながら、悪魔のドクドクモンスターも思わず失禁するほど怖い顔で英里奈をねめつける。
「ま、ま、まったくもぉっ! 英里奈、あんたが前を歩きなさい。いいこと? ユウヤを見つけたらすぐ……」
「うおっ!」

押し殺した声にふたりが振り向くと、どこからともなく黒装束の男が現われ、隆一に斬りかかっている。隆一はあわてて腰の剣を抜いたが、相手の剣をよけるだけで精いっぱいだ。へっぴり腰で後ずさり、とうとう木の根につまずいてドウッと転んでしまう。

男は目だけが見えるように穴をくりぬいた黒い布で顔の上半分を覆っていて、黒い絹のブラウスとぴったりとした黒いズボンをつけている。皮のロングブーツは傷だらけで、頭上に振りかぶった剣もかなり年季が入っているように見える。

「ははははは。騎士(ナイト)ともあろうものが姫ひとり……いや、姫と魔女すら守れぬとは笑止千万、片腹痛いぞ！　なぁっ？」

その声を合図に、ふいにあたりが明るくなる。燃えさかるたいまつを掲げているのは、ボロボロの服を着た海賊たちだった。月光にギラギラ光る大剣を振りかぶって3人を囲んでいた。片目にアイパッチをした中年。木の義足をつけた老人。全員従業員が扮装しているのだが、衣装もメイクも本物顔負けの出来だ。

それでも、いい加減トサカにきている蘭にコドモだましは通用しない。

「ちょっとっ！　こんなトコにデカい落とし穴を開けたのはあんたたちなの⁉　ドレスは泥だらけになるし、危うく首の骨を折るところだったじゃないのっ！」

「なんだ、折れなかったのか。悪運の強い女だな」

「ぬぁんですっとぇーっ⁉」
「おまえら、その魔女を裸にひん剝いちまえ！」
海賊たちがたちまち蘭に飛びかかる。英里奈を脅していた偽物のピストルを奪い取り、獅子舞のような形相で抵抗する魔女の両腕を押さえつける。四方八方からつかみかかって赤と黒のドレスを乱暴に引き裂く。ポロッと剝きだしになった白い乳房は、まるで夜霧に浮かぶ横浜中華街名物ピンクの桃マンのようだ。
「お頭っ！　こいつのオッパイ、うまそうなんで舐めてみてもいいっすか？」
「なんですってぇっ⁉　あんたたちっ！　そんなことしたらタダじゃおかなっ……」
海賊のひとりがもぎ取った袖をわめき散らす蘭の口に押しこんだ。黒装束をつけた若いお頭の視線を気にしながら、ついでにちょっぴり乳首をつまんだりもしてみる。
「おい、そいつはこの国だけじゃなく、世界各国で指名手配になっている極悪非道、淫売として有名な魔女だ。乳首なんか舐めたりしたらそいつの呪いで舌が腐るぞ」
お頭の言葉を聞き、手下たちはブルルッと身を震わせて手を引っこめる。
蘭はたちまちドレスとペチコートをむしり取られ、白いズロース1枚の姿になってしまった。その格好で裸の上半身を人目にさらす羞恥に頰を染めながら引きずられていく。そばの大木に両腕をまわされ、後ろ手に縛りあげられた。腰が抜けて立てずにいる隆一も、

同じように別の木に縛られた。
「森のコビトをいじめた罰だ。誰かが助けにくるまでずっとそうしているがいい。はーっはっはっはっは……」
黒装束の男は高らかな笑い声を残し、海賊たちを引きつれて姿を消した。
木の陰に隠れて一部始終を見守っていた英里奈は、恐るおそる通路へ戻って、海賊たちが消えたほうを見つめながらポツッとつぶやく。
「今の、アトラクションの一部なのかしら？」
「むむぅーっ！　むふむぅうーっ！」
ハッと振りかえると、大木の前で蘭が必死に身体をうねらせている。ランランと光る目で「この縄を解きなさい！」と英里奈をにらんでいる。
「んーとぉ……。逃げちゃおっ！」
英里奈はぐにゃぐにゃしたゴム製のミミズを踏まないように爪先立ちで逃げだした。
「むがーっ！」
蘭は大声で引きとめようとしたが、英里奈の姿はあっという間に見えなくなった。
ちょっととっ、なんなのよっ⁉　ヒロインが脇役を置いて逃げだしたりする⁉　冗談じゃないわっ！　無責任じゃないのっ！……いいわっ、たった今からこの小説のタイトルは、

『華麗なる美女♡早乙女蘭のセクシーボンバー！』に変更よ。もちろん主人公はこのわたくし。今すぐこの縄をぶっちぎってあのガキを捕まえてやるわ！　すっ裸にひん剝いて、生きたナマコでいっぱいになったバスタブにぶちこんでやるんだから！……

「ボスッ！　こちらでしたか！」

聞き慣れた声に目を向けると、ナスビの淳ちゃんがそこに立っていた。痩せこけた身体にドンキホーテ風の鎧をつけている。鎧はプラスチックでできているがかなり重く、ヨロヨロしながら蘭の前に歩み寄る。

縄をほどかれた蘭は口からドレスの切れ端を取りだし、カンカンになってわめきたてる。

「もー頭にきたわっ！　こんなアミューズメントパークがあって許されると思うのっ⁉　J×ROに訴えてやるわっ！　♪ヘンだな妙だなおかしい象象じゃないのっ！」

こんな状況でCMソングを歌う蘭のほうが絶対変だが、頭の血管が数本ぶっちぎれているので本人はわかっていない。隆一とナスビを引きつれ、般若もビビる壮絶な形相で次のプレイゾーン『魔法の宮殿』にズンズン入っていく。

「いいこと？　どんな汚い手を使ってもかまわないわ。ユウヤとあの小娘を見つけたら、すぐに捕まえるのよ。パンティを取り戻したら、わたくしがこの手でミンチにして腸づめのソーセージをつくってやるわ！　あーっ、むしゃくしゃするっ！」

「え？　ボスがさがしているのは乳アテ……いや、ブラジャーじゃないんですか？」
聞きかえすナスビの頭を、蘭はパッカーンと殴りつけた。
「パンティって言ったでしょっ？　全くもうっ！　どうしてわたくしのまわりはバカばっかりなのよう！」
一方、ひと足早く逃げだした英里奈は、魔法の宮殿の回廊を歩いていた。
回廊は呪いの森と同じくらい薄暗かったが、壁のところどころにはたいまつがともされていた。石を敷きつめた床を丸々と太ったドブネズミがウロチョロ走りまわっている。
「ユウヤったら、どこにいるのかしら？」
宮殿の内部はシーンと静まりかえっている。不思議なことに、遊園地につきものの『迷子のお知らせ』はおろか、場内放送も聞こえてこない。
突き当たりの木戸を開けると、回廊がふた股に分かれている。その先は両方とも暗くて、どうなっているのか全然見えない。
「どっちへいけばいいんだろ？」
木戸の前に立ったまま考えこんでいると、突然目の前に白煙が立ち昇った。
「きゃんっ！」
英里奈は驚き、思わず尻モチをついた。はずみでドレスの裾がまくれ、おいしそうな太

腿があらわになる。

「魔法の宮殿へようこそ！」

低く太い声が回廊中に響いた。英里奈の頭上に身長2メートルはありそうなマッチョが立っている。『アリババと40人の盗賊』に出てきそうな男で、ぶかぶかハーレムパンツをはき、頭に白いターバンを巻いているが、上半身は裸だ。英里奈に向かってうやうやしくおじぎをし、腕をそっとつかんで立たせてくれた。

「よかった。ここの従業員の人ね。あたし、ユウヤっていう男の人をさがしにきたの。20歳くらいで、すごーくハンサムでエッチが得意な……あやや。とにかく、知らない？」

「いえ、わたしは宮殿の守護魔人、ラチンチと申します。ラチンチの役目は、魔法の宮殿でお困りのプリンセスをお助けすること。なんなりとご命令を」

「プリンセスって、もしかしてあたしのこと？……じゃあね、この回廊をどっちへいけば外へ出られるのか教えて。ユウヤは外に出てからさがすわ」

「アイアイサー！」

守護魔人ラチンチは深々とおじぎをしたと思うと、英里奈のウエストをつかみ、壁の前に立たせた。ドレスの後ろをパパッとまくりあげ、古めかしいデザインのズロースを一気に破り捨てる。たちまち英里奈の可愛いお尻が剝きだしになった。

「ラチンチの役目は硬くしたチ×チ×をま×この穴に入れること。なんなりとご命令を」
「やっ！　なにするのっ⁉」
「そんなのいやっ！　早く出口を教えてっ！」
英里奈は男の腕から逃れようともがくが、ラチンチの力は馬並みに強く、あっと言う間に太腿を押しひろげられる。肩をつかまれ、壁に押しつけられる格好で、バックから野太いチ×ポを入れられてしまった。
「ああーっ！　おっきいっ！　裂けちゃうよぉおっ！」
片手でウエストをつかまれ、宙に持ちあげられる。ラチンチは英里奈の身体を縫いぐるみのように揺すり、硬くそりかえった肉竿を出し入れする。
「ラチンチの役目は好みの美少女を後ろから犯してイカせること。なんなりとご命令を」
「抜いて抜いてぇえっ！　痛いのおーっ！」
英里奈は必死になってラチンチの巨砲から逃れようとする。けれども、尻を振れば振るほどデカい亀頭に肉壁をこすられてしまい、快感がこみあげてきて超たまらない。
「あんあん♡　あうぅ～んっ！　ふみぃぃぃ～ん」
見知らぬ大魔人に犯され、英里奈のマ×コは熱々ホットにじゅくじゅく濡れてしまう。あまりの激しさにたちまちイッてしまい、思わずもらしたおしっこが太腿を流れ落ちる。



だが、ラチンチは簡単には射精しない。硬く怒張した暴れん棒で美少女の花芯を、さらにめちゃくちゃにかき乱す。大きく開いたドレスの胸もとに片手を突っこみ、乳首をひねる。

「もぉ～っ！　英里奈死んじゃうぅん。きっ、もっ、ちっ、いいーんっ！　きゃうっ！」

突然ガツッと鈍い音がし、英里奈は床に投げだされた。目の前に大魔人が倒れこむ。

「全く頭にくるわねっ！　なんだってこんなトコでよがってるのよっ!!」

怒濤(どとう)のような快感の海で溺れかけていた英里奈は、薄汚れたズロースをはき、黒い布の切れ端をビキニ風に胸に巻きつけている蘭を見あげた。後ろには隆一とナスビがいる。

「あ。……やだ、見つかっちゃった」

逃げだそうと立ちあがる英里奈をドンキホーテ＝ナスビが捕まえる。

「バカな女ね。こんなとこで男とやったりしてるからよ。それより、ユウヤはどこっ？」

「知らないわ。これからさがしにいくとこだったんだもん」

「あ、そ。それじゃ、おまえの手間を省いてあげるわ。ほぉ～らごらん、わたくしの魅力でここの全体地図を手に入れたのよ。これをうまく使えばユウヤはイヤでもわたくしたちの前に現われるわ。必ずね」

「『魅力』じゃなくて、『迫力ある脅迫』だろ？」

後ろで隆一がつぶやいたが、蘭の耳には届かなかった。

蘭は英里奈をナスビにまかせ、先に立って回廊を進んでいく。従業員専用の通路を見つけ、地図をたどって次のゾーン『神々の楽園』に出た。

神々の楽園は一般的な遊園地とほとんど同じようなつくりで、メリーゴーランドやジェットコースターなどの遊具があった。その合い間にアイスクリームショップや手づくりクッキーハウス、世界のグルメレストランが点在している。ショップで働く従業員は、それぞれの店のイメージに合わせたユニフォームを着ていた。ちっちゃな森のコビトたちは、ひとくちサイズのミニシュークリームを販売し、ミラクルハウスの魔女たちはハーブティーや『恋の惚(ほ)れ薬』と称したオイル、パワーストーンなどを売っている。

楽園は平坦な土地にあり、あちこちに小さな森を配置してあるので、簡単には向こうが見通せない。けれど、中央にそびえ立つ巨大な時計塔はどこからでもひと目で見つけることができた。

蘭はスモークしたうまそうな豚足(とんそく)が店先にぶらさがる自家製ソーセージのショップには目もくれず、英里奈を連れてズンズン歩いていく。

英里奈は鎧姿のナスビに手首をきつくつかまれ、顔をしかめて問いかけた。

「どこまでいくの？　ユウヤはさがさないの？」

「バカね。こんなに客がいたんじゃ、麦わらの中に落ちた虫ピンをさがすようなもんでしょ？　だから磁石をぶらさげて、虫ピンが自分から飛びだしてくるようにするの。それが賢いやりかたってもんよ」

「磁石？」

英里奈には蘭がなにを言おうとしているのか、さっぱりわからない。だがそれはナスビと隆一も同じだった。けれど、意味を尋ねたりすれば、ただでさえケバ立っている蘭の逆鱗（げきりん）に触れそうなので、黙って後からついていく。

時計塔の前に立っていた若い番人は、木戸を押して中に入ろうとする蘭に声をかけた。

「見目麗（みめうるわ）しき魔法の国の女王様に申しあげます。こちらの時計塔は数百年前にかけられた呪いのために階段が腐って登れなくなっております。申しわけありませんが……」

蘭は最後まで言わせず、隆一が腰に帯びていた剣を取って、番人の首筋に叩きこんだ。番人は低いうめき声をたて、どうっと地面に伏してしまう。

「すげぇな」

「感心してないでそいつを中に隠してちょうだい」

隆一は言われた通り、気絶した番人を時計塔の内側に引きずりこんだ。

「ふんっ！　どこに木の階段なんかあるってのよ？」

エレベーターに乗りこみ、最上階のボタンを押す。四角い箱が動きだすと、今度はナスビに命令した。
「英里奈を裸にひん剝きなさい！」
「いやぁっ！」
必死になってもがいても逃げられない。英里奈はエセ騎士とドンキホーテに白いドレスをビリビリ引き裂かれてしまった。エレベーターがとまると、素っ裸で外に引きずりだされる。
時計塔の文字盤の下には、小さなバルコニーがついていた。
「そこのロープで縛って、吊しておしまい」
ナスビと隆一は裸で暴れまくる英里奈を素早くロープで縛りあげ、バルコニーの手すりから外へぶらさげてしまった。地上までは約18メートル、6階建のビルと同じくらいの高さがあり、地上を歩く人間がまるでアリンコのように見える。
「ふみぃぃーんっ！　怖いよぉーっ！　助けてよぉーっ！　うぇぇ〜ん……」
「ユウヤに聞こえるように、もっと大きな声でお泣き！」
「そうか！　こうすりゃ、男のほうから出向いてくるってわけだ」
ナスビは『磁石』の意味をようやく悟り、感心したようにフンフンうなずく。蘭は全裸

に剝いた英里奈をエサに、ユウヤをここまでおびき寄せるつもりなのだ。バルコニーの陰のボックスからマイクを取りだし、ボリュームを最大にする。

「ユウヤっ！　この女が見えるわね？　おまえの恋人の裸をこれ以上人目にさらされたくなかったら、パンティを持ってさっさとここまで出ておいで！」

「ひーんっ！　恥ずかしいよぉーっ！」

神々の楽園にいる客や従業員全員に自分の裸を見られていると思うと、英里奈は心臓がとまりそうなくらい恥ずかしかった。皮膚の薄い耳も乳房も赤く染めて、モジモジ身体を揺する。

「ちょっとユウヤっ！　聞こえてるんでしょうねっ？　なんなら、今すぐここでこいつを犯したっていいのよ。それでも我慢できるっていうの？　こいつを見捨てるつもり!?」

その直後、ビュッと鋭い音が空を裂き、英里奈の耳もとをかすめてワイヤーがバルコニーの手すりに絡みついた。ハッとして地上を見ると、海賊のお頭＝黒装束の男が、みるみるうちにワイヤーを登ってくる。いや、ワイヤーの先端に小さな巻きあげ機がついていて、お頭の身体をどんどん引っぱりあげていた。あっという間に英里奈の横をすり抜け、バルコニーの内側にひらりと降り立った。

「待たせて悪かったな、悪の化身、ブラッククイーンマンチョス3世よ、いざ勝負！」

蘭は一瞬ポカンとなる。

「なによ、あんたがユウヤだったの？……ちょっと、誰がブラッククイーンマンチョス3世なのよっ!?」

「おまえだ！」

「どーでもいいから助けてよぉーっ！」

英里奈の絶叫を無視し、海賊姿のユウヤとブラッククイーンマンチョス3世……もとい魔法の国の女王姿の蘭が対峙する。

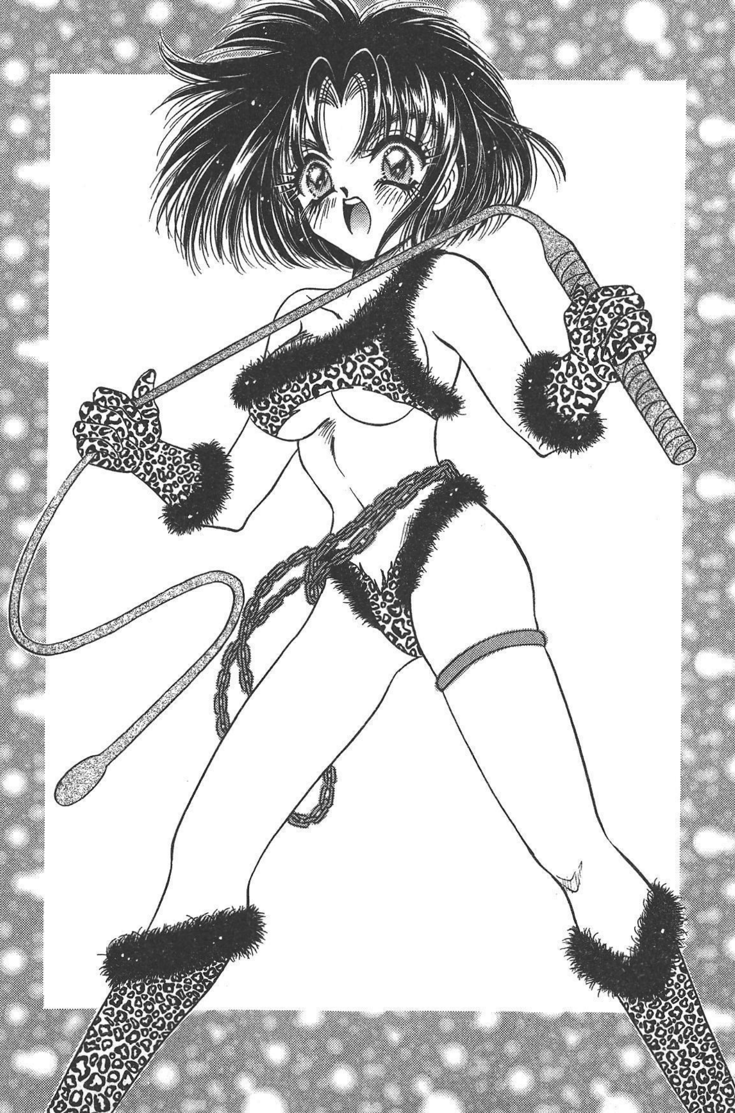
「おまえたち、やっておしまい！」

決まり文句が出たと同時に、隆一がユウヤに飛びかかる。ふたりの足場は狭く、タタミ6帖ほどしかない。互いに頭上に振りかぶった偽物の剣で、相手を殴り倒そうとする。ガギッと鈍い音をたて、剣と剣がぶつかり合う。隆一はユウヤの力に押され、とうとうバルコニーの端まで追いつめられた。上半身を弓なりにのけぞらせ、必死に落ちまいとふんばる。

「白鳥っ！　見てないでおまえもやっておしまい！」

おおおっ!!　とうとう明らかになるナスビの本名！　なんとそれは『白鳥淳』だった。白鳥ナスビ淳は急いで剣を抜き、ふたりの戦いに混ざろうとタイミングを計る。

「そうはさせないわ！」
声が響き渡り、バルコニーの外に吊された英里奈以外の４人の目がエレベーターの前に集中する。
そこには猛獣使いのコスチュームを身につけた菊華が立っていた。肌にピッタリくっついたタンクトップを突きあげて、硬くなった乳首がぽちっぽちっと浮きでている。ハイレグパンツは皮製の超ミニミニだ。10センチヒールのロングブーツのせいで脚がやたらと長く見える。
菊華は黒くて太いムチをビシーッと床に叩きつけた。
「クソッ！　このアマっ！」
「おとなしくおしっ！　でないとこのムチが飛ぶわよっ！」
と言う前にムチが飛んでいた。菊華に飛びかかろうとする白鳥ナスビの首へ蛇のように巻きつき、ぐいぐい締めつける。ナスビの顔がたちまちどす黒く変色する。
——時計塔をご観覧中のお客さまにお伝えいたします。バルコニーから身を乗りだすことは大変危険ですからおやめください。繰りかえしお伝えします……——
「ふみぃいん、助けてぇっ！」
蚊の鳴くようなか細い英里奈の声を聞き、ユウヤの集中力がふっと乱れた。隆一は隙を



ついて身をかわし、海賊の体を横へ突き飛ばした。
「うおっ！」
ユウヤは支えを失い、はずみでバルコニーの外側へ投げだされた。その瞬間、隆一の肩をつかみ、死なばもろとも状態になる。
「うわあぁあーっ！」
バランスを崩した隆一は、あっという間にユウヤともども時計塔から落ちそうになり、必死になって手すりにつかまる。
「きゃあーっ！」
目の前に皮のパンツに包まれたユウヤの脚が出現し、英里奈が悲鳴をあげた。
蘭は隆一を引きあげ、コンクリート製の手すりにぶらさがるユウヤを覗きこんだ。意地悪くユウヤの指を1本ずつ引き剝がしながら尋問を開始する。
「パンティはどこなの？　正直に言えば今すぐ助けてあげてもいいわ」
「ふんっ！　言っとくけどな、あのパンティはオレは持っちゃいないぜ」
「なんですって!?」
ユウヤは汗で滑る指先に力を入れ、バルコニーによじ登ろうと両脚をジタバタさせる。両手がしびれ、今にも落ちそうだ。

「パンティとフィルムはDPE屋をやってるオレのダチに預けてきた。返して欲しいならオレと英里奈を助けるんだな」
蘭の顔色が学校長に放校を宣告された大学生のように真っ白くなる。唇の端をわなわな震わせながら呆然と虚空を見つめる。
「英里奈っ！　しっかりして！」
とうとう白鳥ナスビをやっつけた菊華が英里奈の縄を引きあげようとする。けれども、45キロの英里奈の身体を吊るしている縄は、菊華ひとりの力ではビクともしない。
「お待たせぇっ！　謎の美剣士登場よぉんっ！」
振り向いた菊華の前に男装の麗人が立っていた。腰まであるたて巻きロールのブロンドヘア。八代×紀風こってり白く壁塗りした肌に、ラズベリーピンクの唇。純白の絹に金糸銀糸でししゅうをした丈の短いジャケット。カボチャみたいな緑色のちょうちんブルマーの下から、白いタイツの大根脚がにょっきり出ている。宝塚歌劇団の男役も真っ青になって気絶しそうなその人こそは、つぶれトマトことオカマのユリオくんだった！
「プリンセス英里奈、しっかりなさって！　今すぐこのあたくしが助けてさしあげてよ」
謎の美剣士ユリオは菊華を押しのけ、ロープをつかんでぐいぐい英里奈を引きあげる。バルコニーの内側に降り立った英里奈はガタガタ震えながら、青白い顔でユリオを見た。

「た、助けてくれて、ありがとう」
「いいのよ。あたくしたち、親友ですもの!」
「この野郎っ! 裏切りやがって!」
菊華のムチで両手足を縛られたナスビがぎゃあぎゃあわめきたてる。
「おいっ! オレはどうすんだよっ?」
3人はあわててユウヤを助けあげた。
「ったく、薄情なやつらだぜ」
「ごめんってばぁ! だってぇ、あたしだってそれどころじゃなかったしぃ」
英里奈はブツブツ言いわけしながら、ふと、蘭に目を向けた。
蘭はその場にペタンと座りこんでいた。悲しげな顔に涙がいく筋も流れている。
「ねぇ、どうしてあのパンティが必要なの?」
「蘭はパンティが欲しかったんじゃない。股ぐらのところに縫いこまれたフィルムが必要だったんだ」
いつの間に昇ってきたのか、森の木こり姿の原田がエレベーターの前に立っている。
「フィルムって?」
「言わないでぇっ!」

蘭がヒステリックに叫んだ。原田はそれを無視して答える。
「10歳前後の日本人の女の子が出演した幼児ポルノのフィルムだ。アメリカで撮影されて通販でその筋のマニアに売られている。蘭はそのフィルムをネタに強請られていて……」
「どうしてあんたがそれを知ってるのよっ？」
「蘭、きみあてで編集部に届いたランジェリーを黒須裕也、すなわち英里奈ちゃんの家に送ったのはオレなんだ。出版される本のすべてがベストセラーになり、大金を得ているはずのきみが、一文なしに近い状態なのが不思議でね。ユウヤに手伝ってもらって強請られている原因を調べていたんだ」
英里奈はキョトンとしてふたりの男を見くらべた。
「ユウヤと原田さんって、知り合いだったの？」
「うん。大学の同期なんだ。蘭あての郵便物をわざと誤送すれば、英里奈ちゃんは危険な目にあうかもしれない。だからユウヤにボディガードを頼んだんだ」
「そうだったんだ……」
「英里奈ちゃんは前からうちの会社のポスターをすごく気に入ってただろ？　実はユウヤがあのモデルなんだ」
「えーっ、本当にぃ⁉」

原田は平然とうなずき、蘭に目を向ける。
「きみを脅迫している犯人はわかっているのか？」
「そんなもん、わかってたら苦労しないわよっ！　これで脅迫は最後にする、それが犯人との約束だったのよ。おまえたちがよけいなことをするから、こんな騒ぎになっちゃったんじゃないのよっ！」
「なぜ警察に通報しなかったの？」
「ファンレターを装って送られてきたフィルムの切れ端には、他人には絶対に知られたくない、わたくしの過去が映っているわ。あんなもの、警察には持ちこめない。そんなことをしたら、たちまちさらし者にされてしまうもの。いくらポルノ小説を書いていても、それだけは絶対にイヤよ！　過去の汚点を公表されたくないの！」
英里奈は涙ぐむ蘭を見つめながら、ポツッとつぶやいた。
「警察に言えないことでも、友達に相談すればきっと助けてくれたのに……」
「友達なんかいないわっ！　こんな、こんな身体なんだもの！」
「ちがう。友達になるのに身体なんか関係ないよ。大切なのは心だもん。お互い、どれくらい心を開いてつき合えるか、困ってる時助け合えるかが大事なんだもん」
英里奈は蘭の腕をそっとつかみ、立たせてやった。

「今までいやなライバルだと思ってたけど、これからは友達になれそうな気がするの。いろんなことを話して、理解し合えるような気がするの……。ねっ？」
蘭は複雑な表情でソッポを向く。英里奈の手を振り払い、なにも言おうとしない。
「フィルムを送ってくる犯人をあたしたちで捕まえよう。お得意の想像力を働かせて犯人を見つけだそうよ！」
「オレも手伝うぜ。最初からそのつもりだったしな」
ユウヤも英里奈の言葉に賛同する。
うつむく蘭の頰を新たな涙が伝った。泣き笑いの表情になって、その場にいるみんなの顔を見まわす。
「とりあえずお礼を言っておくわ。ありがとう」
蘭はどうしても高飛車(たかびしゃ)な態度がやめられないようだった。
——時計塔でご観覧のお客さまにお伝えします。みなさんは包囲されました。ただちに人質を解放し、エレベーターでお降りください。繰りかえします……——
わけのわからぬ場内放送が流れはじめ、英里奈たちは顔を見合わせた。
「ひょっとして、人質ってあたしのこと？」
「だろうな？　素っ裸でぶらさがってたのはおまえだけだし」

「うそでしょう⁉　英里奈っ、どうすんのよっ⁉」
「そんなの、わかんないよぉっ」
「人質いるところに犯人あり、ってんなら、人質がいなくなりゃいーんじゃん」
ユウヤが裸の英里奈をひょいと肩にかつぎあげた。
「ほんじゃな。またあとで」
ユウヤは英里奈の裸身を荷物のようにかついだまま、バルコニーを乗り越える。
「おいっ！　どこいくんだ⁉」
「神々の楽園スペシャルゾーンさっ！」
ニッと笑い、手すりにくっついたままの電動巻きあげ機つきワイヤーをはるか下の森をめがけて発射した。英里奈にとめる間も与えず、地上めがけて滑降を開始する。
「きゃーっ！　怖いよーっ！」
英里奈の絶叫は時計塔を見あげている人々の頭上を飛び越え、森の中へと消えていった。
「らっ⁉　目算狂ったぜ」
ふたりの身体は木々の間をすり抜け、人工池の中にぼっちゃり落っこちた。ユウヤは、苦笑いしながら英里奈を芝生に引きあげる。
「ふみぃ〜んっ！　鼻に水が入ったぁ」

「我慢しろよ。いま乾かしてやるから」
「どうやって？」
ユウヤは答えず、濡れねずみの英里奈を芝生の上に押し倒して、プルプル震えている乳房に舌を這わせながら、おま×こに手をのばす。
「あんっ！　やぁ～ん。誰かに見られちゃうぅん」
「平気だって。ここは従業員しか知らない神々の楽園スペシャルゾーンなんだ。叫ぼうがわめこうが、誰も気づきやしない、って設定になってる」
「んはぁん♡　そんなのいやぁん」
「誰かに見られたいってのか？　見かけによらず、プリンセスはスケベなんだな……。あ、もう濡れてるぞ。素っ裸で人前に吊るされて、感じちゃったのかな？」
「そうじゃないってばぁっ……はぁあん！」
口では否定をするものの、英里奈のマ×コは濡れぬれだ。池の水とはちがうぬらぬらした液が秘孔の奥から溢れている。指でチュクチュクいじられただけで、クリ×リスは勃起し、陰部全体が熱っぽく充血してくる。乳首はとっくに硬くしこっていた。
「いやぁん」
「チ×ポを入れてくれなきゃいやぁん、てか？」

英里奈は真っ赤になってユウヤの股間でそりかえっている剛直から目をそらす。無意識のうちにヒップをもじもじさせて太竿を誘惑してしまう。
「1発目は海賊のように、ワイルドにバックからま×こを犯られたいか？　それともお口でご奉仕してくれるか？」
「ゆ、ユウヤの好きなようにしてぇ。いっぱいいっぱい欲しいの。おっきなペニスをおま×こに出したり入れたりして、ブルブル動かして欲しいよぉっ！」
ユウヤは敏感な蜜壺の入り口を指でいじられ、よがり声をたてる英里奈を四つん這いにさせた。プリッとした尻の中央に元気棒を突き立てる。
「ひぁあ〜っ……ふはぁあん！　いっぱいなのぉ。イッちゃうよぉおっ！」
「えっ、英里奈っ⁉」
聞き覚えのある声が聞こえ、英里奈はハッと顔をあげた。池の向こうに妖精の衣装をつけたお母さまと僧侶姿のお父さまが立っている。
「きゃーっ！　どっ、どうしてこんなところに⁉」
「どうしてって、どうして桐島さんのお坊ちゃんが英里奈とこんなところに⁉」
絶句するふたりの目は英里奈ではなくユウヤに向けられている。
ユウヤは英里奈の狭間にペニスを突き立てたままで、ポカンと口を開いていた。


Zuchu

「その……こんな格好で失礼します。先日の見合いは欠席してすみませんでした。でも、安心してください。お嬢さんとは心も身体もバッチリ相性が合うようで……」
「嫁入り前の大事な娘をよくもキズ物にしてくれたな。成敗してくれるーっ！」
激昂して池を横切ろうとするお父さまを、お母さまがはがい締めにしてなだめる。
「ふたりはきっと最初からこうなる運命だったのよ。さぁ、わたしたちも英里奈に負けずに愛をかわしましょう。せっかく特別料金を払ってスペシャルゾーンへきたのですもの」
英里奈はお父さまを強引に別の茂みへ連れこもうとするお母さまが、衣装の下にナスビたちがさがしていた黒いブラをつけているのに気がついた。
「いつの間に持ってっちゃったのかしら？」
英里奈は不思議そうな顔で肩越しにユウヤを見あげる。
「ねぇ、あなた、あたしのお見合い相手だったの？」
ユウヤはうなずき、チ×ポを入れたまま英里奈の太腿を抱えてあおむけにさせる。
「見合い相手の写真はまだ見てなかったんだ。英里奈が相手だと知ってたら、見合いをすっぽかしたりしなかったのにな」
「そうだったんだぁ……」
英里奈は乳房を愛撫するユウヤの腕に指を滑らせ、ポッと頰を染める。

「もしかして、あたしのこと、気に入ってくれた？」
「ああ。えっれぇエッチな身体もスーパースケベな脳ミソも、まるごと全部な」
両腕を突いて上半身を起こす英里奈の白い肩に唇を押しつける。
「じゃあ、もっとブルブルしてくれる？」
「もちろん。オレのチ×ポはそのためにあるんだからなっ！」
ユウヤは言葉通りに硬く勃起した巨砲を膣の中で律動させる。
「これからは飽きるまでたっぷり犯ってやるから、いい仕事しろよ。なっ？」
英里奈はうなずき、紅潮した頬に笑みを浮かべて快感の渦に巻きこまれていった。

☆

郊外にあるマンションの一室で、若い女が風呂場の鏡の前に座っている。大きな鏡には一糸もまとわぬ裸身がすっかり写っている。
ふっくらした頬。小さな唇。ひと昔前のキネマで活躍していた女優のような品のある美貌。清楚（せいそ）な雰囲気を持ちながら、同時にどことなく男好きのする色香を漂わせ、大きな黒い瞳には捨てられた子猫のように悲しげな色を浮かべている。
女は、身体検査するように、自分の身体を触りはじめる。形のいい大きな乳房。ポチッと飛びだしたピンク色の乳首。細くくびれたウエストの下は緩やかなカーブを描いて大き

な尻へとつづいている。肌はみずみずしく、ピンと張りつめている。

「ここにいたのか？」

ドアが開き、白髪の男が入ってきた。ワイシャツ姿で女を背後から抱きしめ、骨張った手を乳房にのばす。柔らかな肉球を揉みたてながら、指腹で乳首をこすりはじめる。

「どうだ、新しく生まれ変った気分は？」

「そうね、まだ少し、鏡に慣れていないのだけど……」

「もう少し時間がたてば、違和感などすぐになくなるだろう」

男の手は平べったい腹部を滑り降り、小さなシャワーの雫をまぶした若草の茂みに到達する。シャボンで清めたばかりの包皮をめくり、薄紅色の肉芽を露出させる。感じやすいクリ×リスはほんの数回嬲られただけで、プクッと硬くしこってくる。

「あふっ……。今日は堪忍して……」

「おま×こをいじられるのが好きなんだろう？　見ろ、もう濡れているじゃないか」

鏡に映った女の狭間はとろとろと愛液をしたたらせている。秘唇を指でひろげられ、蜜壺をかきまわされて、背筋にゾクッと震えが走る。

「だめっ……。今日はダメなのっ……」

「命令だ。四つん這いになってケツを差しだせ」

女は肩を押されるまま、脱衣所の床に両手足をつく。大きな桃尻を高くさしあげ、潤んだ瞳で肩越しに男を見つめる。
「き、今日はなにを入れてくださるの？」
「野菜の形をしたバイブだ。ナスビにニンジン、キュウリとダイコンもあるぞ。そうだな、今日はトウモロコシを入れてやろう」
女のアヌスが期待を示すようにヒクヒク動く。男は原寸大のトウモロコシそっくりにつくられた大人のオモチャの表面に、通販で買ったラブローションをたっぷりたらした。菊門を指でこねくり、黄色いツブツブのついた棒を秘穴に押しこむ。
「あひぃ〜っ！　太い……っぐぅーっ！」
肉襞を裂かれる痛みに耐え切れず、腰を引いて逃げようとする女のウエストをつかんで思い切りぶちこむ。次に、柄の部分から出ているコードの先端についたスイッチを入れる。すると、黄色い野菜はプクプクした表面で女の直腸を刺激しながら、イモムシのようにのたうちまわる。
「はぅっ！　ふっ、深いっ……はぁあっ、ああっ……」
「尻の穴をえぐられて悦(よろこ)ぶとは、顔に似合わず淫乱な女だ」
女の黒い瞳は欲望で濁り、唇は溢れたよだれで濡れている。

「あんっ、いっ、入れてっ！　おま×こにも欲しいのっ！」
「チ×ポが欲しかったら自分で入れるんだ」
若い女はアヌスにオモチャを入れたまま、床の上に横たわった男の下半身をまたいだ。半勃ちになっている男根をつかみ、濡れた美唇で咥(くわ)える。チロチロと舌先で刺激しながら竿を両手でこすりたて、みるみるうちに充血して硬くなった肉筒の先端をま×この穴に押しつける。トロトロの蜜にまみれた淫ら壺は、抵抗ひとつせずに硬直を受け入れた。
「ひぁっ！　いっ……いいっ！」
ふくよかなヒップを上下させると、愛液でぬらつく狭間を太竿がずりゅずりゅっと出入りする。亀頭のエラで肉壁を引っかくようにこすられ、激しい快感が雷(いかずち)のように全身を貫く。唇をわななかせ、乳房を揺すって絶頂へと昇りつめていく。
「いいぞっ！　由美子っ！　もっと動いてみろっ！」
「その名前を言わないでぇっ！」
女は叫び、背中をのけぞらして痺(しび)れるような快感をむさぼる。薄れゆく意識の中に、カメラに向かって原稿を読みあげる理知的な女の姿が浮かびあがっている。その名は森丘由美子。由美子がメディアから姿を消して、3カ月がすぎようとしている。
由美子が失踪(しっそう)した半月後、彼女の貯金口座は何者かによって解約され、その金の行方は


Ahha...
Jupu Jupu!!
Vi Vi Vi...

警察が調べても全く足取りがつかめなかった。

女は栗色に染めた髪をかきあげ、騎乗位でよがりながら頭の中でつぶやく。

この美貌と肉体があれば、どんなものでも手に入れられるわ。偽名のパスポート。航空チケット。完全な自由。新たな未来。もうなにも怖くないわ。今までのわたしとはちがう、新しい顔、新しい身体さえあれば……。

3カ月前、森丘由美子と呼ばれていた女は、いま新たな未来へ踏みだそうとしている。

【おわり】

あとがき

もう！　どうしてあたしってこんなにHなのかしら？

これじゃまるで、色情狂の自叙伝みたいじゃない！　最初から最後まで、ずうっとエッチばっかりしてるんだもの。自分でもやんなっちゃうわ。

いろんなことを思いだして書いてるうちに、恥ずかしいところが淫らな液でヌルヌルになっちゃって、すごぉく切なくなってきちゃうし……。あーんっ！　やだな、もう！　ひとりエッチって気持ちはいいけど、あとがむなしかったするんだもの。ねっ？

だけどこれからは安心して。あなたがこの本を読んでいる時、どこかで英里奈や由美子の経験したことを思いだす時、わたしはあなたのそばにいるから。

嘘をつくな、と言わないで。たとえそれが不可能なことだとしても、わたしはそんな気持ちでいたいの。悲しい時や苦しい時、つらい時には、いつでも想像してね。

柔らかな光の中で、わたしはあなたの裸の胸に頬をうずめている。かすかに湿った唇を日に灼けた肌に押しつけ、何度もキスを繰りかえす。

わたしの身体、甘い香がするのに気がついた？　あなたのためにコロンをつけたの。首筋、乳房の谷間、膝の裏側。そして、大切なところに。

唇で乳首に触れてみてもいい？　あなたがわたしにしてくれるように、わたしもあなたの小さなつぼみを愛撫してみたいの。指でつまんで、舌で舐めるわ。ええ、もちろんこういうことをするのは、あなたが初めてよ。

……ううん。わたしのことは心配しないで。わたしは、あなたが幸せな気持ちになってくれればそれでいいの。

男の人って本当に大きい。だから、たくさんキスをさせてね。

手も脚も体のあちこちに生えている産毛すらも、たくましいのね。大きな胸。筋肉が発達していてすごく男らしいわ。

ねぇ、あなたのここ、触れてみてもいい？　全然気持ち悪くなんかないわ。柔らかで、すべすべして、先っぽがプヨプヨしてる。……あ、硬くなってきたみたいよ。根元のほうから少しずつ充血していくのね？　こんなの、初めて。やっぱり、女の子とはちがうのね。

あんっ！　すごい！　ドクドクしてるわ。まるでちっちゃな心臓が内蔵されているみたい。わたしの手の中で脈打っているの。なんだか怪獣みたいで可愛い♡

口に入れてみてもいい？　あなたのすべてを知りたいの。暴れん棒さんの長さと太さと、香、それに硬さも。んっ……おっきすぎて、全部口に入らないわ。わたしがヘタなのかしら？　でも、ホントに長くておっきすぎるわ。かわりに、舌の先でペロペロって舐めてみてあげる。あなたの弱点を知りたいの。だって、いつもわたしが先にイッちゃうんだもの。今日こそはわたしがあなたを先にイカせてあげる。ねっ？

張りつめた肉竿を指でしごいて、亀頭の先割れを舐めて吸いあげるわ。白いミルクは、お口の中に出して。全部呑みこんであげるから、熱いのをいっぱいちょうだい！

ああっ、すごいわ。いま射精したばかりなのに、もう硬くなってる。今度はオッパイに挟んでモミモミってしてあげる。わたしのCカップバスト、きらいじゃないでしょう？

その次は、アナルに？……ええっ⁉　でも、わたし、アナルはちょっと……。

ううん。そうね、あなたのためならなんでもするわ。赤くなるまでお尻をぶって、乱暴に犯してくれてもいいの。それがあなたの望みなら、なんだってしてしてあげる。

あなたを幸せにすることが、わたしの幸せだから……。

紅　くりす



フランス書院
ナポレオン文庫

——Fカップ女子高生は♡♡作家!?——
ただいま執筆中!

著　者　紅(くれない)くりす
挿　画　猫島(ねこじま)　礼(れい)
発行所　フランス書院
　　　　東京都文京区後楽2-23-7　〒112
電話　03-3818-2681(代表)
振替　00160-5-93873
印刷　誠宏印刷　　製本　宮田製本

ISBN4-8296-2049-8 C0193



9784829620496



1910193005401

ISBN4-8296-2049-8

C0193 P540E

定価540円（本体524円）

ウップ女子高生
英里奈は
情バージン娘。
も、実は人気の
覆面ポルノ作家。
誰にもナイショなのに、
突然サイン会が決定しちゃって、
もー、どーしよー!?
紅くりす＆猫島礼の
超過激お姉さまコンビが贈る
スペシャル悩殺ハリケーン!!

FRANCE SHOIN NAPOLEON BUNKO
フランス書院
ナポレオン文庫